君がいない春でも

彩杉　厚智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君がいない春でも

【Ｎコード】
Ｎ５２９２Ｊ

【作者名】
彩杉　厚智

【あらすじ】
引きこもりの透の前に突然現れた千春。透をお兄ちゃんと呼び傍を離れようとしない彼女に透は次第に心を開いていく。

1

なぁ、千春。
今でもよく思うんだ。
俺たちにはこんな結末しかありえなかったのかなって。

竹笛のような高く鋭い音をかき鳴らして風が冬の夜を吹き荒れている。先ほどまでボツボツと窓に当たっていたのは、おそらく水分を多く含んだ霙のような雪が降っていたのだろう。それがいつの間にか止み、代わりに今は強さを増した風がガタガタとサッシを揺らしている。分厚い雪雲に覆われた空からの横殴りの凍てつく北風が部屋の窓に激しくぶつかっているのだ。

この風は当分吹き続けるだろう。やがて風がおさまった後には再び雨と雪の合いの子のようなものが降ってくる。そしてその後にはまた冷たい風。今年の冬はずっとその繰り返しが続いていた。

ピンポーン。

不意に響いた呼び鈴の音に神谷透は反射的にビクッと全身を縮めた。急激に心拍が早まる。全身から呼び集められた血液の奔流が心室の壁を内側から突き破らんばかりに圧するのが息が詰まるような痛みとともに実感できる。ドクンドクンと透の肩を揺するほど強く大きく心臓が拍動している。透は胸の痛みを堪えながら物音を立てないようにそっと耳からイヤホンを外し、ゆっくりと顔だけで玄関を振り返った。

ドアの向こうに誰かがいる。

その場で足踏みをしているのだろうか。微かに小刻みな靴音が聞こえてくる。

よくあるのは布教活動の類だ。新聞の勧誘も少なくない。

どちらにせよ透には迷惑千万だった。頼みもしないのにどうして世間は俺にちょっかいをかけてくるのか。透は一人きりでいたかった。自分だけの限られた空間に暮らし誰の目にも触れることなく誰とも関わることなく何も考えずにただ過ぎていく時間に漂い流されていたいのだ。

透は視線を戻してビデオデッキの小さな時計表示に目を凝らした。六時二十分。おそらく夜だろう。この季節では午前でも午後でもこの時刻に締め切ったカーテンの隙間から日が差し込むことはない。従って先ほど起きたばかりの透にはこれから一日が始まるのか、それとも終わるのかすぐには判断がつかなかったが、冬の午前六時過ぎに訪問者はふさわしくない。そもそもこの部屋に訪問者などふさわしくないのだが。

透は居留守を決め込むつもりだった。いつものように身動き一つせず己の存在を消し、ただひたすら相手が諦めてくれるのを待つ。頼むから俺を放っておいてくれ。誰とも関わりあいたくないし喋りたくない。気が付けばこたつ一つの寒々しい室内で額にじわじわと汗が浮かんできている。

ピンポーン。ピーン・・・ポーン。ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

呼び鈴が狂い鳴る。間を空けたり連打したりと鳴らし方がどこか子供じみている。それだけに透には恐怖だった。知り合いでこんな他人迷惑な鳴らし方をする輩を透は知らない。だとすれば性質の悪い酔っ払いが部屋を間違えたのか。だとしても、招かざる客に優しく言って聞かせることも、逆に人迷惑だと叱りつけることも透には思いもよらなかった。雪越しの雷のようなものだ。ただただ身を潜めてさえいればそのうち遠ざかっていく。

尻を滑らせて少しずつ身体を壁に寄せる。ドアが閉まっている以上、こちらの様子が相手から見えるはずはないのだが、自分の姿を玄関から死角に位置させなくてはどうにも落ち着かない。こちらの都合も考えず勝手に押しかけてきた奴が悪いのにどうしてこの部屋

の主人である俺が肩身の狭い思いをしなくてはいけないのか。
「おーい、と、お、るぅ。いるんだろ？開けろよ」
その声で透は風船の結び目を外したように一気に息を吐き身体の強張りを弛緩させた。声の主は新聞の営業マンでもカトリック信者でもない。兄の和馬だった。しかし、そうと分かっても透は腰を上げることを躊躇った。実の兄であっても会うのが億劫であることは変わりない。たとえ誰であっても透にとって自分が支配できる唯一の砦であるこの１Ｋが自分以外の人間に侵されることには抵抗があった。
「おい。外は寒いんだよ。さっさと開けろや！」
部屋の中に透が息を殺して潜伏していることに微塵の疑いも持っていないかのように和馬は急に苛立ちを露わにしてドンドンと大きな音を立ててドアを叩き始めた。ノックなどという生易しいものではない。それこそ雷鳴のように辺りに響き渡る。和馬の性格からして放っておくとそのうちドアを突き破りかねない。このままでは何事かと人が寄ってくるだろう。
透は観念したようにのっそりと玄関に向かいドアの鍵を外した。途端にすごい勢いでドアが外側へ引っ張られた。同時に流れ込んできた寒風が透の頬に突き刺さってきた。
「おいっす。暖冬暖冬っっても、やっぱ冬は寒いな」
和馬は挨拶代わりに片手を挙げると透の許しを得ようという素振りも見せず、面倒くさそうに靴を脱いでそそくさと部屋に上がっていった。呆然と見送る透の背後で風に押されてドアが勢い良く閉まり、それに驚く透を尻目に和馬はこの部屋の主人のような堂々とした仕草でこたつに足を伸ばしている。
「何で豆電球しか点けてないんだ？」
明るいのが嫌いだからだよ。
弟がそう言ったら和馬はどんな顔をするだろうか。しかし透は何も言わず壁のスイッチを押して天井の灯りを最も明るくした。当然予想される「どうして明るいのが嫌いなのか」という質問をされた

ときに理由を説明するのが面倒だったからだ。
蛍光灯に部屋中が照らされてハッと息を飲んだのは数ヶ月ぶりにやってきた和馬ではなく、この空間の主である透の方だった。前回会ったときには明るめの茶色だった和馬の髪が今は鮮やかな黄緑色になっているのだ。長さも色も丁度競馬場の芝を思い起こさせる。その到底人間的ではない髪の色に開いた口が塞がらず透は何度も目を瞬いた。昔から目立ちたがり屋でいつも突飛なことをしては周囲を驚かせる和馬だったが、この色の選択も透には全く理解が及ばない。透の豆鉄砲を食ったような顔つきを確認して和馬は得意げに頬を緩めた。
「ちょっと役作りでな。似合うか？」
和馬は劇団に所属しているらしい。舞台を見に行ったわけではなく真偽を確認したわけではないが和馬の言葉を信じれば彼は舞台俳優なのだそうだ。しかし、若草色の髪とは一体どんな役柄なのだろうか。芝の役だと言うのなら納得もできるが。
いつまでもしてやったりといった表情で見上げてくる和馬に嫌気が差してくる。和馬が満足するようなリアクションをとってしまった自分にも腹立たしい。透は黙ってトイレに向かった。手を洗い戻ってくると無視されたのが気に入らなかったのか和馬は不機嫌そうに声を荒げた。
「きったねぇ部屋だな。少しは掃除しろよ。これじゃ急にお客さんが来たときに困るだろ」
明るく照らされた部屋の中を見回して和馬は大げさに顔を歪める。大きなお世話だ。来て早々、人の世界に文句をつけるよそ者にむっとするが透は出かかった言葉をぐっと飲み込んだ。確かに和馬の言うことにも一理あるのだ。
部屋には所構わずペットボトルや菓子袋などが散乱しており無事なのは透が座っている座椅子の上ぐらいものだった。その座椅子もよく見ればジュースの染みや菓子の欠片などで清潔と呼ぶには程遠い。しかし分かっていても掃除機をかける気など起こらない。どう

せ掃除などしなくても人間は死にはしない。和馬以外にこの部屋の中に来る客など世界中を探しても見つかりはしない。
「またゲームしてたのか。ったく、よく飽きないな」
テレビの画面を指差して和馬がまた余計なことを言う。
「ほっとけよ」
呆れ顔で寒そうに両手をこたつに突っ込んでいる和馬のもこもこしたダウンジャケットの背中に透はぼそっと今日最初の言葉を発した。
「まぁまぁ、座れや」
何となく居心地の悪さを感じて手持ち無沙汰に突っ立っていた透に向かって和馬が手招きして家主のような口を利く。透はしぶしぶ腰を下ろすとコントローラーに手を伸ばしゲームの続きを始めた。何か足りないと辺りを見回し床に落ちていたイヤホンを耳に差す。戦闘シーンの聞きなれたメロディーが少しずつ透に平常心を取り戻させる。
「この前出たファイナルファンタジーか」
もちろん聞こえているが透は無視した。こちらの興味のありそうな事柄を餌に会話のきっかけを掴もうとしてくる魂胆が見え見えの隣人が煩わしかった。
和馬が舌打ちするのが視界の隅に映る。
頼みもしないのに無理やり部屋に上がりこんできて、こちらが会話の成立に協力しないとあからさまに不機嫌な表情を見せる。何と理不尽な話だろう。やはり、てこでもドアを開けなければ良かったと後悔して透はその腹いせに雑魚モンスターに高度な魔法を仕掛けた。あえなく雑魚キャラは死滅し戦闘はあっけなく終わって弱い者いじめをしたときのような後味の悪さだけが残った。胃がキリキリし始めた。げっぷとともに咽喉元まで胃酸が逆流してきて食道に酸っぱいような痛みが走る。
「今日は大晦日だぞ。部屋に燻ってないで、どこか行けよ」
どうして大晦日だと外出しなくてはならないのか透には理解でき

なかった。部屋に燻っていることがいけないことだという感覚も持ち合わせていない。ついでに言えば今日が大晦日だということさえ透は失念していた。

「何時間も一人でゲームなんかしてたらホント頭腐っちまうぞ。大掃除するとか、正月の買い物するとか。他に何かすることがあるだろうよ」

自分こそこんなところに来て油を売ってないでそうすれば良いじゃないか。物臭な兄の性格からは恐ろしく不釣合いな提案は噴飯ものだった。

「なんだよ」

気づかないうちに顔が笑っていたようだ。不気味だと思ったのだろう。和馬はうろたえながらも兄の威厳を守ろうと努めて厳めしい声を出したようだ。透は即座に無表情に顔を整え、ゲームに意識を戻した。和馬のことなど無視をするのが一番だ。ゲームは佳境に差し掛かっている。集中してやらないと痛い目を見ることになる。

「そうだ。そうそう」軽い調子で和馬が切り出す。「お前、実家に帰ったらどうだ」

それこそ和馬に勧められるとは思っていなかった言葉だった。鳩尾の辺りに不快感の塊のようなものが競りあがってきて全身がカッと熱くなり、透は指を止めて目を閉じた。こらえようとしてこらえきれず気が付いたときには言葉が口からこぼれていた。

「あんたに言われたくない」

透の返事に和馬は軽く目を見開いた。何かを言いかけたのか、それとも言おうとしたことを忘れたのか。和馬は音として完成しなかった腑抜けな空気を咽喉から漏らした。兄弟の間に尻の落ち着かない妙な空気感がはびこる。どうにもゲームに集中できない。コントローラーを床に叩き付けたい衝動に駆られる。血の繋がっていない他人だったら和馬のような自分勝手な人間とは絶対に口なんかきかないのに、と今まで何度となく考えたことがまたもや頭を過ぎった。

「そりゃ、そうだわな。こりゃ傑作。ハハハ」

和馬の白々しい作り笑いが余計に二人の間に距離を作るのだが、透は無視してコントローラーを握り続けた。今さら、和馬との仲を取り繕ったところで良いことなんかあるはずがない。兄弟愛など遥か昔に冷め切っている。そもそもそんなものがあったのかどうかも疑わしい。

和馬と透の親は寂れた田舎町で小さな工場を経営していた。一刻者の父と日参して返済を懇願する銀行員。むっとする潤滑油の臭いと吹き抜ける青い風。機械が回るかしましい音と大空に羽ばたく鳥の鳴き声。貧しさと諦観。退屈と閉塞。早すぎる母の死。何とかして早くこの町を出たい。兄弟は互いに口にしなくても相手がそう思っているのはよく分かっていた。何故なら自分が強くそう願っているからだ。同じ境遇に育っているのだから自然な成り行きなのだ。

年子であっても上は上。先に達成したのはやはり兄の和馬だった。上京して俳優になる。振り返って考えれば和馬にとって理由は何でも良かったのではないかと透は思う。何を言っても父に反対されることは分かっていたのだから。和馬は高校に入学するや一年間バイトに明け暮れ半ば家出するように町を離れていった。出て行く前に父親と取っ組み合いの大喧嘩をしたのは和馬なりに一応仁義を切ったつもりなのだろう。残された透は石を噛むような思いで一層機嫌の悪くなった父親の厳しい監視の下、さらに青春の日々を浪費する破目になったのだった。結局三年後父親の知らないところで遠方の大学を受験し逃げ出すように故郷を去って今に至っている。

「よーし、飯食いに行くぞ。飯だ」

プロレタリアの示威行動のように右手を突き上げ突如和馬が立ち上がった。透はちらっと目の端に捉えたが再びテレビ画面に戻っていった。

「いい」

「いいって、お前、飯食ったのか？」

「まだだけど、・・・いい」

透はぼそっとだが明確に拒絶した。今日起きてからは当然まだ何

も食べていないし寝る前もいつ食物を口にしたかさっぱり記憶にはないが、空腹感はさほどなかった。二、三日食べなくても人間は死にはしない。生命の危険が差し迫っているのなら別だが、前もって覚悟をしておかなければ急に外に出ようと言われても心がついてこない。

「いいって言ったってどうせ菓子ばっかり食ってるんだろ。ダメだダメだ。ほらっ。おごってやるから早く支度しろよ。たまには栄養価の高いもん食わなきゃそのうち本当に死んじまうぞ。それこそ孤独死ってやつだ。・・・ん？ちょっと待てよ」

怪訝な表情で和馬が透の首筋に顔を近づけてくる。透はさらに無視を重ね和馬のなすがままにしていた。和馬の奇妙な行動には慣れている。ちょっとしたその場での思いつきで行動する和馬の思考回路は血の繋がった兄弟ではあるが透には理解できたためしがない。一々取り合っていてはこちらの身が持たないのだ。透はテレビの画面を睨みつけコントローラーのボタンを操作し続けた。

「やっぱりそうだ」和馬は眉を顰めて透から身を引いた。「臭うぞ、お前。肩のところにふけも溜まってる」

何を言い出すかと思えば。しかし、その指摘には反論の余地がなく恥かしさで思わず顔が熱くなる。

もともと風呂が嫌いな透はここのところの寒さもあって浴室に足を運ぶことをしていない。当然髪も洗っていなかった。そろそろまずいなと思ってはいても自分しかいない生活の中では必要に迫られず先送りにしてきていた。

「この前風呂に入ったのはいつだ？」

いつだろうか。おそらく五日は入っていない。

「ほら、今からシャワーだけでも浴びてこいよ。我慢してでも身体を洗わなきゃダメだ。飯はそれまで待っててやるからさ。早くしろよ、ほら」

外出するしないは別として、さすがに入浴については兄の言うことに従った方が良さそうだった。透はゲームをセーブして電源を切

った。テレビを消してふらりと立ち上がり浴室に向かう。
「髭剃るのも忘れんなよ」
背中越しに聞こえた兄の声に透は小さく頷いて浴室に入った。服を脱いでいると部屋の方から物音が聞こえてくる。浴室からそっと顔を出して覗くと和馬が部屋の片づけをしているのが見えた。そんなことしなくてもいいよ、と兄を止めようか迷ったが透はそのまま浴室に戻った。一体全体あいつは何をしに来たのだろうか。

2

大晦日だというのに和馬に連れてこられたその居酒屋は混みあっていた。いや、大晦日だからこその盛況ぶりなのかもしれない。世間の感覚というものを推し量るものさしを持ち合わせていない透にはこの居酒屋の混雑具合をどう評価して良いのか分からなかった。

狭い店内。煙草の煙。肉汁の焦げた臭い。酔いに任せた野卑な笑声。ジョッキのぶつかり合う音。居酒屋の中に響く喧騒は久しぶりに外出した透には五感全部にうるさかった。そのせいか店内に入ったときからこめかみの辺りに微かだが重い痛みがあった。それを紛らわせるためにジョッキを呷ると久しぶりに飲む生ビールが驚くほど咽喉に爽快だった。普段は腹が張るわりに酔いの回りが遅いからと避けていたビールだが今日は麦の香ばしさと炭酸の刺激がやけに心地よかった。

「おいおい」二杯目のジョッキをあっという間に空にして息をついた透に和馬は呆れ顔だった。「少しは食えよ。ビールを飲ませるために連れてきたんじゃねぇぞ」

和馬が指差したテーブルの上には彼が勝手に頼んだ料理が並んでいる。レバニラ、レバ刺し、マグロの山掛け、山芋のてんぷら、ニンニクのホイル焼き・・・。和馬の頭の中には精力イコール栄養という図式が成り立っているのだろう。間違っているとは言わないが、これでは注文を取ってくれた女性店員を「俺たち今から風俗に行くとこなんだよね」とからかっているようなものだ。

仕方なくジョッキを箸に持ち替え皿に伸ばすと、椅子の背もたれに引っ掛けた和馬のダウンジャケットから突然若いアイドルの歌が聞こえてきた。連れとして恥かしくなるほど大音量の着信音が辺りにこだまするが、店内の客でこちらに視線を送ってくる人はいない。それだけ誰もが自分たちの世界に浸りきっているのだろう。和馬も周囲に気兼ねする様子など微塵も見せず鷹揚に携帯電話を取り出し

た。着信音に負けず劣らず装飾のライトが七色にやかましく光っている。
背面の液晶画面に目をやった途端口をへの字に曲げ眉を曇らせて面倒臭そうに耳に当てる和馬の仕草がどことなく胡散臭い。透は電話する和馬に気を遣って視線を落とし、少しも減らない肴を箸で突っついた。
もしもし、あぁ俺、・・・わりーわりー、・・・そうそう、だけどしょうがねぇだろ、は？ああ、悪かったって、田舎から弟が出てきててさ、・・・そうそう、その弟が飯食わせてくれってしつけぇからさ、・・・いや、ホントだって、マジなんだって、・・・あ？今か？しょうがねぇな、ちょっと待てよ。
和馬が透の目の前に携帯電話を突き出してきた。通話口を指で押さえている。透は意味が分からず箸を銜えたまま怪訝な顔で和馬を見返した。
「ほらよ」
「・・・何？」
「こいつが代わってくれってさ」
「こいつって？」
「・・・二、三回ヤッた人妻だよ」
透は返す言葉が見当たらず無視してジョッキに手を伸ばした。ただでさえ他人と話すのが苦手だというのに、実の兄と訳ありの関係の女とどんな会話をしろと言うのか。しかも今回は揉め事に巻き込まれそうなきな臭い予感がしてならない。
「おいおい。頼むって。こいつ、本当に弟と飯食ってるのかって疑ってんだよ。もともと付き合うつもりなんかないのに付きまとわれてて困ってんだけどさ、痛くない腹を探られるのは割りにあわねぇだろ？だからお前からうまく説明してやってくれよ。な？」
思わぬ大役に心臓が縮み上がる。そんなことはとてもできそうにない。弟が人見知りの性格と知っていながら何という兄だ。
「ヤだよ。無理」

「そう言うなって。頼むよ。な？」
付き合うつもりがないのなら電話になんか出なければ良い。そもそも携帯電話の番号を教えなければこんなことにはならないのだ。身から出た錆だ。
「ほら。早く出ないと怪しまれるだろ。な？ほら、ほらほら」
怪しまれているのは今に始まったことではないだろうに。しかし、こんな風に急かされると待たせている電話の向こうの相手に悪い気がして透はしぶしぶ電話を受け取り耳に当てた。この場合のうまい説明とは何なのか咄嗟には思いつかないが。
「はい」
「あ、・・・和馬くんの弟さん？」
透や和馬よりも十歳ほど年配に思える女性の声だった。その響きは分別のある落ち着いた女を装ってはいるが何となく上ずっているように聞こえなくもない。
「そうですけど」
「そう。あの、あなたって本当に弟さんなの？あの・・・疑ってるわけじゃないの。でも、何て言うか、その・・・。そう、そこ、どこ？今どこにいるの？」
ちらっと兄の様子を窺う。和馬は透に横顔を見せて足を組み煙草をふかしていた。こちらの成り行きに落ち着かない風で左手の指でコツコツとテーブルを叩いている。
「どこって・・・」透の言葉に和馬が慌てて顔を激しく横に振る。
「普通の居酒屋ですけど」
和馬が大げさに胸に手を当て安堵の表情で息をつく。さすがに場所を教えるのがまずいということぐらいは分かる。それでこちらに累が及ばないとも限らない。
「和馬くんに、・・・お兄さんに、ごちそうになってるの？」
「まあ、・・・そうです」
半ば無理やり連れてこられたのだが嘘ではない。
「他に誰と一緒にいるの？」

「特に誰もいませんけど」
二、三秒の沈黙の後、何が面白いのか突然女は、フフフと笑い出した。笑うしかないということか。
「もういいわ。ありがとう。優しいお兄さんによろしく伝えて。・・・もう、会わないからって」
女は何かに吹っ切れたような柔らかい声でさよならを告げた。しかし、それもどこか芝居臭く、割り切ることができたと自分に思い込ませようとしているようで透には痛々しく聞こえた。
電話を切ると待ちかねたように和馬が透の顔を覗き込んでくる。
「あいつ、何て？」
「もう、会わないって」
「マジで？何だよ、それ。お前すげぇな！」
何を誉められたのかさっぱり分からなかった。だが、和馬は身を乗り出して透の肩を二度三度と叩くとイタリア人のようにオーバーアクションで天に向かって両手を開き神に感謝していた。汗で雑草のような髪が和馬の頬に張り付いているのは彼なりに緊張していたということか。
全身にどっと疲れを感じる。和馬の前に携帯電話を置くと初めて透は咽喉がからからになっていることに気付いた。ジョッキを口につけ傾けると意志を持っているかのようにビールが咽喉の奥に流れこんでいく。飲み干して叩きつけるようにジョッキを置くと、ぐらっと世界が揺れたような気がした。いつ注文したのか抜群のタイミングで店員が新しいジョッキと交換していく。上機嫌の和馬が「どんどん飲めよ」とにんまりしている。その顔がどことなくぼんやりしていて遠くに見えるような気がする。
そこへまた和馬の携帯が鳴り出した。一瞬兄弟は携帯電話を挟んで互いの顔を見つめあい硬直した。着信音が透の頭蓋に響く。七色の発光が透の網膜に不快な残像を残す。
もしもし？どうした？・・・あれ、そうだったっけ？・・・イヤイヤ、マジマジ。そんな約束したっけ？・・・あー、思い出した。

確かそんなこと言ってたな、お前。・・・今から？今からはちょっとまずいな。・・・イヤ、そうじゃないって。・・・だから、違うんだって。お、と、う、と。・・・そう、弟が田舎から出てきててさ。飯食わせてくれってしつけぇんだって。だから仕方なく・・・イヤ、マジにホントだって。・・・あ、今か？・・・そりゃ、いるけど。わかった、ちょっと待てよ。

透の前に数分前と同じ光景が現れた。その光景が先ほどよりも色あせて見える。こめかみや首筋の辺りが大きく脈を打っていた。透はさらにビールを飲んだ。

「透、悪い。もう一回だけ出てくれよ。さっきと同じ調子でいいからさ。こいつもしつけぇんだよ。女って生物はどうしてこうもしつけぇんだろうな」

すまなさそうにしながらも口の端が笑っている和馬の顔を見て透はようやく自分がだしにされていることに気付いた。透はテーブルに箸を叩きつけて立ち上がった。

「今日誘ったのは最初からこのつもりだったのか」

「何言ってんだよ。変な勘ぐりはやめろって。偶然だ、偶然。な？な？」

舞台俳優の端くれだろうに下手な芝居を打つ。アルコールのせいか自棄気味に透は眼前に突き出された携帯電話を奪うように掴んだ。一度おくびを吐き出してから耳に当てる。妙にまぶたが重くて目を閉じた。ストンと落ちるように椅子に尻を下ろす。

「もしもし？」

思っているよりもぶっきらぼうな自分の声に透の脳の一部は驚きを示した。しかし他の大部分はあらゆることを大儀に感じていた。携帯電話を押し当てている耳が焼けるように熱い。

「もっしー。かず君の弟さん？」

今度は先ほどと一転して若い女性だった。声がピンポン玉のようにキンキンカンカンと硬く弾んで聞こえる。

「そうだけど」

「あのさぁあ。えみは今日かず君とデートする約束してたんだけどぉ」
「・・・で？」
「で？じゃないの。何よ『で？』って。超うける。今からかず君返してくんない？今日はかず君と一緒にあけおめって決まってるのぉ」
透は一旦携帯電話を耳から外し、通話口を押さえた。
「かずくんとあけおめしたいんだってさ」
「うまく断っといてくれよ。ガキは疲れる」
だから、うまくって何だ。透はジョッキを呷り再び電話に戻った。
「あのさ、かずくんは君と会うと疲れるんだってさ。キャンキャン耳障りだし、語尾ののばし方が鬱陶しいんだって。だからさ、もう電話してこないでくれる？」
目の前で和馬がビールを噴き出した。驚き戦慄いている彼の様子が滑稽だった。こんなに慌てる兄の姿は見たことがない。
「はぁ？なにそれ？ムカつくー。高校生だからってなめてんじゃねぇぞ。あんたさいてー。マジ、うざいんだけど。もういいわ。無理やり淫行されたって警察にちくってやるから。本気だかんね。かず君ムショ行きだ。あー、かわいそ。じゃね、バイバーイ」
一方的に電話が切れ、ツーツー音が空しく響く。その寂しい響きに取り返しの付かないことをしてしまったという思いが水に落とした墨汁のようにサッと灰色に胸に広がった。
「ごめん。・・・警察にちくってやるって」
怒ると思ったが和馬は透の意に反して豪快に笑い飛ばした。
「俺のポリシーにそぐわねぇ別れ方だけど、まあいいや。警察にちくられたって条例で保護されてるのは十八歳未満だから大丈夫だ。あいつはもう十八歳だからな。残念ながら立派な大人なんだよ。それぐらいの計算がなけりゃ危なっかしくて出会い系なんか使えねぇって」
全く意に介さない様子の和馬にほっとしたのか透は肩の力が抜け忘れていた瞼の重さを思い出した。急激に眠くなってくる。テーブ

ルに頬杖をつくともう二度と立ち上がれないような身体の重さを感じた。
「それよりよ、お前って相変わらず付き合ってる女はいねぇのか？たまには自分の素の部分ってのを誰かに見せるってことも、なぁ、おい・・・」
　和馬の声が周囲の喧騒に紛れて聞こえる。ドアの入り口から流れてくる寒風。鍋がふきこぼれる音。胃からせり上がってくる気泡。頬杖の掌から顎が滑り慌てて載せなおす。
　遠くで和馬が誰かと喋っている。また電話だろうか。壊れたレコードプレーヤーの針のように意識が少しずつ飛んでいる。眠い。透はテーブルに腕を載せその上に額を置いた。風邪をひくかもしれないと思ったが、熱でも出て寝込んでいる方が何も考えなくて済むとすぐに開き直った。
「おい、透。起きろ。帰るぞ」
　肩を揺すられ脇に手を差し込まれて無理やり立たされる。意識を集中して何とか目を開くと和馬の横顔が目の前にぼんやり見えた。
「おら。少しは自分で歩けよ」
　そう言われても身体のどこにも力が入らない。踏み出した足が上手に床を捉えられない。和馬に寄りかかりながら引きずられるようにして歩いていると急に寒気が全身を襲ってきた。驚いて目を開くと辺りは夜の闇だった。
「ありがとうございましたっ」
　背後から威勢の良い声がする。また来るよ、と振り返って手を挙げようとして身体のバランスを大きく崩す。支えていた和馬が慌てたような声を出したのが聞こえたときには臀部と肘に硬く冷たいものを感じていた。痛いと思ったのは一瞬だった。
「んなとこに寝るなよ」
　その言葉に透は自分が地面に寝転がっていることに気付いたが、起き上がろうとする力がどうにも重力に勝てない。自分の身体の重みを持て余す。身体を全て地面に委ね透はそのままコトリと意識を

失った。

3

聞こえる。何かが爆ぜている。伝わる。空気の膨張。感じる。誰かの叫び声。

母さん？母さんなの？

振り向いた先のガラス障子の向こうに何かがゆらゆらと紅黒く揺れている。全てはこの障子の向こうで起きている。隣の部屋全体からめらめらと熱の波が押し寄せてくる。熱い。何人たりとも近づけないという強固な意志を持ったような痛いほどの熱さに圧されて障子に手を伸ばせない。

「死にたくない！誰かっ！」

部屋の中からの必死の命乞いは耳からではなく頭蓋を通りぬけて直接脳に突き刺さるようにして透には聞こえた。

母さん。母さんなの？

僕は辺りを見回し壁に立てかけてあった使い古しのテニスのラケットを見つけた。ラケットのヘッド部分を掴みグリップを障子のくぼみに引っ掛ける。ジュッとグリップテープが焦げ、微かに鼻を突くような刺激臭が広がった。懸命に力を込めるとゆっくり障子が開いた。

中は炎の巣だった。透によって放たれた通気口から新鮮な空気を得、火の塊は一瞬爆発的な膨張を見せた。柱、天井、カーテン。縦横無尽に次々と燃え広がる紅蓮の炎は爬虫類の動きを連想させる。部屋の奥から吹き付けてくる熱風に透の髪はちりちりと音を立てた。

「誰かいるの？母さんなの？」

顔に吹きかかる熱波を掌で遮りつつ僕は精一杯声を張り上げた。

僕の呼びかけに反応したのだろうか。指の間から垣間見た部屋の中で紅く包まれた何かが蠢いたようだ。にゅっとこちらに突き出されたのは人間の掌だ。赤黒い世界の中で、はっと息を呑むほど美しく白い掌。目を凝らして見ると誰かが鬼のように目を吊り上げた形

相で何かを訴えかけようとしている。
母さん？違う。若い女性。白い肌。彼女は炎に巻かれながら声を限りに生を求めている。
「生きたいの！死にたくないのぉ！」
しかし見る見るうちに彼女の皮膚は焼け爛れ内側から黒く溶け出し始めた。皮膚の奥からせり上がる体液はぶしゅぶしゅと不吉な音を立てて瞬く間に蒸発していった。その下に覗く肉はあっという間に炭化していく。そのとき透の傍らで炎の塊が弾け彼の方に飛んできた。よけきれず倒れこむと猛り狂った紅い一団があっという間に脇腹から肩に掛けてを覆いつくしてしまう。熱い。痛い。怖い。
「イタッ。ちょ、ちょっと。痛い。痛いなぁ」顎の下から女性の不機嫌な声が聞こえてくる。「やめて、お兄ちゃん。やめてったら」
少しずつ意識が覚醒していく。全身に張り巡らされているニューロンが働きを取り戻し徐々に身体の末端から脳への情報伝達が始まった。透はどうやら自分が何かを強く握りしめているらしいことに気付き慌てて両手の力を抜いた。首筋や背中、膝の下あたりが冷たく湿っている。目を閉じたまま額に手をやるとべっとりと粘度の強い汗が付着したのが感じられた。頭の奥がずーんと鈍く痺れている。咽喉が異常に乾いていた。唾を飲み込もうとして口の中が干上がっていることに気付く。
透の腕の中で横たわっていた何かが逃げるようにして離れていった。急に胸のあたりがスースーと寒くなる。頬の辺りがこそばゆい。くすくすと人間の笑い声が聞こえた気がして透はしっかりと貼りついてしまって言うことをきかない瞼をこじ開けるようにして細く開けた。
霞がかかったようなぼんやりとした視界に白い物が浮かんで見えた。それは人間の顔だった。
「ヒッ！誰？」
見知らぬ女性がベッドの傍らに立膝を突いた状態で透を見下ろしていた。頬の感触は彼女がその長い髪の先をつまんで透の顔を刷い

ているからだった。驚いた透は、その女から少しでも距離をとろうと慌てて身を引きベッド脇の壁に強かに後頭部をぶつけた。
「がっ」
一瞬目の前が真っ暗になりその中をチカチカと火花のようなものが飛んだ。平衡感覚を失い透はゆっくりと再びベッドに突っ伏した。
「大丈夫？」
頭を撫でる優しい感触を払いのけ、映画のロッキーのようにゆらゆらと身体をもたげると、世界がぐらんぐらんと揺れて吐き気がこみ上げてくる。あまりの不快感で言葉が出てこない。不用意に口を開けば途端に胃から何かが逆流してきそうだった。
透はちらちらと周囲に視線を飛ばした。そこは間違いなく自分の部屋だった。世界で唯一の自分だけの空間に知らないうちに他人が入り込んでいる。
「あけましておめでと。お兄ちゃん」
何がめでたいものか。こんな不快で不吉な目覚めはない。とにかく話しかけてくるな。一人にしておいてくれ。大体、何で俺を兄呼ばわりするんだ。
「・・・君、誰？」
精一杯何とかそれだけは口にした。それは胸の気持ち悪さや身体の気だるさ、この状況に対する不安感、不信感、嫌悪感、焦燥感などを凝縮して出来上がった結晶だった。出て行ってくれということを言外に滲ませたつもりなのだが女は透の意図を全く理解していない様子で平然と疑問文に対する答えを示した。
「私は千春よ。本城千春。昨日言ったでしょ」
教師が児童に言って聞かすような口調なのがこちらの気分をますます逆撫でる。何かを言い返さないと、と透は必死の思いで顔をもたげた。
「そんなこと、・・・そんなこと訊いてるんじゃない。俺が知りたいのは、君がどうしてここに寝てて何で俺に新年の挨拶をしてるのかってこと。大体、何で俺が君の兄さんなんだよ」

疑問を口にして初めて透は記憶の糸を辿り始めた。そもそもどうして俺はこんな風に寝ているのか。頭と足の向きがいつもと１８０度回転して反対になっている。

突然の和馬の訪問は容易に思い出せた。その後、半ば強引に居酒屋に連れ出されたはずだ。和馬の携帯電話でどこかの女性と会話をしたことまでは覚えている。それは確か二度あった。しかしその後があやふやだった。どうやら店を出た辺りからの記憶が欠落しているようだ。何とかして思い出そうとしてもこみ上げてくるのは吐き気ばかりだった。

「どうしてって、この部屋で寝るところって言ったらここしかないじゃない」

女はさも当然とばかりに反駁する。

「これは俺のベッドだ」

「知ってるわよ。ここはお兄ちゃんの部屋だし、この布団はお兄ちゃんの体臭がするもん。お兄ちゃんの匂いは嫌いじゃないけど、このシーツ相当取り替えてないでしょ」

痛いところをつかれてぐうの音も出ない。指摘どおりここ数週間シーツは取り替えていないしこの一年、布団や毛布を干した記憶もない。言われてみれば確かに汗臭いような気がするし軽く湿っているようにも思う。

「この枕カバーなんて洗ったことあるの？こんなに黄ばんじゃって」

呆れたような表情で彼女はゆっくりと立ち上がった。勝手にクローゼットから取り出したのか彼女が着ているトレーナーにジャージのズボンは透のものだった。ぶかぶかの袖から手を伸ばし少し栗毛色に見える髪を掻き揚げカーテンを開く。太陽に照らされて浮かび上がった彼女の横顔に透はハッと息を詰めた。

肌が驚くほど白い。うっすらと頬のあたりが朱を帯びているのは皮膚の薄さを物語っている。透明感のある肌とはこういうものを言うのだろう。肌理が細かく張りがある。そしてまるでフランス人形のような長い睫毛、僅かに青みがかって見える瞳。彫りが深いとい

うわけではないのだが目鼻立ちにもどことなく東洋人らしからぬつくりの大きさがある。白人とのハーフなのだろうか。混血の人間特有の良いとこ取りの謎めいた美しさが備わっていて透は目を反らすことができなくなっていた。そう言えばどことなく先ほどの夢に出てきた女性に似ている気がする。

「昨日私が、『私の兄に似てるんです』って言ったら、『じゃあ、お兄ちゃんって呼んで』って、お兄ちゃんが言ったのよ」

お兄ちゃんが、と石膏のような美しく長い指で透を指差す。

どれだけ記憶を辿ってもそんなことを口走った覚えはないが、彼女と会ったことさえ覚えていないのだから反論のしようがない。思わず透の目が宙を彷徨う。

すると突然千春が窓を開けた。柔らかい太陽の光が直接千春を包み込む。陽光を背に窓辺に立っている彼女を改めて見上げるとその華麗さはむさくるしいだけのこの部屋での生活とあまりに乖離していて、まるで彼女が今そこに上空から降り立った神の使いのような気がしてくる。新春の清澄で冷たい風が千春の脇を吹きぬけてこちらに這い寄ってきた。

「うー、さぶっ。・・・うわっ！」

冷気に襲われ全身を自分の腕で抱え込んだときに透は初めて自分が上半身裸であることに気付いた。寒いのは当然で鳥肌の立った二の腕や胸が何にも覆われることなく露出していた。怠惰な生活を続けていることで張りのなくなった貧相な身体が白日のもとに晒されている様は我ながらみすぼらしい。

眠気が一気に飛び去り慌てて布団と毛布を掻きあげ怒りを込めた目で千春を見つめる。

「空気が冷たくって気持ちいいわ。・・・怖い顔してどうしたのよ？」

「どうして俺は・・・」

上半身裸なんだ？と問いかけようとして透は言葉に詰まった。裸なのは上半身だけなのか、という新たな疑問が透の後頭部を打ち砕

いたのだ。慌てて両手を伸ばし下半身をまさぐる。身震いがして歯がガチガチと鳴る。指先で確認できたのは薄っぺらな布切れ一枚だけだった。
「どうして俺はトランクス一枚なんだ？」
透は震える声でおそらくこの世でただ一人答えを握る重要参考人に恐る恐る問い質した。
「いやだぁ。そんなこと私の口から言えないわ」
透は、窓を閉じ恥かしそうにカーテンを弄びながらその陰に隠れる千春を目で追いかけた。まさかとは思うがカーテンの端から覗く彼女の目元にはあながち冗談と笑い飛ばせない恥らいの色が浮かんでいる。しかしそんな初心な表情を見せられてもこればかりはあいまいに済ませるわけにはいかなかった。幾ら酔っ払っていたとは言え自分がそんな軽はずみな行動に出るとは思えない。透は裸のままでは布団から出ることもままならずベッドの端ににじり寄って千春の顔を見つめた。何を考えているか分からない大きな青い瞳がそこにあった。
「頼む。本当のことを言ってくれ。な？頼む。何があった？本当は何もなかったんだろ？」
透の言葉に千春は顔から微笑を消しカーテンを手放して一歩透に近づいた。
「男と女が一晩一つのベッドに寝たのよ。何もなかったはずないじゃない。そんなのおかしいじゃない」
エキゾチックな顔立ちの千春にはツンと澄ました表情が似合っていた。しかし透は見惚れている場合ではなかった。
「おかしくなんかない。君と俺との間に何かがあったはずはないんだ！」
透は声が上ずるのを抑えられなかった。嘘の尻尾を見つけてやる。透は眦を決して千春の顔を睨みつけた。しかし千春も敢然と透の視線を正面に受け止め対決姿勢を崩そうとしない。
「どうしてそんな風に断言できるの？何も覚えてないんでしょ？」

「何も覚えてなくても分かるんだよ。たとえ酔っ払ってても俺がそんなことするはずがないっ！」
「そんなことない。絶対に、絶対に、そんなことない。明かりを点けるな、とか、俺に触るなとか何とか喚いてたけど、最終的にはお兄ちゃんは私とセックスした。そこで、そのベッドで私と裸で抱き合ってセックスしたの。私とお兄ちゃんにはもう関係があるのよっ！」
途中から千春は目に涙を浮かべていた。ベッドを指差し、自分の胸に手を当てまさに透に訴えかけていた。強く言い放つとすぐさま千春は流し台の方へ駆けて行った。それは涙顔を隠すというよりも透に抗弁させる隙を与えないようにしているかに思えた。蛇口が捻られ千春が顔を洗う音が聞こえてきた。
透は床に昨日着ていたTシャツを見つけた。ベッドから手をぎりぎりに伸ばして何とか拾い上げる。興奮状態から少し落ち着きを取り戻すと気が付けばこめかみがズキズキと痛んだ。
ジーパンはTシャツよりもさらに遠いところに落ちていた。ため息をつくしかなかった。
二日酔いで繰り返し吐き気がこみ上げてくる。両のこめかみから太い杭を捻り込むような頭痛がする。見知らぬ女がわけの分からないことを言って混乱させる。裸で抱き合ったなどと不吉なことを言っている。
「ったく、何て朝だ」
「もう昼回ってる」
耳ざとい千春に指摘されてベッド脇の目覚まし時計を見ると確かに午後1時を示している。
ここのところ目覚まし機能を使ったことがなく時計にはうっすらと埃が積もっていた。何となく怠惰さを責められている気がして透は時計の表面を指で拭った。
そのとき部屋のどこかで電話が鳴り出した。誰かが電話の持ち主である千春を呼んでいる。

この部屋で前回電話が鳴ったのはいつのことだっただろう。Tシャツを被りながら痛む頭でぼんやりそんなことを考える。昨日の和馬との会話はいったい何日ぶりの人との会話だったのだろうか。人間、誰とも喋らないでも生きていられるものだ。

当然のことだが千春には彼女と電話で話をしたい誰かが存在している。今回の電話はさしずめ彼女の親か彼氏あたりが昨夜帰宅しなかったことを心配して掛けてきたというところか。何はともあれこれで千春が帰るべきところへ帰ればいい。それで取りあえずこの部屋に日常を取り戻すことができる。冷静になれば何か思い出すだろう。

「出ないの？」

タオルで顔を拭うこともせず彼女は台所に立って床のジーパンを指差している。目が少し赤い。

「え？」

「携帯。そのズボンのポケットでしょ」

言われてみれば確かに音は床に佇んでいるジーパンから聞こえてくる。鳴っているのは千春ではなく透の携帯電話だったのだ。久しく自分の携帯が鳴ったことがないのでどんな着信音だったかさえすっかり記憶から欠如していた。

毛布に包まりながらジーパンに手を伸ばし携帯電話を手繰り寄せる。二人の間に着信音が響く。

迷惑な話だが今日の俺は人気者だな。起きてからまだ十五分も経たないうちに二人の人間と喋ることになるとは。切れてしまえば良いのにと思いながら悠長に電話を取り出したが、相手も相当気の長い人間のようだ。追い詰められたような気分で液晶画面を見ると兄の名前が出ていた。

「透か。お前、水臭いぞ。彼女ができたんなら早く言えよ。俺が心配することなんか何もなかったんじゃねぇか。千春ちゃんだっけ？可愛いし、いい子そうだな。あんまり彼女に冷たくするなよ。仲良く正月過ごせよな。もしかして今、彼女そこにいるのか？いるんだ

ろ。ちょっと代われよ」
　通話ボタンを押すなり機関銃のように大声で喋る和馬に透は相槌を打つことさえままならなかった。和馬の声が透の脳を揺さぶる。少しでも電話を遠ざけたくて透は千春に差し出した。
「何？」
「ほら。早く出て。ほら、ほら」
　理由もいわず急かすようにして強引に電話を手渡す。昨夜この手で透は無理やり電話を持たされたのだ。
　はい。・・・あー、どうも、千春です。昨日はありがとね・・・うん。・・・うん。・・・そだね。こっちは大丈夫。・・・うんうん。代わるね。じゃねー。
「代わってくれって」
「いいよ、もう。切っといて」
　千春から遠ざかるようにしてベッドになだれこむ。頭痛はますますひどくなる一方だった。ドクンドクンと一定のリズムで鈍痛がこめかみから全身に広がる。
「そうはいかないでしょ」
　耳に冷たいものが当たった。すぐ近くで和馬の声がする。千春が電話を透の耳に当てているのだ。
「なんだよ、もう」
　千春に言ったつもりが和馬への宣戦布告になってしまっていた。
「なんだよとは挨拶だな、お前。昨日どれだけ俺と千春ちゃんに迷惑掛けたのか分かってるのか？」昨晩のことを引合いに出されると何も言えなくなってしまう。何せ何も覚えていないのだから。「まぁ、いいや。今度、春美と様子見に行くからよ」
　また新しい女の名前が登場して透を混乱させる。だから和馬と関わるとろくなことがないのだ。
「・・・春美って誰だっけ？」
「お前なぁ」怒りを通り越して呆れきったような和馬の声がする。
「とにかくまた様子見に行くから、それまで千春ちゃんと仲良くや

ってねぇと速攻で兄弟の縁切ってこの前事故ったときに面倒見てやった九十万円その場で払ってもらうからな。じゃあな」

また痛いところをつかれてしまった。

一年ほど前、透は確かに和馬に九十万円世話になっている。原付を運転して近くのゲームショップに行く途中、ぼんやりしていて路駐していたセルシオのバンパーをほんの少し擦ってしまったのだ。どれだけ目を凝らしても傷は付いていなかった。しかし車から降りてきたドライバーがどう見てもその筋の人間で、視線が合っただけで完全にびびってしまった透は請求されるままに否応なく百万円支払うことを了承してしまったのだが、その翌日にどこから聞きつけたのか久しぶりに和馬が透の前に現れ「何か困っていることがあるだろう」と切り出してきたのだ。透としては他の誰に頼んでも和馬にだけは頭を下げるつもりはなかったのだが和馬はこちらが何も言っていないのに勝手に先方と連絡を取りつけ、どういう手を使ったのか要求額の十分の一の十万円を支払うことで話をつけてしまったのだ。透としては大きなお世話だという顔をしていたが、実際のところはあれでどれだけ救われたか分からないぐらいだった。当時は引きこもり生活を始めた頃で一気に収入がなくなり今後どうやって心を休ませながら生活水準の維持を図るかということばかりを考えていた。あのとき百万円を失っていたら今はもっと苦しい生活をしていたことは疑いないし、それどころか投げやりになって自分がどうなっていたか想像もつかない。

それにしてもどいつもこいつも一体俺にどうしろって言うんだ。

透は目覚ましの横の薬袋から手探りで錠剤を三粒取り出した。手の感触だけで分かる。抗不安剤、睡眠導入剤、睡眠薬。水も使わずにそのまま強引に嚥下してベッドに大の字になる。咽喉に痞えた感触が次第に消えると、やがて期待通り意識の強制終了が始まり視界も感情も聞こえてくる音も、何もかもがぼんやりし始める。吸った空気が滑らかに肺の奥の奥にまで広がる。全身を使っての呼吸が透にリラックスした気分をもたらす。頭痛も幾分和らいできた。意識

が遠のき四肢に心地よい痺れが回る。何も考えられなくなってきた。眠るというよりも落ちる感覚に近い。

遠くで千春が呼んでいるがもう手遅れだ。透は既に千春の手の届かない遠くの世界へ飛び立っていた。

「ごはんつくるね。パスタでいい？ここってガスコンロじゃないの？この電気のプレートってさ、どうやって・・・」

4

冗談じゃなく千春は居着いてしまった。しかも彼女がこの部屋に居座る目的が何なのか全く分からない。「私一日１０万円なの」などと言い出して法外な請求書を突きつけられるとか、突然強面の大男が「誰の女に手を出しとんじゃい」と怒鳴り込んでくるだとかを想像してはびくびくしつつも今となっては時機を逸した格好で面と向かって問い質すこともできず結果的に千春の存在を無視してゲームばかりしていたのだが、千春は透の仕打ちには頓着せず一見この部屋に自分の居場所を確保した顔で悠々と時間を過ごしていた。

彼女は恐ろしいほどのマイペースぶりで勝手に食事をし、シャワーを浴び、パジャマに着替え、透のベッドに入り眠った。いつの間にか運び込んであった大き目のバッグの中に、必要最低限の生活を送るためのグッズが入っているようでこの部屋で暮らすことで何かに困っている様子は皆目見当たらない。絵を描くのが好きらしく目の端で観察していると、テレビ画面に正対してコントローラーを操作する透の脇で彼女は一言も喋らずにスケッチブックの上にひたすらせっせと色鉛筆を滑らせている。よくも飽きずに描いていられるものだと自分のゲームを棚に上げて内心呆れていると、あるとき突然財布一つを持って部屋を出て行き一時間後には近くのスーパーの買い物袋を３つも提げて帰ってきた。おかげで今我が家の冷蔵庫は史上最も充実している。

テレビ画面では恐竜のような格好の中ボスが派手な爆発音とともに身体の内部からの破裂を幾度となく繰り返し倒れようとしているＣＧが流れている。千春の様子を盗み見ながら操作していたからかミスを連発してしまったことに加えてまだこちらのレベルが不足していたようで予想に反して二、三度こちらが全滅しかかる苦戦を強いられた。最後はまるで自分が直接剣を握り魔法を唱えているような心持で戦闘に集中していたので目がじんわりと痛み咽喉がカラカ

ラになっている。コキコキと首を鳴らしながら何か飲みたいと思っていたら、すっと千春がコップにアップルジュースを注いで透の目の前に置いた。不気味なぐらいタイミングがいい。耐え切れずコップに口をつけると丸二日ぶりに千春が話しかけてきた。

「ねぇ」

いよいよ来たか、と透は心の中で身構えた。

「初詣行こうよぉ」

もっと途方もない要求を突きつけられるものと冷や冷やしていた透はあまりのハードルの低さに意表を突かれて声も出ず成り行き上さらに無視を決め込んでゲームを続けた。怒ったり拗ねたりするかと思ったが、千春は特に気分を害した様子も見せず、また黒と黄色の表紙のスケッチブックを開いて色鉛筆を走らせた。何を描いているのか気になったが透は極力千春を意識しないようにテレビ画面から目を反らさなかった。

理由はよく分からないが和馬がいやに千春を気に入っていて透が積極的に彼女をこの部屋から追い出そうとすれば本気で９０万円を請求してきそうなのが面倒だった。できれば彼女から自発的にこの部屋を出て行ってもらい八方丸くおさめた形で部屋の平穏を取り戻したいところだ。それには無視を続けて彼女に嫌気が兆すのを待つのが一番だと思って一言も口をきいていないのだが千春にも相当の覚悟があるらしく今のところ音をあげる様子は微塵も見せない。彼女はただひたすら絵を描いていた。

「気になる？」

一作品描き終えたのか突然鉛筆を持つ手を止めて息をもらした千春の様子が気になってチラッと視線を滑らせるといたずら好きそうな笑顔の彼女とぶつかった。

「私が何を描いてるか気になるんでしょ？顔に描いてあるよ」

それでも透は沈黙に徹した。敵はこちらを挑発するような発言をして何とかこちらの口を開かせようとしているのだ。その手に乗るかと、透は口元を引き締めてさらに無視を続けた。もうひと踏ん張

りで相手は必ず透という存在に嫌気が差すはずだ。捨て台詞を投げつけてここを出ていく時が来るのも遠くはない。
「ここで口きけば負けだと思ってるんでしょ」
くすくす笑う千春に苛立ちを覚える。千春に分からないように透は奥歯に力を込めた。
「いくら無視されたって私、お兄ちゃんの傍から離れないよ」
完全に見透かされている。敵わない、という思いが一瞬胸を過ぎるが、どうしてこいつに俺の生活を狂わされなくちゃいけないんだ、という怒りが徐々にこみ上げてくる。透はとうとうゲームを続けられなくなり目を怒らせて身体ごと千春の方を向いた。
「はい」
振り向いた透のすぐ目の前にスケッチブックが開かれた。近すぎてよく見えず少し身体を引くと色鉛筆の淡い色彩で描かれているのは人間だった。バスケットボールを床に突きながら、どこかを指差して何かを叫えている。白地に青のユニフォーム。緑色のリストバンド。アシックスのバスケットシューズ。
「これって・・・」
「下手だった？お兄ちゃんのつもりなんだけど・・・」
それは明らかに透だった。滴る汗。踊る筋肉。前だけを見つめる強い眼差し。今にも紙面から飛び出して来そうなほど躍動感のある絵だった。ボールの弾む音や、キュキュッというシューズの摩擦音が聞こえてくるようだ。
バスケットボールに明け暮れた高校時代。優秀な成績を残せたのでも、誰かに誉められたわけでもないが、ただただ楽しかった透の唯一と言ってもいい美しい思い出の日々。
「この絵はね、お兄ちゃんの最後の試合。そうよ。夏の県大会の準決勝」
3点差の負けゲーム。ブザービーター狙いで無理やり打ったスリーポイントシュート。ボールは空しくリングに弾み、着地と同時に足がつった。決勝に進んだ相手チームがそのまま優勝して、あそこ

で勝ってたら優勝できたのにな、って大会の後の打ち上げでメンバー皆口をそろえて笑いあった。優勝なんて目指してたわけじゃなく、準決勝に進出しただけでも顧問の先生が男泣きするほどの快挙だったのに。

「気づいてないと思うけど私、お兄ちゃんの高校の後輩なのよ。一年生のときにミーハーな友達に連れられて観た最初で最後のあの試合でボールを追いかけて走りまくってたお兄ちゃんを、私、好きになっちゃったの」

千春は堂々と透の目を見て言った。

考えてみれば「好き」という言葉ほど曖昧なものはない。あるときには「嫌いではない」という意味であり、またあるときには「人間としては好ましいが異性として意識しているわけじゃない」ということもある。上手に心情を覆い隠して振舞うことが社会的に是とされがちなこの奥ゆかしい人間社会の中では往々にして「恋愛対象として愛しく思っている」という意味以外で「好き」という言葉は使われる。よって「恋愛対象として愛しく思っている」ということを告白するための「好き」を口にするのであれば、それは人間として生きていく中で最も勇気を必要とする行動の一つであるはずなのだから、そういう場合は赤面してしまうだとか相手の顔を直視できないだとかいう羞恥心とか不安感がもたらす外見的な特徴を示してしかるべきなのだが、今回の千春のようにこうも臆面もなく「好き」と言われても、「好き」という言葉に免疫のない透はただただ混乱するだけだった。千春のように欧米列強の血を享受した大陸系の人間には島国育ちの農耕民族の常識は通用しないのだろうか。身体で言えば性器のように本来であれば心の奥の密かに仕舞われているべきデリケートなものを堂々と開帳してみせる千春に透は黙って俯くしなかった。

「ちょ、ちょっと、紅くならないでよ」

指摘されると余計に顔が火照ってくる。自律神経が上手に働かない。全身を揺さぶるほど強く心臓が跳ね上がる。肺の奥まで空気を

吸い込めず浅く速い呼吸を繰り返す。首筋や腹部、臀部にじっとりと汗が滲む。自分の身体なのに全くコントロールできないのがもどかしかった。

しかし千春の方も透に影響されたのかちらちら見遣ると手の甲や首筋が朱に染まってきていた。慌てて自分の顔を隠すようにスケッチブックを持ち直し、さも意味ありげにページを繰っていく千春の様子に透は少しだけ心にゆとりが持てた。一見強気に見える彼女の振る舞いは実はあらかじめ作り上げていた表面的な装いに過ぎず、想定外の状況に陥ったときに仮面の差し替えが間に合わず表に出てきてしまった素顔は何ともあどけない少女のそれだった。白く怜悧ないつもの表情とのギャップが愛らしかった。

透は立ち上がってクローゼットからダウンジャケットを取り出した。マフラーを首からぶら下げる。

「ちょっと。どこか行くの？」

「ああ」

「待って。私も行く」

透は千春に構わずスニーカーをつっかけ玄関を出た。じっとしていることができなかった。自分が蒸気機関車にでもなったような気分だった。頭から湯気を出してシュッポシュッポと前へ進むしかない。カッカと内燃する身体を一刻も早く外の清浄な空気で鎮めたかった。

何かがひっくり返って散乱したと思われる派手な音と千春の小さな悲鳴が部屋の中から聞こえてきて一旦足を止めたが、すぐに追いかけてくる軽い足音が近づいてきたので透はさらに歩を進めた。

空は鉛色の重そうな雲が低く垂れ込めていて時折強く吹きつけてくる北風が耳に冷たかった。まだ昼の2時を回ったぐらいだと思ったがあたりは夕暮れ時のうす暗さだった。マンションの前は普段から人通りの少ない道だが今日は野良猫一匹姿を見せず、色彩を失って硬直した世界は視覚的にも寒々としている。雪になるかもしれない。傘を持ってこればよかったか、と思いすぐにくすりと笑った。

仕事に行かなくなってからは外出することもめっきり少なくなり雨に降られるという経験もとんとご無沙汰になっている。外に出かける必要があるときは前の日に天気予報をチェックし、当日には何度も空の様子を眺め雨が降りそうもないということを確認してからようやく諦めに似た気持ちで決心して靴を履いていたのに、今日は何も考えずに足の赴くままにドアから出ていた。こうやって戸外の空気を感じ、立ち止まって頭上を眺めて天気の心配をしている自分が新鮮だった。歩いているうちに心身ともにクールダウンしてくる。自律神経失調症特有の激しい動悸や過呼吸も今日は軽めで気にならなかった。雪が降ったら濡れればいい。透がまた歩き出そうとしたとき背後から何かがぶつかってきた。その勢いでよろめく透にさらにぐいぐいと身体を押し付けてくるのはもちろん千春だった。案の定スケッチブックと色鉛筆を小脇に抱えていた。軽く息を弾ませている千春はあっという間に透の腕を取ると頬を摺り寄せてくる。透は腕を振り解こうと試みるが千春は頑として離れない。

透が突然外出すると言ったので本当に慌てたのだろう。千春はジャージのズボンとトレーナーという部屋着に赤いダッフルコートを羽織っただけで足元は透のサンダルを履いていた。うら若き乙女がこんなみすぼらしい格好で、と思うと可愛そうなことをしたような気持ちが兆したが当の千春本人は自分の格好に全く頓着している様子を見せず、ただただ透との外出を楽しんでいるような喜色に富んだ表情だった。

「ねぇねぇ、どこ行くの？」

最初から返事を期待していないのか、それとも行き先などどこでも良いのか、千春は無言の透に気分を損ねる感じもなく寒さも気にならない様子で何の面白みもない空や道や電柱をニコニコと眺めている。肌の白さがいかにも寒さに弱そうに映るが微かに頬を上気させて千春は元気良く透の横を歩いた。

5分ほど歩くと道路上に車の列が見えてきた。このあたりで一番大きいパチンコ屋の前だ。先月訪れたとき店員が客の一人に「三が

日は設定甘くしますんで」と耳打ちしていたのを聞いていた。次来るなら三が日だな、とそのとき思ったことを透は今日思い出したのだ。

丸々と重ね着をして制服が妙にもこもこと膨らんでしまっている警備員が日の差さない真冬の曇天の下、何もかもが気に入らないような素振りで手先だけを動かして車を誘導していた。広い駐車場はすでにびっしりと車で埋まっている。その駐車場の一隅から出てきた軽自動車にその警備員は気付いておらず軽自動車の進路を阻むように突っ立っている。軽自動車のクラクションが鳴ると事も無げにのっそりと脇に移動し頭を下げることもしない。駐車場の奥にいたもう一人の警備員が走ってきて周りのドライバーに頭を下げつつ職務怠慢の警備員を小さい声だが鋭く何やら叱りつけた。そのすぐ傍を通って透は店内に向かう。

「パチンコ？」

生まれて初めて、とはしゃぎながらさらに透の腕にからみつく千春と透を着膨れの警備員が叱られた腹いせなのか横目でねめつけてきた。彼の目には正月を楽しく過ごす幸せ絶頂のカップルに見えるのだろうか。彼の蛇のようにまとわりついてくる視線に気付かないのかキャッキャ騒がしい千春の能天気さに居たたまれなくなって透はそそくさと早足でドアに向かった。

自動ドアに近づくと店内の喧騒が漏れ聞こえてきていて中の様子が窺い知れる。ドアが開くと想像どおり暴力的なボリュームのＢＧＭが透の鳩尾の辺りを揺さぶった。同時にヤニと消毒液の混じった退廃的で生暖かい空気が透を包む。あちらこちらから聞こえるパチンコ玉が釘をはねる音が耳にやかましい。外の冷たい空気が透の足元を通り抜けて勢いよく店の床を這い進みドアの側に陣取っている十数人の客の目が一斉にこちらに向いた。

人が見ている。こちらを見ている。

思わず帰りたくなる透の手を興味津々の様子の千春が店内に引っ張る。餌を持ってきた飼主を見つけた犬のように目を輝かせて透の

次の動作を待つ千春に仕方なく透は店内に歩を進めた。
人、人、人。狭くはないはずの店内が人で溢れかえっている。見える範囲に空いている台はなく狭い通路にも客がごった返している。
歩いているうちに奇跡的に空席が二つ並んでいる台を見つけると椅子取りゲームの椅子を奪う気持ちで周囲の目を気にしながら椅子に腰を滑らせた。マフラーを外して台の脇に置きプリペイドカードを差し込んで玉を買いレバーを握った。打ち上げ花火のように次々と玉が跳ね上がり星のように輝く釘の間を抜けて消えていく。チャッカーに玉が吸い込まれすぐに液晶画面がきらびやかに踊り出す。
「何？何？何が始まるの」
左隣に座った千春が画面と透の顔を交互に覗き込む。深海のような色の瞳が台の電飾を吸い込んで宝石のように光を放っている。
1列目の数字が3となり、2列目も3が出た。
「わ、わ、わ。リーチって言ってる。リーチだって、リーチだって。リーチって何？」
興奮した千春が透の袖を手加減なしで強く引く。眼球が飛び出してしまうのではないかと心配になるほど大きく目を見開いている。慌てるな、と諭したいところだが透も前回の店員の言葉が目の前にちらついて思わず息を飲んだ。
しかし二人の前に現れた数字は2だった。小さく息を漏らす透の隣で、なんだぁ、と千春が大げさにぐったりする。もう一度3が来たらどうなっていたのか知りもしないくせに。
釘が甘いのか次から次へとチャッカーに玉が吸い込まれ、メインデジタルにリーチアクションが起こるが、どれもこれもアクションに派手さがなく、案の定大当たりにつながらない。つぎ込む資本だけが嵩む格好で、顔も知らない店長が口の端だけを歪めて忍び笑う様子が脳裏を掠めるが、そろそろ来るかと思うと容易に台を換えるわけにもいかない。自分が極彩色の花弁と馥郁たる香りに誘われて食虫植物に吸い寄せられる愚かな羽虫のように思えてきた。このままんまと餌食になってしまうのか。

やがて見飽きてきたのか千春はパチンコ台に色鉛筆を何本か置いてスケッチブックに何やら絵を描き出した。その向こうから蝶ネクタイの店員がワゴンを押し灰皿を交換しながらやってくるのが見える。混雑している店内で一台を独占しながら絵を描いている客。何か小言を言われるかもしれない。それならそれをきっかけに帰ればいいいか、と心に決める。

近づいてきた店員は逞しそうな体格で冬なのに褐色の肌を持ち、茶髪にピアスに無精髭でやけに目つきが鋭い。街中ですれ違ったら絶対に目を合わせたくないタイプだ。いっそ注意される前に帰った方が得策かもしれない。

「おっと、悪いね」

千春の左隣に座っていた五十歳がらみの眼鏡を掛けたおじさんが山盛りの灰皿を店員に渡す。代わりに空の灰皿を受け取ると早速煙草に火をつけた。首から掛けた緑色のエプロンのポケットに手を突っ込みながら銜え煙草でレバーを握るそのおじさんに何となく見覚えがある気がするのだが思い出せない。誰だっけ、と考えているとその店員は千春のスケッチブックを軽く覗き込み彼の外見からは想像もできない温和な微笑みを見せるとそのまま立ち去っていった。あまりの柔和な表情に内心びくびくと身構えていた透は腰が抜けそうになる。

「何描いてるんだい？」

店員の背中を見送っていたら背後で声がしてどきりとする。振り返ると千春の隣の台で打っていたエプロンのおじさんが千春の絵を覗き込んでいた。絵と透を交互に見比べるとうんうんと頷きながら大仰に口を手で押さえ、かみ殺すように笑い出した。千春もにんまりと笑っている。馬鹿にされたように感じて台に向き直ると千春がスケッチブックをこちらに広げて見せた。

「近い」

絵を顔に近づけすぎで何が描いてあるのかさっぱり分からない。これで二回目だ。

「あっ、ごめん、ごめん」
千春がスケッチブックを引くと見えてきたのはいかにも獰猛そうな巨大熊と対峙する柔道着を着た人間だった。
「・・・誰？」
「もちろんお兄ちゃんよ」
平然と答える千春が透にはますます得体の知れない存在に思えた。もともと国籍さえも分からない素性を知らない相手ではあるが、こことここに至っては人間であるかどうかさえも怪しく思えてくる。熊と一対一で相対したこともなければ柔道着を着たこともない。一体この混血娘は何を見てどう思ったのか。
「だってすごく険しい顔してパチンコしてるんだもん。やらなきゃやられる、みたいな。そんな顔してる人、他にいないよ」
「うんうん。よく特徴とらえてる。こうして見てると台が熊に見えてくるもんな」
エプロンおじさんが人の良さそうな笑顔を振り撒き調子の良い感じで割り込んでくる。味方を付けた千春が、ほらほら、と悪乗りする。相手にしないことにして透はさらに玉を買った。
「次はおじさん描いてあげる」
透の無視にすっかり慣れたのか千春は微塵もめげた様子を見せず透に背を向けた。男前に頼むよ、とおじさんは相変わらず調子が良い。しかし、絵のモデルの経験がないからか、若い女の子に弱いのかすっかり肩に力が入ってしまってパチンコどころではなさそうだ。ちらちらと千春の様子を気にするので玉の飛びが一定しない。
スケッチブックを持ち歩くだけあって千春は迷いなくさらさらと描き上げていく。あっという間に仕上がった絵を肩越しに盗み見て透は思わずあっと声をあげそうになった。
白紙に現れたのは花を摘むおじさんの姿だった。その絵で透はおじさんが近くの花屋の店主だということを思い出した。花屋には縁のない透だったが一度だけ同僚が寿退職する際に、花束を用意するように、と上司に言われて買いに行ったことがあって何となく顔と

エプロンを覚えていたのだ。
ふと、透の頭の中で花屋と職場がリンクする。不意に目の前の世界が色あせて見えた。レバーに込めていた握力が抜けていく。耳に入ってくる全ての音がひどく遠くに聞こえる。脇にじっとりと汗をかき、逆に舌はカラカラに乾いてきた。鳩尾の辺りがズンと重い感じがする。
「はい、おじさん。これあげる」
千春は描き上げた花屋の絵をスケッチブックから切り取って渡した。
「おお、上手だねぇ」
確かに良く描けている。しかし、千春はどうしておじさんから花を連想したのか。透と同じようにあの花屋を利用したことがあるのだろうか。
「でっしょー」
透が誉めなかったからか千春は透に誇示するようにひどく得意げだ。
「たいしたもんだなぁ。でも、おじさんが花屋って知ってた？店に来てくれたことあったっけ？」
「ないよ。でも何となくパチンコしてるおじさんの姿がお花を連想させたの」
「ほぉ、嬉しいこと言ってくれるね。よし、これは絵の代金だ」
おじさんはご機嫌で自分の台から玉を手で掬い千春の台に補充した。
「いいの？」
千春は念願叶ったような笑顔で待ってましたとばかりに喜び勇んでレバーに手を伸ばした。すかさずおじさんが千春の手を取り指南を始める。その様子が透にはひどく遠くのなじみのない光景に感じる。まるで透が一人でパチンコにやってきてたまたま座った台の隣がエプロン姿のおじさんに連れてこられたハーフの若い女性だったというような感覚になる。透の目には二人がその他大勢の客に同化

して映った。
あ、回転し出した。
もうリーチか。早いなぁ。センスがいいね。
何かキラキラしてるよ。
お、これは来るなぁ。
来るって何？ねぇ、何が来るの？
バカ当たりするってことだよ。
バカ当たりってすごいの？ここにあと一つ7が来ればいいんだよね？あー、ドキドキする。
ドキドキするねぇ。
7だ！来たぁ！
よっしゃー。どんどん打って。もっともっと。
すごーい。いっぱい出てきたよ。
遠慮せずにどんどん打って。まだまだ、こんなもんじゃないよ。
わ、わ、わ。何これぇ。止まらないよ。どれだけ出るの？壊れたんじゃない？
壊れてないよ。ほら、また当たった。まだまだいける。どんどん打って、どんどん。
どんどん？おじさん、もう腕が痛くなってきちゃったよ。
そんなこと言わないで。どれだけ出してもいいんだから。
うーん。でももう痛いよ。おじさん交代して。
・・・
「お兄ちゃん。お兄ちゃんってば」
「？」
千春に腕を強く揺すられて眠りから覚めたように意識が覚醒する。トンネルを抜け出たときのように視神経に飛び込んでくる光の強さで一瞬世界が白く弾けて見えた。
徐々に慣れてくると三重四重にぼやけていた千春の顔に漸く目の照準が合ってくる。眉根を寄せた千春はひどく不安げな顔をしていた。

「ごめんね、お兄ちゃん。帰ろ」
千春が腕を取り透を立たせる。立ち上がると視界がぐらっと揺れたような気がして思わず千春の肩にもたれかかってしまう。後頭部からすっと何かを抜き取られたような感覚がして立ちくらみに襲われる。額に手をやるとべっとりと汗が付着した。そのまま手で両目を覆い指の腹で眼球を強く圧する。目の奥に重い痛みがあり、再び目を開くと揺れはおさまっていたが、視界の上部で埃のようなものがチリチリと点滅していた。どうやらパチンコ台の電飾が網膜に焼き付いてしまったようだった。耐えられなくはないが軽い吐き気が胃を圧迫している。
踏み出すと千春が脇で支えてくれていた。寝起きのようなぼやけた感じは少しずつ薄らいでいて両足の力も平常時に戻っていたが、無理をせず千春に腕を委ねたまま歩いた。
「お、おいおい。お嬢ちゃん、本当にいいのかい？」
千春は台を振り返り大きく頷くと再び透の身体を支えて出口に向かった。
自動ドアが開き戸外に出ると容赦ない寒気が気付けになった。大きく息を吸い込むと幾分身体がすっきりした。頬に手をやると驚くほど熱く、店内の高い温度設定に逆上せていたことが分かる。透は黙って千春から身体を離して歩き出した。平衡感覚は取り戻していた。
駐車場は相変わらずの混雑振りだったが、誘導しているのは先ほどのやる気のない着膨れの警備員でも彼を叱りつけていたベテラン警備員でもなかった。
店に入る前よりも雲が厚くなっていてさらに気温も下がったようだった。傍らを見ると赤いダッフルコートに身を包みいつの間にか透のマフラーを鼻の辺りまで覆うようにして巻いている千春が目だけで笑って見せた。あまりに無垢なその表情に透は思わず微笑み返しそうになる。透もダウンジャケットに顎を引き、来たときと同じように警備員の脇を通って道路に出た。ポケットに手を突っ込み数

歩前を見つめて何も喋らず並んでとぼとぼと歩く。寒くはあったが風はなくアスファルトに響く二人の足音が耳に心地よかった。
パチンコ屋から離れると車通りも少なく、人影もまばらで正月の町は静かだった。先ほどまでの不安定な感覚は消え去り、何となくこのままどこまででも歩いていけそうな気がした。帰り道を透は遠回りに変えてみた。来た道と違うことに千春は気付いていないのか黙ったまま同じ調子で歩いている。やがて家並みの向こうに木々の生い茂った一角が見えてくる。その一角に至り透が立ち止まると千春はきょとんと透を見上げ、それから周囲を見渡して大きな声をあげた。
「神社だ！」
さして立派とも言えない古びた神殿が一つとその横に社務所があるだけのこぢんまりとした神社で三が日の内だというのにまるきり人の姿が見えない。目を怒らせた狛犬も心なし張り合いなさげに見える。
「静かだね。誰もいない。巫女さんもいないよ。ねぇ、おみくじはどこで引くの？」
今時大抵の神社はアルバイトで巫女さんを雇っている。この神社も元日はさすがに巫女さんがいておみくじを売っていただろうが、正月も三日目のこの閑古鳥が鳴くような状況ではアルバイトを雇うのは人件費の無駄というものだ。
「自動販売機」
「自動販売機って・・・」千春は軽く背伸びをして境内を窺った。
「ないよ、そんなの」
「あれ」
透は社務所にある受付用の小窓の脇に設置されている赤く細長い箱を指差した。鉄製の無機質な箱に百円玉を入れレバーを降ろすとおみくじが出てくる仕組みになっている。
「風流の欠片もないね」
つまらない、と千春は嘆いたが、透には欧風な顔立ちの千春が「

風流」という言葉を使うのが妙に新鮮に耳に響いた。
透は千春に目で社殿の方向を合図した。眉尻や小鼻の際、口の端を努めてぴくりとも動かさず完全なる無表情に徹している。千春は透の目配せの意味が分からず社殿と透の顔を交互に見比べていたが、いつまで経っても足を境内に踏み入れることなく腕を組んで棒立ちしている透の様子に千春はその意図に思い当たったようで小さく吹き出した。
「はいはい。一人で初詣してきますよ」
拗ねたような口ぶりで千春は社殿に向かって歩き出した。
律儀に手水舎に寄り柄杓に右手を伸ばす。まず左手に水を掛け、次に左手に柄杓を持ち直して右手を清め、さらに右手の掌に柄杓で汲んだ水で口を濯いだ。最後にまた右手を水で流すと千春はダッフルコートのポケットからハンカチを取り出しそっと口を拭った。
離れたところから眺めていても神社という日本文化の最たる場所に西洋の肌の色をした千春はやはり異質で景色から浮かび上がっていた。しかし、柄杓の水で自らを浄化させていく一連の滑らかな彼女の所作は、それだけに一層際立って美しく見えた。彼女の雪で造ったような白い手に流れる神の水は見る者の心をも清めてくれるようだった。
見惚れるように眺めていた透を千春が不安そうに見つめ返す。
「置いて帰っちゃダメだからね」
小学生のような不安を口にする千春に大人の女性の美しさを見ていた透は冷水を浴びせられたような気分だった。面倒臭そうに頷くと千春は諦めたように社殿に向き直り静々と石畳の上を歩いていく。コートをごそごそ探っているのは財布を探しているのだろう。やがて賽銭箱に硬貨が跳ねる音がして千春は梁からぶら下がっている太い縄を掴み全身を使って鈴を振った。シャランシャランと軽やかな鈴の音が静かな境内に鳴り響く。次に千春は社の奥の神体に向かって二度頭を下げ拍手を二度打った。乾いた音が冬の冷たく張り詰めた空気を割くようにこだました。何を祈っているのだろうか。千春

は胸の前で手を合わせたまましばらくの間ぴくりとも動かない。１分もそうしていただろうか。どうかしたのかと見ている透が不安になってきた頃にようやく手を解くと彼女は社殿に向かって再び深く一礼した。

願掛けが済むとどことなくさっぱりしたような表情で社務所に向かいおみくじ販売機の前に立った。しげしげと赤い箱を見渡し何かを確かめるようにぽんぽんと軽く叩いたり撫でたりしている。さらにその赤い箱に対しても拍手を二度打ち一礼して願を掛ける。ようやくレバーが下がる音がして千春がおみくじを握り締め小走りで戻ってきた。

「はい。今度はお兄ちゃんね」神殿を指さす千春を無視して透が帰ろうとすると千春は動物園の飼育係にしがみつく猿のように透の腕をつかまえ体重を掛けて留めようとする。「ダメだよ。せっかくここまで来たんだから。行っといでよ、ね？ほら」

振りほどこうとする透に千春は駄々っ子をなだめすかすような口調だ。

そろそろ日が暮れる時間なのだろうか。あたりは急速に暗くなりだしている。この季節は夜まで一足飛びだ。先ほどまで火照っていた身体も今はすっかり冷え切ってしまった。こんなところでつまらない押し問答をしている場合ではない。透は渋々千春の言葉に従って社殿に向かった。

「おみくじも買っておいでよ。開かずに待ってるから」

透の背中にこれを楽しみに待っていたんだとばかりの嬉々とした千春の声が届く。どうしておみくじ一つでそんなに楽しめるんだ。透は小首を捻りながら賽銭箱の前に立った。

賽銭を投げることもなく、鈴を振るでもなく簡単に拍手を二つ叩くとろくに頭も下げずに透の初詣は終わった。自動販売機でさっさとおみくじを買うと今度は焦らすようにゆっくりと千春のところに帰ってくる。

「お兄ちゃん、もっと真面目にお参りしないと罰が当たるよ」千春

は怒っていると言うよりも透が神の不興を買うことを真剣に心配しているようだった。「この神社の祭神は大物主神って書いてあったわ。大物主神って言ったら強力に祟ることで有名なんだよ。雷神様だから怒りに触れたら頭から雷落とされて丸焦げになっちゃうよ。どうすんのよ」

両の拳を握り締めて神の恐ろしさを訴える千春の口調にどんどん熱がこもって透はますます千春のことが良く分からなくなる。

神仏のご加護などおよそ当てにできない現代において少し参拝の作法を軽んじたぐらいで何をそんなに困惑することがあるのだろうか。女だてらに強引に一人住まいの男の部屋に泊まりこんでテコでも動かない奔放さを持ちながら日本古来の神の存在を正面から肯定しその霊験を信じて疑わない古風な面を見せる。外国語訛りのない西洋人顔の千春の頭の中は透の常識がまったく通用しないように思えた。

「そんなことよりもおみくじ見てみろよ」

そうだったそうだった、と思い出したように千春は握り締めていた右手から漸く力を抜いた。あまりに力を込めていたものだから小さなおみくじがさらに小さく丸まっている。どれどれ、ともったいぶるようにして少しずつ丁寧に広げていく。

現われたのは朱書きの「大吉」だった。透は思わず身構えた。きっと千春は最良の結果にテンションを爆発させて踊りだし、奇声を上げるだろう。

「また大吉かぁ」

肩透かしとはまさにこのことだった。身体を強張らせた透の前で千春は全身を弛緩させている。喜んでいないわけではないのだろうが、透の目にはどこかつまらなさそうにさえ見えた。

「やっぱりおみくじって大吉しか入ってないんだ」

寂しそうにぼそっと口にした千春の独り言がここ十年ほど大吉という文字を拝んだことのない透を驚かせる。おみくじに仕掛けがあるのではなく千春が稀に見る強運の持ち主なのだということを面倒

臭そうに説明すると今度は千春が大きく目を見広げた。
「私、毎年初詣でおみくじ引いてるけど大吉ばっかりだもん。巫女さんが気を使って大吉ばっかりにしてるんだと思ってた。私、一度で良いから小吉とか末吉とか出してあんな風に木の枝に括りつけてみたい」
千春が指差した先には梅だろうか、それほど背が高くなく四方に枝を伸ばした木が立っていて、その枝に結わえ付けてある無数のおみくじが季節を先取りして咲いた白い花びらのように見える。
「凶、引いたことある」
大学受験のシーズン直前に引いたのが凶だった。こんなものは何の意味もない運試しにすぎないと頭では理解していたが、受験が終わるまでこの禍々しい一文字を心の片隅から排除することができなかったのを思い出す。
「いいなぁ！凶ってさ、響きが格好良いもんね」
宝くじの当選者を見るような千春の目の輝きを透は冷ややかに見つめ返した。おみくじに格好良いも悪いもない。大吉を疎み、凶を羨むなんてそれこそ罰当たりというものだ。
「『恋愛』は、『そのまま進め』、だって。よしよし。順調順調。『病』は、・・・」
強く念ずれば治る。
透が目の端で確認した「病」の欄にはそう書いてあった。千春の顔に一瞬影が差したように見えた。
「強く念ずれば、か。なんだか微妙だなぁ」
どこから見ても元気の塊のような千春がまるで病人のような物言いをする。何となく気になったが「千春のことだから」と透は深く考えないことにした。
「お兄ちゃんのは？」
他の項目には目もくれず千春はおみくじを折りたたんで財布の中に仕舞うと透の真横に立ちその手元を覗き込んだ。透は千春とは対照的に子供の遊びに付き合っていられないという体で一気に開いた。

「半吉だ。渋いっ！」
おみくじに渋さなどない。しかし千春は心からそう思っているようで、先ほど一瞬見せた寂しそうな表情はあとかたもなく透の手から毟るように奪うと感嘆の声を漏らしている。覗き見ると「恋愛」は「波乱あり」で「病」は「長引くが治る」となっている。
「いいなぁ、半吉だなんて」
「嫌味か」
「嫌味じゃないよ。だったら私のと換えっこしてよ」
「そんなことして何の意味がある」
「交換したら私が半吉でお兄ちゃんが大吉だったってことになるじゃん」
「ならねぇよ」
交換したところで千春が大吉で、透が半吉だったという事実がどうこうなるわけでもないし、それで運勢が変わるわけでもないだろうに。透は呆れ加減で千春を置いてさっさと歩き出した。陽はすっかり落ちて遠景の輪郭は朧になり、少しでも動いていないと足元から膝、腰へと這い上がってきた寒気で身体が冷え切ってしまう。
「待ってよ、お兄ちゃん」
千春は透の前に回り込み人込みではぐれまいと必死にすがりつく幼児のような目で透を見上げる。透には妹はいないが千春に本当の兄として慕われているような気になる。
「このおみくじどうすんの？」
言われて千春の手の上にある紙片に目を落とす。半吉がどれぐらいの運勢なのかよく分からないが縁起の良さは感じない。
「結んでくるか」
持って帰っても仕方がない。ズボンのポケットに入れたまま洗濯をしてゴミにしてしまうぐらいなら梅の木の賑わいにした方がましだ。
「要らないのならちょうだい」
他人のおみくじなんかもらってどうするつもりなのか。言い出し

たら聞かない千春に諦めモードで頷くと、やった、と小躍りして大吉のおみくじと同じ場所に仕舞いこんだ。
「あのおっさんが花屋って知ってたのか？」
先ほどから透はそのことが気になっていた。様子を見る限りでは知り合いではなさそうだったが、想像で描いたにしては花を摘んでいる絵はあまりに的を射すぎている。それとも千春には何か特殊な能力が備わっているのだろうか。
「あー、あれね。あのおじさんの指見た？すごく荒れてたし爪の周りが緑色に汚れてたでしょ。だからきっと花屋さんなんだなって。隣に座ったときに微かにお花の香りもしたしね」
言われてみても透は何も思い出せず、ただただ千春の観察眼の鋭さに驚くだけだった。
「俺って熊と戦ってるように見えたのか？」気にしてるんだ、と千春は透をからかうようにころころと笑う。「怒ってるの？」
そういうわけじゃない、と透は首を横に振る。怒りよりも惨めさに近い。娯楽であり遊戯であるべきパチンコに対し目を吊り上げて生活費を稼ごうと血戦を挑みそしてあえなく敗れ去った哀れな男。思い返せば楽しむという感覚からは程遠く、残ったのは首と肩のコリだけだ。とても格好のいいものではない。
「熊と戦っても勝ち目がないわよ」
パチンコは向いていないと言いたいのか。時折鋭い勘を働かせる千春の次の言葉を透は待ったが千春はいつものにこやかな表情を浮かべるだけでそれ以上何もしゃべらなかった。

5

千春は一向に部屋を出て行く様子を見せなかった。それどころか日に日に透の生活環境になじんできている。まるで本気で部屋の一部になりきろうとしているのか思うほど彼女の身の処し方は徹底的だった。透が覚醒している間、千春はほとんど姿を消したことがない。大抵は透の傍らにちょこんと座り、黙々とスケッチブックと格闘している。描くのは透の部屋にあるもの。透の生活を記録するかのように透やテレビや冷蔵庫や本棚などこの部屋のありとあらゆるものを平面の世界に描写していく。出来上がると突然透の眼前に広げて見せ、見せるだけで満足なのか透の言葉を待たずにまた次の作品に移る。食料品や生活必需品などは不定期な透の睡眠中に調達しているのだろう。冷蔵庫の中も洗面台の棚もいつの間にか補充されているのだ。服薬すると一定時間は目覚めることがない透だから買い物も風呂もその間に済ませていることになる。千春が寝ているのを見るのは三日に一度ぐらいだ。透が夜中にゲームをしている間に透のベッドでクークー寝息を立てる。しかし、残りの丸々二日間をずっと起きっぱなしということでもないことは彼女の様子を見ていれば分かる。つまりは透が寝ているときに千春も眠っているのだろう。ぼんやりとだが、透が寝ているときに背中や腕の辺りに温もりを感じるときがあるような気がするのは千春が透のベッドに忍び込んで傍らに寝ているからかもしれない。食事も透の頃合を見計らって千春が作っている。そのタイミングは絶妙で千春がこの部屋に寝起きするようになってからは透は台所に立つことが完全になくなっていた。

三が日が終わって一週間が経っていた。いつまでも新年だ、正月だと世間は浮かれてはいない。しかし透の生活に変化はなかった。緩みも引き締まりもしていない。仕事に出ることをしない透は盆も暮れも正月も同じリズムでその日その日をひたすら無為に過ごして

いる。それは千春が現れる前と後でも基本的に変化はなかった。ただぼんやりとゲームをし、時折パソコンで株価や為替相場をチェックし、一週間に一度程度パチンコをする。何時になったら、だとか、何時までには、などと意識することがない。腹が減れば深夜であろうと近くにあるものを口に放り込む。眠りたくなれば昼日中であろうと薬を飲んで無理やり意識を落とす。やがて目が覚めれば全身の細胞の働きを一つひとつ確認するように時間をかけてベッドから抜け出し、定位置である座椅子の上を目指して床を這う。東雲の空が白み、黎明の光に星が消え、南天に気温が緩み、日差し受けて影が伸び、ちぎれ雲の横顔に茜が差し、西の果てに陽が落ちる。そんな太陽の動きとは全く無縁のどこまでも自分本位の生活だった。

開かない目をこじ開けるようにして時計を凝視したら午後3時だった。証券取引所が株の売買を終える時刻だ。持ち株の今日一日の値動きを調べようと部屋の隅にあるパソコンデスクの前に爬虫類のように這い上がり電源を入れる。ブーンという起動音を聞いていると後頭部の痺れが助長されるようだ。立ち上がるのを待っている間に重力に抗いきれないように瞼が再び下がってくる。

ねぇ、と久しぶりに千春の声を聞いた。

ハッと顔を起すと小さく光る無数の何かがこちらに飛び掛ってくるのが認識できる。目を凝らすと星の粒だった。スクリーンセーバーが作動していることからパソコンを立ち上げてから少なくとも十分間は意識がなかったことが分かる。

ねぇえ、とまた背後から千春が呼びかけている。暇つぶしに池の蓮の花に向かって小石を放り込むように何度も何度も飽きることなく透の背中目掛けて声の飛礫を投げかける。

透がゆっくりと振り返ると千春は先ほどまで透が寝ていたベッドで布団に包まって横になっている。温かい、と幸せそうにまどろむ千春を見ていると透にも再び眠気が伝染する。頭の芯が痺れてきてマウスを持つ手が止まる。まどろみ加減の透に千春がベッドから話しかける。

「お兄ちゃんの部屋ってさ、文庫本が多いよね。特に島崎藤村の。好きなの？大学のゼミで研究してたとか？」
この千春の問いかけは透の耳に届いていた。しかし透の感覚はどこかの部屋で鳴っている電話のベル程度のものだった。誰かが出るだろう。早く出てあげればいいのに。ぼんやりそう考えているうちに漸く透は千春が問いかけているのは自分なのだということに思い至る。
「本が多いのね。小説とか好きなの？聞こえてる？」
「あ？ああ」
「気に入ったのあったら勝手に読んでもいい？」
重力に任せるようにして大きく頷く。首に力が入らず俯けた顔を戻すのが一苦労だ。
背後でベッドが軋んだ後、何かを引きずりながら千春が動いているのが分かる。夜明け前って面白い？破戒ってどんなストーリーなの？まだあげそめしまえがみってどういう意味？透が答えようとして口を開く前に千春はもう次の質問を繰り出してくる。それはまるでラップを歌っているように矢継ぎ早に。千春はこちらの返答を待っているわけではないのだと知り透は黙ってマウスを操作する。インターネットに繋ぎ登録銘柄のデータを拾う。
「お兄ちゃんって仕事しないの？」
一瞬カーソルを動かす手が止まるが、これも千春の独り言だと努めて聞き流した。ハミングのような軽いリズムでの問いかけなので真面目に答える必要もないだろう。
「お兄ちゃんって先生なんでしょ？」
心臓が大きく跳ねる。収縮するときに、ビクン、という音が耳に聞こえたようだ。カッと胸が熱くなり透は乾いた目を大きく見開いた。誰から聞いた、と問い詰める言葉が口に出かかったが何とか飲み込んだ。和馬以外に考えようがない。売れない舞台俳優のにやけた嫌味な顔が目に浮かぶ。
一体、千春と和馬はどこでどう繋がっているのだろうか。

不意に大晦日に和馬がこの部屋にやってきて、部屋が汚いと罵り客が来たら困るだろうと掃除をしていたのを思い出す。何ヶ月も顔を見せることがなかった兄が突然やってきて、面倒臭がりで昔から整理整頓が大の苦手のはずなのに部屋の片付けを始めたときに何となく妙だと思ったのだが、今にしてみればそれが千春がやってくる前触れだったのかもしれない。ここに千春が入り浸っているのはおそらく和馬と千春の計画どおりなのだろう。同時に何人もの女と付き合い、年がら年中自分の行動をその場しのぎの嘘で取り繕っている和馬を計画性のない杜撰な性格だと蔑んでいたのだが、その和馬にしてやられたかと思うと自分の愚かさを透は呪いたくなる。

「もう辞めちゃったの？」

どうしてそんなことを知りたがるのか。他人の人生に勝手に踏み入るようなことはやめてくれ。

「カーテン開けてもいい？」

千春が立ち上がって窓際に向かう気配がする。初めて透は千春を振り返った。

「開けるな！」

思わず声が大きくなってしまい目を見開いた千春との間に張り詰めた沈黙が幕を下ろす。毛布をマントのように肩から掛けカーテンの端を掴んで凝然と立ちつくす千春の血の気の引いた顔を見て自分もきっとこんな冴えない顔つきなのだろうと透は思った。

「画面に光が映りこむから」

今さらこんな言い訳をして何になるのか。先ほどのまどろみとは種類の違う、身体が冷え切って意識が遠のくような感覚がして千春が遠くに見えた。顔が強張ってうまく自嘲の笑いも作れない。透は開き直ったように画面に顔を向けなおした。自分は部屋の主なのだから取り繕うようなことを言う必要はないのだ。透の態度が気に入らなければ千春が出て行けば良い。何もこの部屋に引き留めている訳ではないのだから。

「そうだね。ごめんなさい」

か細い声が聞こえて思わず振り返ると、千春は相変わらず青ざめてはいるが柔和に微笑んで本棚の前に戻っていった。毛布で覆った背中がやけに小さく見える。後ろから抱き締めたいような、抱き締めなくてはいけないような気持ちにさせる弱い女の背中だった。しかし透はそうしなかった。自分の方がもっと弱いと自覚しているからだった。

透は知っていた。蛍光灯の人工的な明りと窓から差し込む太陽の光とでは照らされたものが何もかも違って見える。日差しには圧倒的な力がある。その先にあるもの全てを明と暗、正と邪に二分してしまうのだ。この部屋の生活に正しいものは何もない。不純な日常、不健康な生活、邪な生き方。蛍光灯の明りでは見えないはずの透が吐き出す腐敗した呼気は窓から入り込む神々しい光によって醜い黄土色に浮かび上がってしまう。千春が生活するようになり見た目には小奇麗になったこの部屋も外から照らし出せば陰気な墓場と同じなのだ。幾ら表面的に美化しようと、この部屋の諸悪の根源を絶たねばそれは変わらない。透はそれを千春には気付かれたくなくて反射的に声を荒げたのだ。

株価は今日も下がっていた。また高掴みしてしまったようだった。売り時を考えなければいけない。傷口を広げないためにも明日にでも全ての持ち株を手放してしまおうか。

「仕事、まだ辞めたわけじゃない」

どうしてこんなことを口にしてしまったのだろうか。赤の他人の千春にこんなことを告白して俺は一体どうしてほしいのか。解決できない問題に下手に巻き込んでもお互いが疲弊するだけなのに。心が病んでいる人間は一度マイナス思考に陥ると自力では留めようがないことを透は知っている。奈落へと続く螺旋階段を一度降り始めると、まだ下がある、もっと下があるとどん底を目指して足が勝手に動いてしまう。こんな風になってしまったら、そしてさらにあんな風になってしまったら。頭上から降り注ぐ光から逃れるようにどんどん、どんどん悪い方へ低い方へ暗い方へと視線を落とさずには

気がすまない。
「辞めたわけじゃないのに、仕事に行けないんだ」
ダメだと分かっていても口が勝手に弱音を吐いてしまう。千春の足元にすがり付いて彼女を自分の居る社会の底辺まで引きずり落とそうとしている。闇に包まれた世界に連れてこられた千春はこんな場所にいるなんて、と慰めの言葉を透に掛けるだろう。そのとき、透は、分かったようなことを言うな、と、所詮他人事だろ、と千春を厳しく咎めるのだ。自分から進んで闇を求めたにもかかわらず、明るいところから手を差し伸べた人間を傲慢だと罵ることで弱者は精神の安定を図ろうとする。卑怯だと分かってはいるのだが口をついて出てしまう言葉を透は抑えられない。
「足が前に進まないんだ。情けないだろ？軽蔑するだろ？」
透は千春に背を向けたまま彼女を罠に誘い出した。こちらに一歩踏み出せば彼女は網にかかり逃げ場を失う。透は大きく息を吐き両手で顔を覆った。千春がこちらを振り向いたのが分かる。羽に傷を負った鳥を哀れむ目でこちらを見ている。その鳥が罠に仕掛けられた好餌であることも知らずに。
「ううん。軽蔑なんかしないよ」
透の期待どおりの言葉だった。まさに罠にかかった瞬間だった。千春は透と同じ目線に立って考えようとしている。千春は進んで透の居るところまで降りてきてしまったのだ。そこから何が見えるかと試み、そして何も見えない闇だと気付いたときには千春は自分が透に言った慰めがいかに空虚で根拠のないものだったかと実感することになる。透はそれをあげつらえばそれで良い。千春の言葉など嘘っぱちで口先だけのものだと詰ればいいのだ。彼女はその清らかな頬に涙を流して謝るだろう。そして透は泣けば済むのかとさらに追い討ちをかける。徹底的に千春を打ち据えて漸く透はそこに他人の不幸な様子を見つけ、とりあえずの精神的安定性を取り戻すことになる。
「どうして？」

この問いに千春は答えられないだろう。「どうしてって、それは・・・」と言葉に詰まるだろう。そこで透は「答えられないじゃないか」と詰め寄ることになる。安っぽい同情を示して哀れむような真似は無責任すぎる、と何の罪もない千春を悪人に仕立て上げようとしている。

「お兄ちゃんは、少しだけでも働いてたんでしょ？私なんてせっかく受かった大学も一年で中退して、ふらふら遊びまわってばっかりで結局二十三歳になった今でも一度も働いたことないんだもん。私ったら自分でも嫌になるぐらいどうしようもない穀潰しなの。今だって完全に居候だしね。お兄ちゃんこそ私を軽蔑したでしょ？」

軽蔑という名の不快感ではなく、改めて目の前に居る女性が何者なのかという不気味さが背筋を冷たくさせる。気がつけば逆に自分が罠に足を踏み入れてしまっていると透は思った。酔っ払いの戯言のような台詞だが千春の顔からは嘘の欠片も見当たらない。まるで他人の噂話のように頓着ない表情の千春だが、もしも彼女が透と同じ類の病を隠し持っていたなら次の透の言葉が彼女に与える影響は大きいはずだ。

立場は逆転していた。少なくとも透はそう感じていた。透の口元を見つめる彼女の目が透に次の言葉を催促しているように見える。こちらが千春の領域を侵したのではなく、呼んでもいないのに彼女の方が透の部屋に飛び込んできたのだから、透が彼女の気持ちを斟酌しなくてはならない謂れはない。しかし、そう割り切ってしまえない透の中にわずかに存在している人間としての良心が、軽蔑なんかしない、と言えと迫ってくる。しかしそう言ってしまった後にどうしてと理由を追及されれば二の句が継げない。だから人間づきあいは面倒なんだ。透は何も思いつかないままゆっくり口を開きながら必死に頭を巡らせた。

ピンポーン。ピーン・・・ポン。ピンポンピンポンピンポン。

金縛りにあったように見詰め合う二人の間に不穏に漂う空気を誰が押したのか瞬時に分かる呼び鈴が一蹴した。

「また、あいつか」
大げさに項垂れて見せる透を置き去りに千春が背負っていた毛布をベッドに投げ、はーい、と小走りで玄関に向かう。ドアが開く音と同時に想像どおりの声が部屋に割り込んできた。招かざる客ではあるが今日ばかりは窮地を救われたような心持だった。
「おっ、千春ちゃん、居たんだ。元気にしてる？」
和馬は千春が部屋に居ることが意外だったのか、それともロリコンの気があるのかしげしげと高校時代の体操ジャージを着ている千春の姿を眺めている。
今日の和馬はニット帽を被っていて自慢の緑髪が見えなかった。案外自分でも恥かしくて昼間は隠しているのかもしれない。
「うん。私なりにね」
千春は先ほどの透との陰湿な雰囲気など微塵も見せずにいつもの元気溢れる弾けるような声で和馬に答えた。
「そりゃあいい。元気が一番だ。あの背中に椎茸でも生えてそうな奴に爪の垢でも煎じて飲ませてやってくれ」
暗がりのじめじめしたところが好きだとでも言いたいのか。和馬は部屋の主である椎茸男に許可を得るでもなく靴を脱ぎ、ずかずかと肩を怒らせて部屋に上がりこんできた。透は立ちあがってその和馬が着ているスカジャンの袖を取り部屋の隅に引っ張って小声で話しかけた。
「どうなってんの？」
「何が？」
「何がってあいつだよ」和馬の肩越しに千春を見ると、こちらを向いて微笑んでいる千春と目が合ってすぐに視線を戻す。「千春のことだよ」
「千春ちゃんがどうかしたか？」
和馬のとぼけた顔が透をイライラさせる。
「どうかしたかじゃねぇよ。どうしてあいつはこの部屋に居座り続けるんだよ」

「そりゃ、お前の彼女だからだろ。居座りっていうか同棲ってことじゃねぇの？」
「付き合ってないんだよ。俺とあいつはあの日が初対面なの」
透が言い放つと和馬は初めて知ったという素振りで驚いたような困ったような顔つきになり黙り込んだ。しかし、すぐに何かに思い至ったようで愁眉を開いた。
「別にいいじゃん」和馬はいやらしく眉尻を下げて透の肩越しに千春を盗み見る。「マニアにはあの格好はたまらんだろ」
「誰がマニアなんだよ」透は和馬の二の腕を軽く殴った。「大晦日の夜からずっと泊り込んでるんだ。多分一度も自分の家に帰っていない。あいつのこと何か知ってるんだろ？」
透は藁にもすがるような思いで和馬から千春についての情報を聞きだそうとするのだが和馬の態度は暖簾に腕押し、糠に釘といった感じだった。
「何にも。知ってるのは相当可愛いってことだけ」
「ふざけんなよ。大体あの日いつからあいつは俺たちと合流したんだった？」
「何だよ、お前。まさか本当に何にも覚えてないのか？」
「ちょっと飲み過ぎたんだよ。あんたが飲ませたんだろ」
「勝手に飲んだんだろ。よく言うよ」
和馬は面倒臭そうにあの夜のことを透に説明した。和馬によれば、透が前後不覚に酔っ払って道に寝転んでしまったところにどこからともなく現れた千春は、後は私が部屋に連れ帰って介抱しますので、と慣れた感じで透の頬を叩き強引に起こして背負うようにして去っていったということだった。
和馬は日頃から平気で嘘をつくので信用はできないが、和馬の言葉からはふざけた感じや繕ったような部分は見当たらず、強ち嘘を言っているようにも見えない。てっきり和馬が何かを知っていると思っていた透は完全に当てが外れてしまっていた。
「どうしていつまでも出て行かないんだろ？」

独り言のように呟くと和馬はいつもの浮ついた調子で透の肩を抱いた。
「別に何だっていいじゃん。俺は前からお前には彼女がいた方が良いと思ってたんだよ。こりゃ、まさにお前の人生の転機だ。女次第で男は人生観変わるぞ」
和馬はそう言って豪快に笑いながらバシバシと透の背中を叩き、千春を振り向いた。
「千春ちゃんは、こいつに冷たくされてない？」
「おかげさまで冷たくされるのには慣れてきちゃったわ」
千春が両手で涙を拭うような仕草をする。それを見た和馬が鬼のような形相で透に向き直った。
「透！電話であれだけ千春ちゃんを大事にしろって言っただろうが」
丁重な扱いを強要される謂れはない。被害者はこちらの方だという意識が透にはある。
「そんな義務はない。あいつが勝手なんだよ」
「お前、千春ちゃんを目の前にしてそんな言い方はないだろ」
「いいの」千春は芝居がかった困惑顔で二人の間に割り込んだ。「いいのよ。本当のことだもん。私、お兄ちゃんと一緒に居られるだけで十分なの」
真面目な顔してそんなことを言われては居場所に困る。これ以上ない惚気を聞いて気分を良くしたのか怒りを収めた和馬が見せるニタニタとしたねちっこい笑いを直視できない。和馬は布団と毛布が乱れているベッドを見つけると、さらに「なるほどね」と意味ありげに口元を歪めた。和馬は勝手にあらぬことを想像しているに違いない。
「違う！違うの。これは私が・・・」
さすがに千春も必死に弁解しようとするが、「いいよ、いいよ」と和馬は聞く耳を持たない。出来上がってしまった和馬の妄想を覆すことは不可能だろう。こうなると、何でもいいや、と開き直るしかない。透は薬を飲んで何もない眠りの世界に逃げ込んでしまいた

くなってきた。
「ところで、透。お前いつから千春ちゃんの兄貴になったんだ？」
当然の疑問だ。俺に訊くなよという迷惑そうな顔で透は千春に説明を促した。
「『兄』じゃなくて『お兄ちゃん』よ。それがしっくりくるの」
「んー、よく分かんねぇけど、あだ名みたいなもんかな」
「そうね。恋人同士の愛称みたいなもんよ。ほら、カップル同士って、ダーリン、ハニーって呼び合ったりするじゃん。同じような感じで『お兄ちゃん』って呼んでるの」
千春の説明は先日と微妙に食い違っている気がする。確かあのときは本当の兄に似ているからだと言っていたはずだ。
「じゃあ、俺のことは何て呼んでくれるの？」和馬は得意そうに鼻を鳴らす。「俺、透の実の兄なんだけど」
「えー」と大きな声で驚いたのは千春ではなかった。もちろん透でもない。いつから居たのか声の主は玄関に立っていた。
光沢のあるグレーのスーツ。襟にフェイクとは思えない大きなファーの付いたベージュのコート。首にはエルメスらしき赤茶けたスカーフを巻いている。独特の硬質な印象を与えるバッグはクロコダイル革か。凡そこの貧乏臭い部屋に似つかわしくない豪勢な格好だ。すらりとしたスタイルの良さはハーフの千春に引けをとらず、身につけているいかにも高級そうな品々が浮きも沈みもせず彼女の一部となっている。上品だとは思わないが、決して嫌味にも映らないのは彼女が長年こういった高価なモノを身近に使ってきたからだろう。年齢的には千春と同年代に見えるがエキゾチックな千春とは全く種類の違う華々しい存在感を持っている。
彼女は玄関でヒールを脱ぐや、つかつかと透の前までやってきて顔を食い入るように覗き込んだ。いきなり鼻と鼻がぶつかりそうなぐらいに顔を寄せられ、透は肉食動物に襲い掛かられたような恐怖を感じてヒィッと思わず目を閉じた。お互いの体温さえも感じあえるような距離で彼女の首筋から甘ったるい香水の匂いが立ち上る。

その香気に神経が堕落しそうな気がするとともに寝起き同然で歯も磨いていない息が相手にかかりそうで透は思わず息を止めた。
「ふーん。言われてみたら何となく似てるかも」
漸く彼女は納得したように透から顔を離した。彼女の温もりとともに馥郁とした香りもさっと遠ざかる。漸く透は金縛りが解けたように目を開き呼吸を再開した。
「眉毛の生え方とか小鼻の膨らみ方なんかはやっぱり似てるみたいね」
「ちょ、ちょっと、何？誰？」
透の口調は非難めいていた。突然のことで呆気にとられていたが、よくよく考えれば彼女の振る舞いは常識に欠ける失礼な行為だ。
「お兄ちゃん、照れてるんじゃないの？顔赤いよ」
口を尖らせた千春の指摘は図星だった。思わず俯いて顔を隠したくなったが、透はぐっと腹に力を入れて、何言ってるんだとばかりに千春を睨み返した。
「本当だ。お子ちゃまだなぁ、透は」
和馬にからかわれるのが一番頭にくる。
「うるさい！誰なのか説明しろよ」
和馬が現れて以降、平穏だった毎日の生活リズムがどんどん変調を来してきている。もうこれ以上誰かと関係するのはうんざりだ。
「春美だよ。こないだ電話で連れてくって言っただろ」
確かにそんなことを言われた気もする。おそらく大晦日に飲んだときにも春美の名前は出ていたのだろう。彼女の素性についての和馬の説明を透は何も覚えていなかったが、こうして和馬が連れてきたのだからそれなりの関係に違いない。これまでに和馬に付き合っている女性を紹介されたことは一度もなかった。ちゃらちゃらとした遊びの付き合いばかりだったから弟に紹介するも何もなかったのだろうが、そういう意味からすれば彼女は和馬にとって今までにない特別な存在ということなのだろうか。
「また出会い系サイト？」

和馬が付き合う大抵の女性との出会いはこれかナンパがきっかけだ。
「あ、お前、今蔑むような目をしただろ。出会い系は殺伐とした現代に生きる寂しい大人が情報交換しあう画期的で有益なツールなんだぞ」
「だとしたら高校生はまずいよな」
透の渾身の嫌味に和馬は眉を吊り上げ目を怒らせて見せてから、小さな声で凄んだ。
「高校生だって立派な大人だ」
しらけた表情で腕を組んでいた春美は聞くに堪えないといった態度で二人に背を向けた。
「外国の方？」
春美の興味は千春に移ったらしく、またもや何の遠慮もない目でしげしげと千春に穴が開きそうなくらいに見つめている。どういう教育を受けてきたら初対面の人間にそんな態度になれるのだろう。
「初めまして」
千春は春美の不遜なまでの視線をにこやかに受けて立った。悪意たっぷりの春美に全く敵意を示さず、かと言って臆して媚びた愛想笑いを浮かべるわけでもなく堂々と胸を張った千春が透には好ましく思えた。
「おお。そう言われてみりゃあそうだな。鼻が高くて目は青いし肌も白い。こういうの何て言うんだっけ？ノスタルジック？」
「それを言うならエキゾチックでしょ。ホント、ばっかじゃない？」
春美は蔑みを絵に描いたような、第三者の透でさえ背筋を凍らせるほどの冷たい眼差しを和馬に示す。さすがの透も和馬が気の毒になるが、和馬もさる者で「ああ、それそれ」と微塵も傷ついた様子もなくおどけた調子で頭を掻く。この二人はこれで結構うまくいっているのかもしれない。千春も同じことを考えていたのか透と目が合うと首を竦めてにっこり微笑んだ。
「しっかし、顔立ちは少し西洋っぽいけど千春だなんて完全に和風

の名前だし日本語の発音もおかしなところはないし、外人っぽいところが全然ないね」
和馬は感心したような口ぶりだ。
「母親がフランス人っていうだけであって、私は日本で生まれて日本で育った生粋の日本人よ」
千春の底抜けの明るさは母親譲りのものだろうか。透は冬の長い北部ではなく一年を通じて青い空が似合うという地中海に面した温暖な南仏を想起した。
「お母さんがフランス人だなんてかっこいいわね」
春美が特に羨ましそうでもなく言った。彼女は自分に絶対の自信があって他人のものを嫉視することなどないように見える。千春も千春で「そうかな、そうでもないよ」と曖昧に頬を緩めるだけだった。どうやら彼女は自分の身体の中に少しでも日本人らしからぬものがあるのが気に食わないようだった。
「母は最初観光目的で日本に来たんだけど、そのとき日本の春の美しさに心を奪われてそのまま住み着いちゃったんだって。自分の娘の名前にも『春』を付けちゃうくらいだから相当よね。私自身は無常って感じで物寂しい秋も好きだけどね」
お兄ちゃんは？と訊かれ透は答えに詰まった。透はヤドカリのように部屋に篭り一年以上季節というものを感じていない。
「お母さんがフランス人だから、千春ちゃんもフランス語がペラペラなの？」
興味津々の態で和馬はひどく陳腐な質問をする。しかし、誰もが訊いてみたくなることではある。
「全然っ！」千春は漢方薬を飲み込んだような苦い顔をした。「わたし、外国語苦手なの。海外旅行も大っ嫌い」
「そりゃまたどうして？」
和馬が三人を代表して質問した。
「だって、こういう顔してるから時々日本にいても外国人に当然のように英語で話しかけられることがあってすごく困るんだもん。き

っと外国に行ったらなおさらじゃん。外国語のできない日本人と喋ってるのが一番落ち着くわ」
千春らしからぬ後ろ向きの発言に手を叩いて笑ったのは春美だった。
「面白い人ね」ひとしきり笑うと春美はなにやら鞄の中をごそごそかき回した。「私の名前にも『春』があるのよ。私たち気が合うと思うわ」
そう言って春美は名刺のようなものを取り出して千春に手渡した。
「それ、私の携帯の番号」
「あっ。何で俺には全然教えてくれなかったのに千春ちゃんにはすぐ教えるんだよ」
和馬が小学生のように口を尖らせて拗ねる。
「見るからに信用できないからよ。私が寝てる間にこそこそと私の携帯から自分の携帯に電話して私の電話番号調べるなんて犯罪行為だわ」
「最低だな」
透の指弾に、お前には関係ねぇだろと開き直ったが、透と同じ非難の目を千春もしているのに気付き和馬は小さくなった。
「ねぇ。千春ちゃんの番号も教えてくれる？」
春美がラインストーンでキラキラと装飾された携帯電話を開いて千春を待つ。
「ごめんなさい。私、携帯持ってないの」
平然と言い放った千春に部屋の中が沈黙する。一人で二台の携帯を使い分けることも珍しくないというこの御時世にどうして千春は持っていないのか。単に携帯電話が嫌いというマイノリティなのか。透の胸に去来したのは全く違う答えだった。通信手段を放棄し誰からの連絡も受け取らないようにするため。理由は分からないが千春は誰にもここに居ることを知られたくないのだ。それがたとえ親であっても。あるいは、両親こそ一番知られたくない相手なのかもしれない。和馬と春美も透と同じようなことを考えているのか誰もそ

の理由を追究しようとはしない。
「じゃあこの部屋の電話番号は？」
「あいにくこの部屋に固定電話ひいてないんだよ」
透ではなく和馬が申し訳なさそうに答える。
「じゃあ、透君の携帯は？透君の携帯に電話すれば千春ちゃんと連絡取れるでしょ？」
「そりゃいい考えだ。ちょっと待ってよ」
和馬と春美が漫才の掛け合いのように話を進める。透が「勝手に番号を教えるな」と言っても全く相手にせず和馬は自分の携帯で透の番号を検索し出した。
「これこれ。透にぴったりの４と９が並んだ陰気な番号」
和馬にかかれば透のものは何でも暗いイメージと結び付けられてしまう。
「オッケー。じゃあ、また連絡するね。一度、馬鹿な男抜きで飲みに行きましょ」
春美は千春に軽く手を振り玄関へ消えていった。その春美を追いかけながら和馬が千春に声を掛ける。
「こいつ放っとくと風呂に入んなくて臭えから千春ちゃんから入るように指導してやってな。一緒に入ってもいいし」
何を言い出すのかと透は顔が熱くなる。「はい、一緒に入ります」と千春が大きく返事をしてさらに火照った。
二人は押し合うようにしてドアを出て行った。「どこ触ってるのよ」と春美が和馬の手を叩き「ゴメンゴメン」と和馬がにたにた笑う。階段を降りていく足音までが人迷惑なほど騒々しい。
二人がいなくなり先ほどまでの賑やかさが嘘のように静まり返る部屋の空気のギャップに千春は吹き出し、透も思わず頬が緩んだ。

6

クリニックの自動ドアが開くと中から鳥のさえずりや川のせせらぎが聞こえてきた。柔らかく降り注ぐ春の陽光に川の清流や木々の緑が鮮やかにきらめき、吹き抜ける風が様々な鳥の鳴き声を花の香りとともに運んでくる。そんな春真っ只中の清らかな風景をイメージさせるようなＢＧＭは、少しでも患者をリラックスさせようということで流しているのだろうが透にはどうにもまぶしすぎるようで苦手だった。年がら年中このＣＤなのが手を抜いているようにも感じる。真冬の寒い道を歩いてきてこり固まった身には違和感が強くて素直に溶け込めない。

靴を脱ぎ上がろうとしてふと振り返ると千春はドアの外に立ち尽くしていた。ドアガラスを通して見る千春の顔は、ちらちらと小雪が舞う空模様のせいかどこか青ざめて見えた。普段は見せない険しい眼差しは透にではなく院内に向けられているようだった。千春からは二つのドアの向こうにある待合室はほとんど見えないはずだが。

「どうした？」

自動ドアを開き声を掛けても千春は応答しない。顔を強張らせているのは寒さのためだけではないのかもしれない。透は再び外に出て千春の真正面に視界を遮るようにして立った。すると千春は怯えたように激しく首を左右に振った。

「何でもない。やっぱ、私外で待ってる」

「外で待ってるって言ったって・・・」

透は反射的に空を見上げた。頭上を覆う雲は次第に厚みを増し、北からの冷たい風に運ばれてくる雪は一片一片が大きい。これからその勢いはどんどん増しそうだった。こうして吹きさらしの中で突っ立っていると足の指や手の先がじんじんと痛いほどの厳しい寒さだった。

「ほら、お兄ちゃん言ったじゃない。元気な私が病院にいるのは治

療に来ている患者さんに失礼だって。ここから中を覗いてみてお兄ちゃんの言ったとおりに思えたの。だから外で待ってる。ほら、あの喫茶店。あそこでお茶してるから」

確かに、人一倍陽気な千春は精神科のクリニックにはそぐわない。心のバランスを失い体調まで崩してしまった周りの患者は彼女に元気さを見せ付けられているようで顔を伏せたいような気持ちになるだろう。ドアを挟んでではあるが、その理屈を千春は肌で感じ納得したのかもしれない。しかし透の静止に全く耳を貸さずに強引にここまでついて来たのにと思うと千春の突然の方向転換には小首を傾げてしまう。このドアの向こうに何が見えたのか。今、彼女の顔はこのクリニックの待合室に座っている人たちと遜色ない悲壮感が漂っている。その追い詰められた鼠のような相貌にもいつもどおりの一度言い出したら聞かない強情さは健在だった。

「終わったらすぐ行く」

努めて優しい声で了解すると千春は漸く眉宇に漂う力を抜いてこくんと頷いた。相変わらず顔色は冴えないようだが、冴えないからこそ病人たちと同じ空気を吸うよりも暖かい喫茶店で紅茶でも飲んでいる方が健全な気もする。ドアの外で弱々しい笑顔を浮かべて手を振る千春に背を向けて透は受付に向かった。

待合室は混雑していた。壁に沿ってL字型に並べられた三脚のソファには何とか一人分のスペースだけが空いている。部屋の中央に設置されている二脚の背もたれのない長椅子は全て埋まっていた。それはいつもの光景だった。他の医院のことを透は知らないので比較はできないが、このクリニックが狭いわけではないし、先生が特に熱心で優秀だというわけでもなく、そしてこのクリニックが特別混雑しているわけでもないのだろう。要は心を病んでいる人間がこの国には驚くほど多いということなのだ。

「掛けてお待ちください」

診察券を窓口に出すとナース帽を被った受付の女性は何か書き物をしていてこちらの顔を見るでもなく機械仕掛けのように台詞を喋

った。硬貨を入れてボタンを押せばジュースが出てくる自動販売機のようなものだ。味も素っ気もない応対だが、執拗に今の症状を尋ねられるよりは気楽でいい。

透は一人分空いているソファに向かって歩を進めた。空席の隣に座っている上品そうな白髪の老婆に軽く会釈を済ませて腰を下ろす。老婆は透の姿を認めると軽く腰を浮かし丁寧ににっこりと微笑みを浮かべて頭を下げソファの軋み一つ怖れるようにゆっくりと座った。その柔和な表情には微塵も暗さを感じないが彼女も食を細らせ眠りを妨げる「ストレス」という名の憎むべき病原体に身体を冒されているのは間違いない。一見しただけでソファに座っても背凭れに背を付けない彼女の几帳面な性格が残忍な病魔の温床になってしまっていることが分かる。几帳面さ真面目さという性向はこの種の病気に罹患する人に共通して言える特性だ。

待合室に人は多いが診察の回転が遅いわけではない。次から次へと奥の部屋に呼ばれソファに空席ができる頃にはまた新たな患者が寒風に身を震わせながらやってくる。

やがて隣の老婆の番になると彼女はただ隣の席に座っただけの透に目礼までして周囲を窺う小動物のようにびくびくと立ち上がった。順番が来たから名前を呼ばれたのだろうが彼女はクリニック側の何か特別な配慮を受けて割り込みをしたかのように申し訳なさそうに肩をすぼめて診察室に向かう。彼女は幼い頃からずっとこんな風に周囲に気を遣って神経をすり減らして生きてきたのだろう。さぞかし息の詰まる人生だろう、と思っても透も他の誰も笑うことはできない。ここにいるのは誰もが似たり寄ったりの窮屈な道のりを歩んできたのだから。

しばらくすると透が着ているダウンジャケットのポケットの中で携帯電話が震え出した。ブーンという低い振動音が静かな待合室にやけにクリアに響く。誰からだろうか。透の携帯電話の番号を知っている人間は限られている。これが自分の部屋なら放っておくのだがさすがにクリニックではそうはいかない。透は舌打ちするような

気分で電話を取り出した。どうせ和馬だろうと高を括っていたのだが表示は「公衆電話」を示していた。千春だろうか。そうでなければ単なる間違い電話だろうか。携帯電話一人一台というこのご時世に公衆電話から掛けてくるとはそれだけで何となく不気味で仕方がない。どこからともなく咳払いが聞こえる。受付で透の名前が呼ばれ診察室へ促される。透は追われるような気持ちで慌てて携帯電話の電源を切った。

診察室に入るといつもどおりくすんだ白衣を纏った初老の医師が机に向かってカルテを覗き込んでいた。医師は顔を起こすことなく右手で透に机を挟んで向かい側の椅子を進めた。精神科のルールなのかもしれないが、どうもここの医院の人間は患者と目を合わそうとしない。それがどうも患者を一人前に扱っていないようで疎んじられているような気分になる。

勧められるままにクッションの効いた革張りのチェアに座り肘掛に腕を下ろすと透の正面に初老の男性のしみの浮いた青白い顔が見えた。医師は眼鏡の奥からちらりと盗み見るように透の顔を確認して再び卓上に目を戻した。白衣の胸ポケットからボールペンを取り出し書く体勢に入る。

「今日は三週間ぶりかな。薬は・・・」医師はボールペンの先でカルテをコツコツ叩いた。「三ヶ月間同じやつだね。どう？」

これも精神科のルールなのかもしれないが問診は常に軽いトーンで行われる。重苦しい感じがないためアットホームな雰囲気で負担が少ないと言う患者もいるかもしれないが、時に真面目なのかどうなのか分からなくなる。このクリニックに通い始めて1年以上になるが透は未だにこの医師の間合いの取り方に戸惑いを感じてしまうのだった。

「・・・どう、って？」

「食欲は？」

「ないことはない、というぐらいです」

「疲労感や不安感はない？」

「ありますけど、以前に増してと言うほどでは」
「眠れてる？」
「まあ、薬を飲めば」
「ぐっすり？」
「そうですね。次の日もなかなか起きられません」
「起きられないということは、早朝に覚醒しちゃうことはないね？」
「そういうことはないです」
布団に入る時間がまちまちだから起きるのは夜中のこともあれば昼過ぎのこともある。でもそんなことを言えば、毎日の生活リズムが大事だから、と叱られるのでやめておく。
「飲まない日はある？」
「ないです。寝付けないのが怖いので」
医師は卓球のラリーのようにぽんぽんと質問を繰り出してくる。まるでそのリズムを崩すと患者が何も喋らなくなると思っているかのように常に一定だ。患者の数をこなすために時間に追われているのかもしれない。
「寝付けないのが怖いと。なるほどね。起きたときはどんな感じ？」
「頭の芯が痺れてて、やっぱ、ぼーっとしますね」
ぼーっとすると。医師は透が答えたことを繰り返しながらカルテに何か書き込んでいる。首を伸ばして覗き込むがミミズが這ったような字で何のことやらさっぱり分からない。
「夢は見る？」
再び質問が始まり透は慌てて亀のように首をすぼめる。
「たまに」
「いつも同じ夢？」
透の目に暴れ狂う赤々とした炎の群れが浮かぶ。鼻の奥を焦げつかすような刺激臭。熱風が吹きつけケロイド化した皮膚が溶けていく。
透はギュッと強く目を閉じた。しかし一度脳裏に出現したイメージを拭い去ることは容易ではない。

「そうですね」
「ってことは」医師がカルテをパラパラと遡る。「実家が火事に遭ったときのことだね？」
不意に鋭利な刃物で刺されたようなものだった。にこやなか表情を浮かべ握手を求める仕草で至近距離に近づき、いきなり切れ味鋭いナイフで躊躇なく突き立てる残忍で冷酷な犯行だ。医師の軽い口調の質問に透は胸を切り裂かれたような痛みを感じた。赤く血塗られた刃物の柄が左胸に見えるようだ。こんな踏み込んだ質問を受けたのは初診以来だった。
「・・・はい」
透は目を閉じたまま力なく頷いた。全身の虚脱感はこのまま床に寝転んでしまいたいほどだった。犯人は相手が歯向かう様子も見せずに虫の息になっても容赦しない。医師はテンポを変えず矢継ぎ早に質問を繰り出してきた。
「今でも自分がお母さんを殺したと思ってる？」
炎の向こうに母の顔が見え隠れする。何かを叫んでいるが炎が燃え広がっていく音に掻き消されて全く聞こえない。助けを求めているようでいて透を早くこの場から立ち去らせたいような、どちらにしてもまさに命がけの目だ。そして透はどちらもできなかった。母を助けたくても足が前に進まず、逃げ出したくても腰が立たないのだ。あのとき尻の辺りに濡れた感触が広がったのを透は鮮明に覚えていた。失禁したのだった。股間に滲み出した尿はやがてすぐに白く蒸気となってあたりに拡散していった。
透が答えられないでいると痺れを切らしたように医師は次の質問を切り出してきた。
「自分のせいでお母さんが死んだと」
「・・・そうです」
透は身をよじり搾り出すようにして答えた。心臓が強く激しく脈打っている。自律神経失調症の典型的な症状だ。交感神経が突発的に緊張を強いられ全身の筋肉が硬直し空気がうまく肺に入ってくれ

ない。
「不可抗力だとは思えない？」
「フカコウリョク？」
「つまり、あなたの力ではどうしようもなかった。慰めとか同情とかじゃなくてさ、今まで語ってくれたあなたの話を私なりに解釈した結果思ったことだけど、突然の直下型の地震に街全体が襲われたことも、その地震の影響で家が火事で燃えたことも、逃げ遅れたあなたのお母さんがあなたの目の前で炎に飲まれていったのも、小学生だったあなたが幾ら頑張ってもどうにもならなかったんじゃ・・・」
「でも、人を、助けを呼ぶことはできたはずです」
透は医師の言葉を遮るようにして声を張った。実際に、家の外へ駆け出して大人を呼べば何とかなったはずだ。事実、透が今生きてここにいられるのは地域で組織している自警団の人たちが家々に声を掛けて走り回っていたからだ。
「しかし、あなたも背中や脇腹にやけどを負っていた。倒れてきた柱の下敷きになって身動きが取れなかったんでしょう？」
十数年前の痛みの記憶がまざまざと蘇ってくる。暑くもないのに全身からうっすらと汗が噴く。透は思わず右手で左の、左手で右の脇腹を抱え込むようにしてさすった。そのあたりの皮膚の下からじゅくじゅくと体液が滲んでくるようなイメージが脳裏を掠める。
医師の言葉は正確ではない。火に朽ちた柱が倒れてくるまでに時間はたっぷりあった。しかし巨大化した炎を目の前にして声も出ないほどの恐怖に怯え立ちすくんでいるうちに火神の勘気にふれてしまったのだ。怯懦な自分に克っていれば激しいやけどで身体をケロイドだらけにすることも最愛の母を死に追いやることもなかったに違いない。
「自分を責めるのは簡単。でも責めたところで何も解決しやしない」
僕は黙って小さくうなずいた。それは分かってる。だけど、気がつけば思考は自分を咎める方向に向いてしまう。

医師は眼鏡を軽く手で押さえた後、今までにない真剣な表情で透を見つめた。この医院に通うようになって初めてこの医師の顔を透は真正面に向かい合った。意外に大きくくりくりとした女性的な瞳をしている。対照的に机の上で組まれた手の指は学者風ではなくごつごつと武骨な造りで黒く太い毛に覆われていた。白衣もその下に覗いて見えるネルシャツも襟が汗染みで汚れている。

「今日あなたを見て感じたんだけど、今までで一番覇気のある顔をしてる。僕の目には明らかに今までと違って見える。何か回復のきっかけを掴んだんじゃない？」

「さぁ、・・・どうでしょうか」

口では曖昧に否定しつつも脳裏に千春の顔が浮かんだ。医師に指摘されて、自分は確かに回復しつつあるのかもしれない、と透は思った。寝て、起きて、ぼーっとして、ゲームをして。毎日やっていることは千春と出会う前から変わらないが、気付けばどことなく身体に軽さが増し力が漲っているような感覚がある。これが回復の兆しだとすれば、そのきっかけは彼女しかない。半強制的に始まった同棲生活で未だにろくすっぽ言葉を交わすこともないし、さっさと出て行ってほしいという気持ちは変わらないのだが、過ぎていく時間に張りのようなものが生まれているように感じないわけでもない。

「まだ自覚はない？」

「そうですね」

自覚はないが、真っ向から否定することもできない。それは長い間本来の自分というものを見失っていたため回復度合いを計るものさしを持ち合わせていないからだった。

「そうですか」透の返事に失望したのか医師はまた向きを戻し、カルテに何やら書き加えた。「薬は前回と同じものを同じだけ出しとくわ。実感があるのかないのか分からないけど、今、あなたは大事な時期に差しかかってるからお大事に。少しずつ調子が良くなってきたからって服薬を勝手にやめちゃだめだよ。すぐ逆戻りになっちゃうから」

診察室を出ると妙な気分だった。ぼろ雑巾にでもなったような疲労感で身体全体が重くだるい。まさにくたくたという感じだった。しかし睡眠薬の副作用のような目眩にも似た頭の痺れや不快な胸のつかえはなかった。久しく味わっていないがバスケットの試合の後のような感覚に近い気がする。しかし心地良いとまではとても言えなかった。

相変わらず目を合わさない受付の女性から代金と引き換えに処方箋を受け取ると透は外へと急いだ。冬の清冽な空気でぐったりとした身体に喝を入れ引き締めたかった。向かいの喫茶店で千春は待っているはずだ。何故かは分からないが千春の顔を早く見たいと思った。彼女は喫茶店で紅茶を手にしながら窓の外を眺め透を見つけるといつも通りのにこやかさで手を振るだろう。その仕草にほっとする自分を透は予感していた。知らず知らずのうちに彼女に癒されていたのだと透ははっきりと認識していた。

雪は小降りになっていたが、風が強まり寒気は先ほどよりも増しているようだった。自動ドアが開くのがもどかしく手で押し開くようにして外へ飛び出す。

寒い。思わず首をすくめる。アスファルトにうっすら積った雪が気温を下げているようだった。

駆け出そうとした透の目の端に一瞬赤いコートの人間を確認した。勢いよく踏み出した足を慌てて踏ん張って視線を横に向ける。ドアの脇に壁にもたれて立っているのはやはり千春だった。顔色は青白さを通り越して土気色と化している。

「ど、どうした？」

「財布、家に忘れちゃって」

千春ははにかんだように笑おうとしたが、寒さのせいだろうか表情の硬さはとれなかった。喫茶店の前まで行って持ち合わせがないことに気付きそのまま引き返してきたのだと言う。それからずっとこうしてここで透を待ち続けていたのだろう。

「金なら俺が持ってる」

「そうだけど。やっぱりお金を持たずに入るのは何となく気がひけて」
だからってこんな寒空の下で待っていることはなかろうに。そう思ってふと、先ほどの公衆電話からの電話が頭をよぎった。
「さっき俺の携帯に電話したか？」
予想に反して千春は首を横に振った。
「してないよ」
嘘をついているように透は思った。
千春の頬に一片の雪が降りかかる。くしゅん、と一つ千春がくしゃみをする。鼻を啜る千春の頬は朱に染まり眼も赤みを帯びている。
「風邪ひいたんじゃないのか？」
透が出てくるまで優に一時間はあった。子供ではないのだから幾らでも待ちようが思いついても良いものだ。病人を待っていて自分が体調を崩していては笑い話にもならない。
「お兄ちゃんに置いて行かれるかもしれないと思ったんだもん」
馬鹿馬鹿しい。あまりに稚い物言いに思わず鼻で笑いかけたが、唇を震わせ俯く千春の様子に透は息を詰まらせた。光るものが頬を伝って顎からぽとりと落ちる。
「千春」
下から覗き込もうとすると千春はぎゅっと目をつぶった。恥かしくて透の顔を見ることができないというようでもあり、涙が次々にこぼれそうになるのを懸命にこらえているようでもあった。その仕草がどうにもいじらしい。
困った。肩を震わせ涙をこらえる千春にどう接したら良いか分らない。とりあえず家に帰ろう。透は無言で歩きだした。千春も透に従って足を踏み出す。その時、千春の身体が揺らいだ。
「おい」
透が慌てて手を差し出し支えようとすると千春は激しく首を横に振った。
「大丈夫。ちょっと足が固まっちゃっただけだから」

そう言って千春はよいしょよいしょ、とその場で屈伸をした。膝に力が入らないのか動きがぎこちない。
透は千春に背を向けて屈んだ。
「ほら」
「え？」
千春には「ほら」も、透の格好も意味が分からない様子だ。
「負ぶってやるよ」
「いいよ、そんなの。自分で歩けるよ」
千春は目尻を濡らしながらも懸命にかぶりを振った。しかし透はさらに促した。道路は雪で滑りやすくなっている。それに泣きべそで拗ねてしまった千春と歩くには横に並んでちらちらと機嫌を窺うよりも背中に負うことで顔を合わすことなく体温を感じあう方がお互いに気楽な気がするのだ。
「ほら、早くしろよ。本当に置いて帰るぞ」
千春は慌てたように透の背中にしがみついてきた。息苦しいほどに透の首に腕を巻きつけてくる。幼い頃に迷子になった経験があるのだろうか。強引に透の部屋に転がり込んできた千春にしては臆病すぎるような気がした。
立ち上がるとこんなものかと軽く感じたが、前に踏み出すと一歩一歩が足腰に負担だった。身体がなまっている。部屋の中でさえ身体を引きずるようにして移動していることを考えると無謀という二文字が両肩に食い込むようだ。歩いて5分ほどの距離だが、目を先に向けると茨の道のようにも思えた。視線を足元に落として雪がうっすらと積もった道を休まずに足を動かした。一度止まってしまえばもう先には進めないという恐怖感があった。背中から千春の温もりが伝わってくる。次第に首筋に汗が滲んできた。
「人が見てるよぉ」
「うるさい。傘差せばいいだろ」
雪なんかほとんど降ってないよ、などとぶつぶつ言いながらも千春は従順に傘を開いた。短く持って自分の身体を隠すように差す。

背後から吹き付ける強い風が傘に当たって透の足の運びを後押しする。人の目が気にならなくなったのか透の耳に押し付けてきた千春の頬が熱いのが気になる。安心したのか、ふーっと大きく息を吐いた千春は透の肩に顎を置き心地良さそうに目を閉じた。

7

窓の外で何羽もの雀がさえずっている。久しぶりに風がおさまった今朝は太陽が優しく照っていて小春日和だ。相変わらず閉ざしたままのカーテンの隙間から漏れ入ってくる陽光に穏やかな街並みの様子が伝わってくる。

「ピンクノリボンだなんて可愛い名前。これが勝つよ」

半ば夢見心地でぼんやりとテレビの競馬中継を眺めていた透は千春の声に驚いて胸に掛けていた毛布を剥ぎ取り座椅子から背を浮かせた。

「起きてたのか。熱は？」

「熱？何のこと？」千春は強引にとぼけて見せると勢いよく布団を撥ね退けて透の傍らに滑り込んだ。「それよりも、この子かわいいじゃん。鬣にピンクのリボンがついてる」

昨日の発熱を強引になかったことにしようとしているのは照れ隠しなのだろうか。確かに体調を崩した原因は格好の良いものではなかったし、寝込んでいるのは活発さや元気さをウリにしているのであろう千春のキャラではないのかもしれない。寄り添う千春の顔色は微塵も体調の悪さを感じさせず、透の心は安堵の気持ちで緩んだ。

引きこもりになってからは当然誰かの心配をすることなんてなかった。看病などとはとても言えない、ただ眠っている千春のそばでテレビゲームをして時折彼女の様子を見て額に置いた濡れタオルを交換しただけのことだったが、それだけでも透は精神的に疲れを感じている。しかしその疲労感も弛緩した心には不快ではなかった。もしかするとこれは心地良さというものなのかもしれない。今まであんなに他人に関わることを忌み嫌っていたのに。

「ねぇねぇ」

「何」

「この馬勝つよ、きっと」

「いや、負ける」
透は反射的に断言していた。来ないとは言い切れないが、明らかに何の根拠もなさそうな千春の予想には反対したくなる。競馬はそんなに簡単なものではない。
「どうしてよ」千春は口を尖らせて見せる。「可愛い名前じゃん」
やはり素人の理由などこの程度のものだ。そこには馬そのものの要素は何も計算されていない。透は冷ややかな視線を千春に送った。
「名前が走るんじゃない。走るのは馬」
「ふーん。でもこの馬、一番人気ってことでしょ？来るんじゃないの？」
テレビに表示されているオッズによれば団子状態ではあるが一番人気には違いなかった。
「一番人気だからって勝つとは限らない」
人気というものに透は何度も泣かされてきた。単勝が2倍を切る、俗に言う鉄板の馬でさえも平気で他馬の後塵を拝して透を裏切るのだ。
「でも勝つ可能性が高いから人気になるんでしょ？」
千春も退かなかった。初めて競馬を見るというような顔つきをしているのに妙なところで頑固さが顔を出す。
透は千春の意外な攻撃に窮してこたつの上のスポーツ新聞に手を伸ばした。面倒臭そうな顔をして見せながらも内心焦りながら競馬のコーナーを開いてピンクノリボンのデータを拾う。そして思わず低く唸り声を上げた。
前走は未勝利戦を五馬身差で圧勝しており、しかもタイムが優秀でその持ち時計から逆算すると五百万下クラスに格上げの今回も五分の戦いはできそうだ。しかも現在の競馬会で最も注目を集めている種牡馬を父親に持っており血統的にも実力が裏打ちされている。この人気もおかしくはない。
横目で千春を見ると読み方も知らないくせに難しい顔をして透が開いている紙面に目を落としている。予想屋顔負けの鋭い眼光に透

は気後れしそうになる。しかしここで病み上がりの「ど」が付く素人に言い負かされていては立つ瀬がない。透はじっと馬の様子に目を凝らした。

「見てみろ」透はテレビ画面を指差した。そこにはパドックで歩くピンクノリボンが大写しになっている。「腹回りが他の馬と比べてぼてっとしてるだろ。肉のつきやすい冬場に馬体が増えるのはある程度仕方ないけどプラス二十は明らかに増えすぎだ。これはきっと前走で走り過ぎた反動でトレーニングを控え目にしなくちゃならなかったからだろうな。調教タイムも時計が出ていない。それにパドックを回るのが遅いだろ。前の馬とはどんどん差ができて後ろの馬の顔が尻にぶつかりそうだ。これは元気のない証拠。血統を見るとこの馬はもっとちゃかついていて良い。牝馬だからなおさらだ。つまり今日のこいつは体調が悪い。毛づやも冴えないしな。それに過去のレースは全部出負けしてる。今回はスプリント戦だからスタートの悪い馬には勝ち目は薄い」

持っている知識を総動員しての難癖だが口に出してみれば案外的を射ているような気がしてくる。気付けば千春は眼を真ん丸にしてぽかんと口を開けていた。その顔は、透がこんなに喋ることがあるのかと驚いているようだった。透は我ながら口数が多かったと思いつつも「なんだよ」と凄んで見せた。千春は慌てたように目を伏せ思い出したようにテレビに視線を戻した。

「ちゃかつく？けづや？」千春は諦めたように首を横に振った。「全部同じに見えちゃうよ。お兄ちゃんは何が勝つと思うの？」

「そうだなぁ」

さあ困った、と思いながら透は腕組みした。新聞を片手に次々と画面に映し出される馬を食い入るように睨みつけた。

出走馬のうち勝つのは一頭だけだ。だからけちをつけるのは簡単なのだが、逆に一頭だけ他馬に勝る馬を言い当てるのはそうはいかない。透も突き詰めていけば馬についての理解度など千春と差はない。テレビの解説者や新聞記者でさえ勝ち馬を当てるのは難しいの

だ。今ここでパドックの様子を見ただけでぱっと当たり馬券を予言するなどなかなかできる芸当ではない。それができるのなら人生楽なものだ。しかし、ここで予想を放棄することはできなかった。千春の一押しをすげなく切り捨てた以上後には退けない。

「こいつだな」

透が指名したのは5番人気の馬だった。

「マツリバヤシ？えー、ほんとにこんな名前のが勝つの？」

「だから」

「はいはい、そうでした。名前じゃなくて馬が走るんだもんね。でもこの馬のどこがいいわけ？」

「馬体重を見ろ。他の馬は全部プラス体重なのにこいつだけが2キロ減ってる。さっきも言ったけど冬場は体重が落ちにくい。それでもこいつは体重を減らしてきた。調教の本数も多い。びっちりしごかれてきた証拠だ。それにパドックの外側外側を歩いていて動きも落ち着いてる。二人引きで気合も十分だ。前走が一番人気だったのに連を外したから今日は人気を落としてるみたいだけど前走は距離が長かったのかもしれない。成績を見るとどちらかと言えば短距離向きで前回よりも４００メートル短くなる今回の方が勝機がある。このクラスでは四走目で慣れてきただろうし、ここが狙いどころだ」

ふーん、と千春は嬉しそうに頷く。透の言ったことがどれだけ理解できたかは定かではないが、何やら満足そうな表情を浮かべている。それを見て透は、また喋り過ぎたと口を噤んだ。どうも今日は千春の口車に乗せられて喋らされてしまう。

テレビ画面では本馬場入場の様子を放送していた。春を思わせるようなうららかな陽光を浴びて出走を控えた面々が次々とターフに走り出てくる。青々とした芝の上をうっすらと汗を帯びた鹿毛や栗毛の身体を光らせて競走馬が伸びやかなフォームで過ぎていく。ターフ隅の溜まり場へ踊るように駆けて行く人馬を見ていると透の胸にも何か弾むような気持ちが兆してくるようだった。風のない穏やかな日曜日。まだ二レース目だというのにスタンドには大勢のファ

ンが詰め掛けている。馬券売り場のある建物とスタンドとの出入り口の混雑ぶりは春先の蜂の巣周辺の様子を思い起こさせる。誰もが働き蜂の羽のように新聞を振り振りせわしなく動き回って出走時刻を待っている。

隣に座っていた千春が透の肩に頭をもたらせる。

「お兄ちゃん、寝てないんでしょ」

ゴメンね迷惑かけて、と透の右腕に額を押し付けてきた。

透が寝るときは睡眠導入剤を服用するのが常で、薬が切れるまで少なくとも八時間は目を覚ますことはない。さらに一度目が覚めても頭の中も目の周りも重い幕が張り巡らされたようなぼんやりとした状態が続き、完全に身体が自分の意思どおりに動くようになるまでにはさらに数十分を要するのだった。今までの生活で千春はそのことを知っている。その知識によれば透は一睡もしていないという結論に至るだろう。

「気にするな」透は空いている左手で千春の頭を軽く撫でた。「寝ないのは慣れてる」

透は冗談のつもりだったが、千春には通じなかったようで恐縮したように「ゴメンなさい」とさらに謝って透の肩に額を強く擦り付けてきた。

透は千春の頭を撫で続けることしかできなかった。千春が謝れば謝るほど透の胸にもやましさのようなものが募るようだった。

千春の予想に違い、昨晩透は眠っていた。しかも透自身信じられないことだが、睡眠薬を飲んでもいないのにいつの間にか眠りに落ちていたのだ。二時ぐらいに千春の額に濡らしたタオルを置いていた記憶はあるのだが、次に気がついたときには座椅子に深くもたれ胸の辺りまで毛布を被っていたのだ。妙に凝り固まった首をさすりつつ時計に目をやると午前五時だった。意識の欠落は三時間ほどだったろう。たった三時間のことでも、透にとっては快挙だった。薬剤による強制終了的な意識のシャットダウンではない。ここ何ヶ月と経験したことのない自然発生的な眠りへの移行は透に目覚めの爽

やかさと本来的な睡眠による体力の回復を実感させた。部屋の中も外も海の底のようにしんと静まり返った夜明け前の闇の濃い時間帯に透は一人で自分の身体の回復方向への変化の兆しに胸を高鳴らせていた。

やがて実況のアナウンサーがスタートが間近に迫っていることを知らせた。ゲート前で輪乗りしている人馬を見ているとどの馬もそれなりの風格を漂わせていて甲乙つけがたく見える。各馬がそれぞれ鼻先から荒々しく白い息を吐き出している様子にテレビを通しても辺りに漲る気合と緊張感が伝わってくるようだった。

「何だか手に汗握るね」

ぎゅっと硬く握り締めた千春の手には馬券が見えるようだった。金を賭けたわけではないのだから何が勝っても構わない。そう思いつつもどうにもマツリバヤシとピンクノリボンを目で追ってしまっていた。ピンクノリボンは大外で枠も桃色だということに気付いた。何となくこの馬に験の良さを感じてしまう。アナウンサーがピンクノリボンの名前を呼ぶ度に千春は目を輝かせて頷いた。自分が入れ込んでいる馬が負けるはずがないと信じきっているようだ。

スターターが緑色のスタート台上で真紅の旗を振る。ファンファーレが鳴り響き整然とゲートに出走馬が収まっていく。祈るように胸の前で手を合わせ食い入るように画面を見つめる千春の脇で透もいつしか瞬きを忘れて固唾を飲んでいた。

ゲートが開いた瞬間、地響きと共に各馬が駆け出していった。揃ったスタートに見えたが一頭だけダッシュのつかない馬がいる。アナウンサーが芝居臭く驚きを交えてピンクノリボンの出遅れを指摘すると千春が声にならない嘆息を漏らした。それ見たことかという顔をすると腹立たしげに千春は透の顔を見上げてすぐに画面に視線を戻した。

二頭の馬が競い合うようにして先頭に立ちその後に規則正しく他馬が列を成す。マツリバヤシは入れ込む様子も見せず淡々と中団を走っていた。先頭が前半の六百メートルを過ぎアナウンサーが「少

し速めのペース」だと分析する頃にピンクノリボンが猛然と最後尾から捲り上げてマツリバヤシを追い抜いて行った。その様子に千春がピンクノリボンの勝利を確信したように邪気のない頬を輝かせるが、少し競馬を知っている人間なら馬群の外を回らされて無駄な足を使っていると分かる。人気馬の形だけの見せ場作りに違いない。それを鵜呑みにして「来たよ！来た来た！」と目を見開き手を叩く千春を透は胸の中で哀れみつつマツリバヤシの姿を画面の中に探した。しかしマツリバヤシがいるであろうコースの内側は馬が密集していて何が何だか良く分からない。それを尻目にピンクノリボンは馬群の外側で快調にコーナーを回りやがて先頭に並びかけてきた。千春は取り付かれたように立ち上がり透は悪い夢を見ているような感じでテレビからの歓声を遠くに聞いていた。

そのまま突き抜けるかと思われたピンクノリボンは直線に向いた辺りから一気に失速し千春の失望の声と共に画面の外へ消えていった。そのピンクノリボンと交代するようにフレームインしてきたマツリバヤシが馬場の中央を一気に加速していく。他の馬が止まって見えるほどの脚色のまるで違うスピードにスタンドの観衆から低いどよめきが広がった。息を吹き返した透は思わず拳を強く握り馬の脚の回転する様子に目を凝らした。

マツリバヤシはあっという間に先頭に立つとそのまま三馬身差をつけてゴールした。最後は手綱を緩めての圧勝にアナウンサーまでもが一瞬声を失っていた。気持ちよさそうにキャンターで向こう正面を流す勝馬の黒鹿毛の身体は汗に覆われて朝の陽光に照り輝いている。テレビ画面中央にアップに映し出された鬣やゼッケンの辺りからは白く湯気が立ち上がっている。

透の身体中の血が熱く音を立ててたぎった。しかしそれはすぐに冷え胸は一瞬にして灰色に塗り変えられていった。買えば外れ買わなければ当たる。良く考えればいつものことだった。

「すごい」

千春はぽつりと小さく呟いたかと思うと急に透の方を向いて「す

ごいすごい！」と連呼し出した。「すごい」の対象が透の予想がずばり的中したことなのか、マツリバヤシの勝ちっぷりなのかは分からないが痛いぐらいに透の腕を掴んで揺する。「分かった分かった」となだめようとするのだが千春は興奮冷めやらぬようでまるで万馬券を的中させたように真ん丸く目を開いて頬を紅潮させている。

「ねぇねぇ。お兄ちゃんって競馬場行ったことある？」

「あるよ」

透が答えるや否や千春はさらに目を爛々と輝かせて透に迫ってきた。

「私、一度でいいから行ってみたかったの。連れてって」

「いつ？」

「今日」

「え？今から？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど」

今日は昨日の寒さが嘘のような風のない穏やかな天候だ。久しぶりに広い競馬場で腹の底から歓声をあげてみるのも良いかもしれない。数日前まで声を出すのも億劫だったのがこんな風に思えるのはやはり心の健康が回復してきている証拠だろう。今自分は変わりつつある。正直に言えば変わっていく自分を持て余して戸惑っている。少し上向いたぐらいで調子に乗るとすぐに何かに足元をすくわれて今まで以上に体調を崩すことも考えられる。大事な時期に差しかかっているという医師の言葉を思い出す。ここは慎重であるべき場面だ。

「ダメじゃないなら決まりね。さぁ、立って立って」

千春は透を「早く、早く」と急き立てる。

「ちょ、ちょっと待って」

「待てない。今から行くの。ね、早く。早く行こうよぉ」

「分かった。分かったよ」

透は渋々立ち上がった。「そんなに急がなくても午後のレースに

は間に合う」と言うのだが千春は全く取り合ってくれない。昨晩は熱を出して寝込んでいたとは思えないぐらいのはしゃぎぶりだった。千春の方こそ急に動き回ってはぶり返すかもしれないと透は思ったが今さらそんなことは口に出すことはできないぐらいの意気込みで、着替えが済むと透は千春に引きずられるようにして玄関から外へ出た。

思っていた通り日差しは暖かかった。太陽の位置は高くなく4月5月のそれと比べるとやはり小さく遠くに感じられるが、それでも懸命に熱の光を送ってくる。ここ数日のっぺりと天界を支配していた雪雲も今日は全く見当たらない。道路にも白いものは残っていなかった。通り過ぎる人たちも厚手の上着を着ている人は少ないようだった。

「デートだ、デートだ」

千春はいつも以上にはしゃいでいるように見えた。透の腕に絡まりつくようにしてマンションの階段を降りていく。すぐに千春が足を踏み外しバランスを崩して透にすがりつく。慌てて透が手すりに掴まり千春を抱きかかえるようにして支え何とか事なきを得る。透は怒りを込めて千春を睨みつけたが今日は全く効き目がない。懲りずに千春は透の腕を取って弾むように歩き、相手をする透は苦笑するしかなかった。

昨日の体調の悪さは透の見た悪夢だったのかと思わせるほどの彼女の陽気さだった。その底抜けの明るさも昨日までなら多少鬱陶しく思っていただろうが、今朝はそういったマイナスの感情が透に芽生えてこない。たった三時間とは言え睡眠薬の力に頼らない自然な睡眠を得ることができたことによる気分の爽快さが透のメンタル面に大きく影響しているようだった。そんな些細なことでもうつ病患者は変化する。いつもは視界や思考に常にぼんやりとした靄が張ったような状態なのだが今日は頭上の空模様のようにどこまでも澄み渡った晴れがましい気分なのだ。

「ねぇ。今日は勝ちそう？」

「ああ。そんな気がする」
透はほんの少しだが頬を緩めた。千春は透の顔にまるで流れ星でも見つけたかのようにはっと目を見開きすぐに目尻を細めてにっこりと頷いた。
「神谷先生じゃないですか」
突然、背後から呼びかけられ雷に打たれたようにビクッと透は動きを止めた。瞬時に顔の筋肉が硬直し血の気が引くのが分かる。視線は自分のつま先から二、三歩前に落としたままで動かすことができなかった。できることならこのまま後ろを振り返らず逃げ出してしまいたい。実際千春を左手にぶら下げていなかったらそうしていたかもしれない。
明らかな透の変調に不吉さを感じ取ったのか千春も見せたことのない険しい表情で透を見上げゆっくりと腕を解いた。
「奇遇ですね、こんなところでお会いするとは。おやおや、これからデートでしたかぁ」
単なる冷やかしではない意味ありげな語尾の響きが耳につく。
透よりも早く千春が声の主に正対した。
「こんにちは」
千春がはきはきと大きな声で挨拶をして深々と頭を下げる。相手も丁寧な調子で挨拶を返している。
もうどこにも逃げ場はない。透は一度ぐっと下唇を強く噛むとゆっくりと振り返った。
想像した通りの極度の猫背とこちらの顔色を窺うような薄笑いがそこにあった。メタリックな眼鏡の縁が冬の日差しを鈍く反射させている。休日だというのに彼はビシッとスーツを着ていた。
「ご無沙汰してます。片桐先生」
何とかそれだけは口にした。咽喉が潤いを失い粘度の高い唾液が声の通りを妨げる。透は一つ乾いた咳払いをした。
職場の人間とは誰とも会いたくなかったが、中でも彼だけは避けたかった。片桐健一。年齢は透より2歳上なだけなのだが肌は油分

が感じられずカサカサしていて皺が深く第一印象では一回りぐらい違うかと思ったほど老けて見える。猫背になったのは御辞儀のしすぎだと揶揄されるほど過度にへりくだった態度で接してくるタイプの人間で、いつもどことなくおどおどとした仕草を見せ誰に対しても敬語を遣うので生徒からも完全に舐められてしまっているようだった。周囲から嫌われないよう丁寧な応対を心掛けている結果なのかもしれないが彼の接し方は相手にしてみればいつまでたっても打ち解けた感じがせず心理的に壁を作られている気分にさせられる。絶やすことのない笑みも目を細め口元を歪めて作っているだけのもので心から笑っているのではないことはちょっと話せば誰でも分かることであり、周囲の人間が彼から感じるのは親しみではなく危うさだった。何を考えているのか分からないというのは透もよく言われたことだが、こと片桐に関しては透も脱帽だった。今も柔和を装ってはいるが眼鏡の奥にある目にはひんやりとしたものが漂っている。さらさらの髪を掻き揚げるのが彼の癖だがその額の辺りに手をやる仕草が被った仮面を剥ぎ取る動作に見えて透はいつもどきりとするのだ。彼は間違いなくもう一つ顔を隠し持っている。

「神谷先生も隅に置けませんねぇ。こんな美人の彼女とデートだなんて」

「誤解ですよ。そんなんじゃありません」

「ほう。それにしては楽しそうに腕を組んでらっしゃったようにお見受けしましたけどねぇ。とても仲の良さそうなご様子でしたが」

透は返す言葉につまり、ぐっと息を飲んだ。千春もどう答えて良いのやらという感じで薄い笑みを浮かべるだけだった。片桐は気味の悪い満足そうな笑みを見せてまた髪を掻き揚げた。

どうにも片桐の意図が見えてこない。日曜日の朝っぱらからスーツ姿でこんなところで何をしていたのか。

見張られていた。その直感に透は背中を寒くした。全身を身震いが走りぬける。何が目的にせよ透にとって利のある話とはとても思えなかった。

片桐がまた髪を掻き揚げる。手の下から死神が顔を出しそうで透は心臓が激しく高鳴り掌にじっとりと汗が滲んでくるのが分かった。透の第六感が激しく警鐘を鳴らしている。今からでも踵を返して逃げ出した方が良いような気がする。

「ところで神谷先生。ちょっとお話があるんですが、よろしいですか？」

片桐の目が座りその奥に暗い光を宿している。

やはり彼がここに現れたのは偶然ではなかった。仕事を休んで一年以上になる同僚に一体何の話があるのか。哀れみや同情で訪れたのではないことだけは分かる。片桐の言葉にはどこか追い詰められたような切羽詰った響きがあり、透を逃がしはしないという強固な意志が読み取れる。彼に何があったのか。知りようもないことではあるが彼は今日ここに至るまでに越えてはいけない線を越えてしまったような印象が透には感じられるのだった。

「お兄ちゃん。ちょっとこの人・・・」

不安を通り越して恐怖に戦いたように目元を強張らせて千春が透の腕を引き耳元で注意を促してくる。彼女が敏感なのではない。今の片桐が不吉な雰囲気を漂わせていることは誰が見ても分かる。

しかし今日の透の思考回路は冷静だった。片桐が精神の安定を失っているのは明らかだが、その意味では自分も同類だと透は考えていた。つい先日まで透が今の片桐と同じ目をしていなかったとは言い切れない。自分であれば片桐の話を理解できる部分もあるのではないかと透は思った。もしかすると自分にしかそれができないのではないかとさえ考えていた。

「お時間は取らせませんので」

ぞっとするような上辺だけの笑みを浮かべ片桐は透と千春の顔を交互に見た。大げさではなくここで申し出を断ろうものなら何をされるか分からない感じがする。先ほどからコートのポケットに差し込んだままの左手が抜き身のナイフを握っていないとは言い切れない。千春が危害をこうむるようなことだけは絶対に避けなくてはな

らない。
「構いませんよ。あそこの喫茶店でうかがいましょう」
「ちょっと、お兄ちゃん」
小さく叫ぶようにして千春が透の腕を取っていた手にさらに力を込める。
「大丈夫だよ、まだ時間は早いから。部屋に戻ってて」
そうじゃなくて、と泣き出しそうに瞳を曇らせる千春の手を優しく力強く解き透は片桐を促して歩き出した。片桐は満足そうに頷いて髪を掻き揚げる。
今朝眠りから目覚めたときはこんなことになるとは思いもよらなかった。せっかくの先ほどまでの爽快感は微塵も透の体内に残っていない。春を思わせるような柔らかな日差しも急に自分の心持ちとは不釣合いな感じがしていっそ十メートル先も見えないほどの吹雪にでもなってくれればという暗い気持ちがせり上がってくる。
振り返ると案の定千春がぽつんと路傍のポストのように立ち尽くしてこちらを見つめている。不意に昨日クリニックの前で透を待っていた千春の姿が思い起こされた。いつまであそこに突っ立っているつもりなのだろうか。いくら小春日和とは言え吹きぬける風の全てが温暖であるわけではない。また体調を崩すようなことにならなければ良いが。後ろ髪引かれる思いを断ち切って透は喫茶店の木造の重厚なドアを開いた。
細長い造りの店内の壁、カウンター、テーブル、椅子など目に入るもののほとんどが木材でできている。カウンターの奥でグラスを磨いていた体格の良い髭面のマスターがこちらをちらりと一瞥し、「いらっしゃいませ」と小さくつぶやくと再び手元に視線を落とした。代わりにというわけではないだろうがマスターと向かい合ってカウンターに座っていた白髪の男性がこちらを振り返りにこやかに会釈してくれる。透は慣れない愛想笑いで曖昧に頬を歪めると片桐を招き入れた。
うなぎの寝床のような奥行きのある店内は道路に面した側にだけ

テーブルが置いてある。窓が少なく橙色の間接照明で統一されている店内はいつも全体的に明るさが頼りないのだが、その薄暗さを透は心地良く感じていた。一番奥の四角いテーブルに陣取る。この場所は洞穴の中の熊になったような気分で妙に落ち着くのだ。しかし、今日は座ってみると追い詰められた兎のような心許なさが透の心を支配した。

いざテーブル越しに向かい合うと片桐も緊張するのか狭い店内のあちこちに視線を飛ばし、透と目を合わせようとしない。やがて立ててあるメニューを手に取りそこに印刷されている店の名前を不思議そうに見つめた。

「アドゥマン？何語ですかねぇ」

独り言のように小さく呟き小首を傾げて元に戻す。マスターが水とおしぼりを持ってくると上ずったような声でホットコーヒーを注文した。透が「同じものを」と言うとマスターはこくりと頷いただけで一言も発することなくさっさとカウンターに戻っていった。

「なんだか無愛想な店だな」

マスターを振り返りながら片桐が小声で吐き捨てるように感想を述べる。まさに彼の言うとおりで透もここに来るたびによく潰れないものだと思うのだが、世間話一つしなくていい煩わしさのなさもこの店を気に入っている一つの理由だった。

「それにしても驚きました」おしぼりを使いながら片桐がついでのように透にもけちをつける。「神谷先生はご病気で休職中ですよねぇ。幾ら日曜日とは言えあんなに元気そうに、しかもあのように美しい女性とデートとはいかがなものですかね。学校に知れたら問題になりますよ」

「彼女は、・・・何でもありません」

客観的に見て何でもないはずがないのは痛いほど理解している。我ながら白々しく響く言葉に透は俯くしかなかった。

「そうですか。何でもないんですか。それならそれで構いませんがね」

クックッと声を押し殺していやらしく笑う片桐の前で透は息苦しさを感じ始めた。薄暗く狭い。いつもは暖かみが感じられる店内なのに今は冷たい監獄の中に閉じ込められたような気分だ。何を考えているか分からない冷酷な看守が鍵束を鳴らしながらこちらを見ている。俺の言うことを聞けと笑っている。

「昨日はお忙しかったんですか？」

「は？」

どういう意味だろうか。相変わらず笑みを浮かべたままの片桐の表情からは何も読み取れない。ペースは完全に片桐のものだった。

「お電話しても出ていただけませんでした。すぐに電源まで切られてしまいまして」

透はクリニックで受けた公衆電話からの入電を思い出した。千春だと思い込んでいたがあれは片桐からだったのだ。昨日電話に出なかったから今日押し掛けてきたのか。透は片桐の顔を見つめて全身を強張らせた。蟻地獄に引きずりこまれる蟻になったような底なしの恐怖感が透をからめ取る。

「しかし、神谷先生も気の毒な方だ」

「気の毒？」

「そうですよ。僕は一同僚として一個人として先生に同情しているんです」

片桐の言い方には恩着せがましさが滲んでいた。上から見下ろす物言いに善意で手を差し伸べているような雰囲気は見当たらない。

「先生は幼い頃に大地震で家が火事になってお母様を亡くされたんですってねぇ。しかも先生ご自身も身体に大火傷を負われたそうで。さぞ、つらい思いをなさったんでしょうね」

「何故それをっ！」

驚きで身を乗り出した透の右手が水の入ったグラスにぶつかった。分厚いテーブルの天板にグラスが倒れ思いの外大きく甲高い音が店内に響く。こぼれた水が勢い良くテーブルの上を走り片桐のスーツの胸の辺りを濡らした。

「おっと。熱くならないでくださいよ、神谷先生」
片桐は勝ち誇ったようなゆったりとした動作でおしぼりを使って濡れた部分を拭う。いつものおどおどとした様子は全くない。こんな片桐は初めて見る。
「すいません」
声にならない声で透は非礼を詫びた。顔の表皮がカッと熱くなり脇から冷たいものが幾筋も流れていく。火傷の痕の上を汗が垂れているのだと思うと暗澹たる気分だった。コーヒーを持ってきたマスターが黙ってテーブル上を処理する動作を透は呆然と椅子に身を委ねて見つめるだけだった。
「しかし、余程のことだったんですねぇ。なるほど、なるほど」
マスターが去ると片桐はさらに追い討ちを掛けてきた。思わず耳を塞ぎたくなる。やめてくれと心の叫びが口をついて出そうになって透はぐっと奥歯を噛締めた。
一体、片桐はどこで地震のことを、火事のことを、母の死についてを知ったのだろう。学校の人間でこのことを知っているのは教頭だけだ。おそらく理事長も教頭から聞いているだろうが、それ以外の人間には知らされていないはずだ。それなのに片桐が知っているのは何故だろうか。酒好きの教頭が飲んだ席でぽろっと口を滑らせてしまったのだろうか。
「僕ね、あのとき見たんですよ」
片桐が勝ち誇ったように口の端を歪めて笑う。悪魔というものが存在するのならきっとこんな顔をしているのだろう。冷酷で残忍で狡猾そうな片桐の目に透は思わず悲鳴をあげそうになる。もうこれ以上対等に向き合うことはできない。何かを見られてしまったのだ。片桐と自分との間に主と従の関係を決定付ける何かを。そして彼は法外なモノを要求してくるだろう。そのために今日わざわざ透のところにやってきたのだ。
「何のことか分かりません」
じっと全てが過ぎ去るのを待つしかない。何を言われても何を訊

かれてもただひたすら首を左右に振って「分かりません」「知りません」と逃げ続けるしかない。一つ認めてしまえばもう悪魔から逃げ切ることは不可能だ。
「分かりませんか？」
にたにたと笑う片桐の顔は「分からないはずはない」と言っている。お前が一番良く知っているはずだと。
「分かりません」
「あのときのことですよ。文化祭の最終日の夜」
「知りません」
「知らないはずはないでしょう。毎年文化祭の最終日の夕方に各クラスで造ったものを全部グラウンドの一所に集めてキャンプファイヤーみたいに燃やしてしまうじゃないですか。模擬店の看板やら芝居の衣装やらキャラクターの張りぼてやら。遠巻きに名残惜しむふりをしながら校舎の影で生徒たちが猥褻なことをするのが毎年問題になるあれですよ。あの年の火の管理は僕と神谷先生の担当だったでしょう。お忘れですか」
もちろん忘れるはずがない。一昨年の文化祭の夜、片桐が言うように透は後始末を任されていた。各教室の後片付けはそれぞれの担任教師が受け持つことになっていたが、それ以外の校門、廊下、体育館、グラウンド等の共有スペースは下っ端の男性教師が面倒を見るのが通例だった。透は片桐と手分けして見て廻り、文化祭関係のもので燃やせるものは近くにいる生徒を動員しつつ全てグラウンドに集めていった。やがて大きなゴミの山がグラウンドに出来上がるとサラダ油を撒いて点火した。暮れかけた群青色の空を赤い炎が突き上げ火の粉が流れ星のように飛び交い乾いた音を立ててぱちぱちと爆ぜる。生徒たちは思い思いのグループに分かれて火の回りに集まり自分の背丈以上に巨大化した炎を檻の中の猛獣を見るように歓声をあげる。
予想していたことではあるがやはり透はその舞い上がる巨大な火柱に怯えたじろいだ。二十年前の嗜虐性に満ちた紅蓮の色や、特有

の不吉な揺らぎや、凶暴で排他的な熱風のありさまをまざまざと思い出してしまったのだ。目の前で母の皮膚がただれ炭化し血がどす黒く蒸発していく様が如実に瞼に浮かぶ。透は膝から力が抜けその場にへたり込んでしまいそうになるのを何とかこらえ赤い悪魔に背を向けて立った。火の管理は片桐に任せて毎年問題になる生徒間の破廉恥な行動に目を光らせるふりをしよう。とても正面に自分の身体を焦がした犯人を見つめ続けることはできない。本当ならここから逃げ出して頭から冷たい水を被りたいところだった。奥歯をぎりぎりと音が鳴るほど噛締め全身に宿った震えをこらえる。いつまでも眼前から消え去らない悪夢のような思い出から逃れるために目をぎゅっと閉じて口の中で「消えろ消えろ」と呟き続けた。

そのときだった。それまでの歓声とは全く異質の、悲鳴のような女性の叫び声があたりを切り裂くように響いた。その金切り声を合図のように透の周囲にいた生徒が一斉に驚きと恐怖で息を詰まらせるのが分かる。誰もがこちらを見ている。その視線の異様さに気付いたときには透の背中は炎に包まれていた。透が着ていたジャージに引火したのだ。冷静に考えればジャージを脱げば済むことだった。ファスナーを締めていたわけではなく羽織っていただけなので袖から腕を抜けばそれで事足りたのだ。しかし自分の背中に死神のように炎がとり付いているのを見つけて透は完全に自分を見失っていた。

「死ぬ！死ぬ！」と連呼してあたりの生徒にしがみつき倒れこんでそのまま意識を失ってしまった。

そのときの騒動で透自身は擦り傷と肩に軽い火傷を負っただけだったが、透が抱きついた女子生徒は倒れたときに無理な体勢となり左腕を骨折し左肩を脱臼するという大怪我を負ったと後で教頭から教えられた。それ以降透は一度も学校の門をくぐっていない。

「忘れられるはずがないですよねぇ」

片桐の声で透は現実に引き戻された。気付くと顎から汗が伝い落ちジーンズに黒い染みができている。熱風を吸い込んだように咽喉の奥が乾き、ひりひりと痛んだ身体が鉛を背負い込んだように重い。

自分はきっと青ざめたひどい顔をしていることだろうと透は思った。これでは言い訳の余地はない。額に手を当ててみる。べっとりとした感触が指先に伝わる。見てみれば油分を含んだ汗で指がてらてらと光っている。その指を片桐からと言うよりは自分の目から隠すようにして膝の上で拳を握り締めた。

「一体何を見たと」

透は諦めたように片桐に訊ねた。

「犯人ですよ」

「犯人？」

犯人とはどういうことだろうか。当時の教頭の説明では燃え上がった布切れが透の肩の辺りに落ちてその周囲を焦がしたのだということだった。あのとき透の目には巨大な炎の塊に見えたが実際には握りこぶしもないぐらいの炎とも呼べないほどの火だったと教えられた。心にトラウマを抱えているからそう見えたのだろう。そういう意味では不運が重なった「事故」だったと教頭は慰めてくれた。教頭以外の人間に聞いてみたわけではないが今の今まで透はその説明に疑いを持ったことはなかった。あれは事故ではなかったのだろうか。教頭は嘘をついたのだろうか。

「そうです。あれは事故なんかじゃない。ある人間が故意に神谷先生のジャージに火を点けたんです。そしてそいつは今ものうのうと学校に通っているんですよ」

燃え上がる背中。顔を焼く炎の塊。骨まで溶かすかと怯えた熱さ。化繊の焦げる鼻を突くような臭い。あの日、あの瞬間が透の脳裏に蘇ってくる。炎から何とか逃げようと闇雲に走り、何かにすがりつき、そしてその場で人目も憚らず失禁して気を失った。それからというもの透は火だけでなく人の目を見ることもできなくなって家から出られなくなってしまったのだ。

「山内です。山内和明。覚えているでしょう？親の七光りで裏口入学してきたあのろくでもないガキですよ」

「山内・・・」

校内でその名前を知らない者はいない。親が弁護士であり現職の国会議員で入学当初から黒い噂が絶えない問題児だ。彼の学力から考えれば国会議員の圧力を使った裏口入学であることは疑いようがない。万引きや恐喝ぐらいならまだ可愛いものだが、上級生の女子生徒に薬を飲ませ身体の自由を奪い数人がかりで輪姦し、そのときの様子を撮影したビデオで脅して何人もの相手に売春をさせたことも教師連には周知の事実だが父親の力で公にはなっていない。

背中に焼き鏝を押し付けるような思いでもう一度あの夜のことを浮かべてみる。肩のあたりに張り付いた黄色い炎。その向こうに見える赤々と燃え盛るキャンプファイヤー。周辺を囲む生徒たちの顔。怯んでいるようで笑っているような片桐の面貌も確かにそこに並んでいた。問題の山口はどこにいたのか。山口が犯人なら近くにいたはずだ。しかし、山内がそこにいたのかどうか、透には全く思い出せなかった。

火を点けたのが山内だったとしたら、あのとき教頭以下誰もが透に対して口を閉ざしたことも頷ける。あの男に目をつけられたらお仕舞いだという暗黙の了解が生徒間だけでなく教師の間にも出来上がっていた。誰かと示し合わせることなく誰もが一様に見て見ぬふりをしただろう。それを責めることはできない。自分が逆の立場だったら同じようにやはり黙って時が過ぎるのを待つに違いない。

「あいつが先生のジャージの肩口に燃えた布きれで火を点けたんです。あれはれっきとした傷害罪だ。今からでも警察に被害届を出すべきですよ。大丈夫。私が証人になります。二人であいつを社会から排除してしまいましょうよ」

片桐の口調に熱が篭れば篭るほど透は彼を遠い存在に感じた。今、片桐の口から新しい事実を聞かされても山内に対する怒りや憤りは湧き上ってはこない。ましてや警察に被害届を出して山内親子と全面的に戦おうという心持ちにはなれなかった。

透はゆっくりとコーヒーに手を伸ばした。少しぬるくはなっていたが透好みの強めの苦味が心地よく口の中に広がった。

「やりましょうよ、神谷先生。あいつをのさばらしておいて良い事なんて何一つない。先生が休んでいる間にもあいつのせいで泣いている人間が増えているんですよ。明日にもさらなる被害者が出てしまうかもしれない」
透の反応の薄さに焦りを感じたのか片桐は身を乗り出すようにして語りかけてきた。まるで選挙の演説のようだ。力強い口調が片桐のキャラに似合わず、滑稽に見える。
「申し出は大変ありがたいんですが、どうも今さらという感じがしますね」
「そんなことはありません。傷害事件の時効は七年です。全然遅くないですよ」
片桐は透が言った意味を履き違えていた。透が今さらと言ったのは片桐の態度のことだった。事件が起こった当時に今の態度を取ってくれていれば透もその気になれたかもしれない。しかし今頃になって突然透の目の前に現れ、実は、と耳打ちされても片桐の真意を測りかねてしまう。おそらく彼の言葉の裏には何か隠れているものがある。その隠し持っているものが放つ覆いようのない腐臭を透は嗅ぎ取ってしまっていた。
「ここだけの話、警察もね、協力は惜しまないって言ってくれてるんです。今がチャンスなんですよ。やりましょうよ。今しかないんです」
片桐の言っていることは正しいかもしれない。幾度となく問題を起こしては隠蔽を繰り返している山内を警察だっていつまでも放っておく気はないだろう。悪行の揺ぎ無い裏づけさえあれば重い腰を上げることも十分にありえる。しかし、透には片桐の声がやけに遠くに弱々しく聞こえた。
「私にはその気はありません。昔のことはもう忘れたいと思ってるんです」
そう、忘れたいのだ。乗り越えようとか克服しようという前向きな気持ちにまではさすがに至らないが、敢えて見ないようにしてい

つの間にか忘れているというような状況を作り出すことはできるような気がする。その選択こそが実は急がば回れであり本来の生活を取り戻すには一番の近道なのかもしれないと透は思っていた。
「ちょっと待ってください。それでは、それでは神谷先生があまりにも気の毒で」
片桐は何度も何度も髪を掻き揚げる。顎を突き出し辺りを睥睨するようにして髪に手をやる彼のその癖は自分を少しでも尊大に見せようとする気持ちの現われではないかと透は思い至った。どうしても丸まってしまう背中を少しでも反らせ低くなりがちな頭の位置をいくらかでも高く保とうとする。常に腰が低く過度にへりくだった気弱な自分の性格から何とか脱皮したいという片桐の強い思いが髪を掻き揚げる動作につながっているのではないか。そう考えれば何を考えているか分からない不可解な部分の多い片桐の性格も少しは理解できそうだった。
透は財布から千円札を取り出すとテーブル上に置いた。椅子から立ち上がると片桐は捨て犬のようなすがりつく目で透を見上げた。
「ここの喫茶店、好きなんです。いつ来てもざわざわした感じがなくて、親しみがあるけど良い意味で余所余所しくて落ち着くんですよ。アドゥマンってフランス語で『また明日』っていう意味だそうです。気に入ったらまた使ってみてください」
ドアを開けるときに追いかけてくるかとチラッと片桐を振り返ったが彼は椅子に座ったままだった。丸まった背中が今はさらに頼りなく見える。
外に出ると先ほどまでの晴天は嘘のようにのっぺりとした雲が広がっていた。昼が近づいてきているはずなのに宵闇のような薄暗さだった。頬に当たる風も硬く冷たい。道路上に千春の姿はなかった。透はダウンジャケットに首をすくめ千春が待っているであろう部屋に向けて足を踏み出した。
一歩一歩が非常に重かった。マンションは見えているのにやけに遠くに感じられる。肩や首の辺りに血流の滞りを感じさせるような

鈍痛が走る。ゆっくりと首を左右に回すと腰に妙な張りがあり、こめかみにミシミシと締め付けるような圧迫感が現れた。胸がムカムカして胃酸が食道を遡ってくるような感覚がある。

こんな天気になっても千春はまだ競馬場に行きたいと言うだろうか。できることなら今日はもう外に出たくはなかった。睡眠薬を酒で流し込んで二日間ほど死んでいたかった。それぐらいしないと今日のダメージはリセットできそうもない。アドゥマンを振り返っても片桐の姿は見えなかった。まだあの椅子にあの猫背姿で座っているのだろう。彼も疲労困憊のはずだ。それを思うとさらに透の足の運びは鈍くなった。

8

甘い香りがする。もぎたての果実のような匂いがどこからともなく漂ってくる。大きく吸い込むと全身がとろけてしまうような弛緩した気分になる。透は目を閉じたまま手探りで毛布の端を掴み肩まで引き上げた。暖かい毛布と心地よいその香りに包まれて透はまどろみの中に漂った。しかしその安寧は長くは続かなかった。

突然工事現場でコンクリートに穴を穿つような騒音が透の耳に飛び込んできた。ガタガタ、ガタガタ。ドリルが刺さっているのは自分のこめかみかと思うぐらいにその音は透の脳に響いた。透はあまりの不快さに唸り声を上げて蜘蛛の巣を掻き分けるように両手を耳の辺りで闇雲に振った。手は空しく空を切り続け、音は一向に止む気配を見せない。透は疲れた腕を下ろし布団を頭から被った。

「お兄ちゃん、寝ぼけてないでそろそろ起きたら？電話だよ」

優しく誰かが布団を叩く。誰かと言っても千春しかいない。騒音が止まり布団が捲られ今度は耳元でブーンと何かが振動している音が聞こえる。

「出る？」

うっすらと目を開くとぼんやりと白く膜が張ったような視界の中心に慈愛に満ちた表情の千春の顔があった。彼女の髪が先ほどの眠りの中で感じたものと同じ甘い匂いを漂わせてさらさらと透の頬を滑っていく。良く見ると手には透の携帯電話を持っている。先ほどのドリルのような音はこたつの上でそれが振動していたのだろう。

透はゆっくりと首を左右に振った。

「いいの？和ちゃんからみたいだけど」

「かずちゃん？」

「お兄ちゃんのお兄さんのこと」

透は迷わずに首を振り続けた。睡眠薬で痺れた頭で考えても即答できる。一体こんな時間に何の用だと言うのだろう。きっとろくで

もない用件に違いない。いかなるときも自分本位の兄に気持ち良い睡眠を妨害されたかと思うと腹の奥で怒気が蠢いてくる。結果的にはそれで休止状態の頭に血が巡り覚醒が促進されてきた。

千春の手の中で携帯電話の振動が止まる。諦めたのかと思うとほっとして漸く布団から抜け出ようかという気にもなってくる。むっくりと身体を起こすといつもなら後頭部にずんと鈍痛を感じるのだが今はそれもない。専門的なことは分からないがおそらく和馬からの電話で生まれた軽い憤りが透の血圧を上昇させ透の全身に力を漲らせたのだろう。

「今何時？」

台所に向かう千春の背中に問いかける。先ほどは「こんな時間に」と思ったが、よく考えれば今何時か分からない。実は電話を掛けるのに非常識な時間というわけではなく今の時間帯に寝ている方が不自然なのかもしれない。

「もうすぐ七時半よ。夜のね」

ただでさえ一日中薄暗い空模様が続くこの時季に遮光カーテンを引いた部屋の中では「七時半」と聞いただけでは朝か夜かは判断がつきにくい。朝ではないことを強調したのは嫌味ではなく思いやりだと受け取っておくべきだろう。

電子レンジが鳴ったと思ったら千春が湯気の立つマグカップを持ってきてくれた。礼を言って受け取るとミルクティーだった。白い湯気に混ざって透の頬を湿らす紅茶と牛乳の香りが柔らかい。一口啜ると甘くて優しい味が身体に染み渡った。

自律神経の失調に潰瘍性の胃炎はつき物だ。さらに抗鬱剤や睡眠導入剤を服用するとどうしても胃に負担がかかる。千春はやはり思いやりで接してくれているのだ。

近くで何かがぶるぶる震え出した。枕元に目を落とすと透の携帯が着信を表す光を発している。液晶画面を見るまでもない。

「また、和ちゃんみたいね」

人は誰かに話しかけられているときそれを無視していると負い目

からか大なり小なりストレスを感じてしまうと言うが、透は電話が掛かってきているのに出ないでいるということだけでも少なからず罪の意識で苦痛を覚えるタイプの人間だ。たとえろくでもない話だと分かっていても二度も掛かってこれば出ないわけにはいかない。それに二度掛けてきたということは和馬の性格からして透が通話ボタンを押すまで掛け続けてくるだろう。うんざりしたような顔で透が携帯電話を耳に当てると千春はそれで良いのだと言うようににっこりと微笑んだ。

「もしもし」

「もしもし、じゃねぇだろうがぁ！」鼓膜が破れそうなほどの怒声に透は慌てて電話を耳から遠ざけた。「どうせ部屋でいじいじ燻ってんだろ？さっさと電話に出やがれ」

いきなりの暴力的な声の荒げ方に透の心も余計にささくれる。部屋に燻っていたことは間違っていないが、精神的に病んでいる弟の状態を少しぐらい慮ることができないものだろうか。そんな考えが頭を過ぎったが透はすぐさま追い払った。和馬という人間に気遣いという言葉が最も似合わないということは透が一番良く知っていた。

とにかく寝起き早々兄と悶着を起こす気にはなれない。そんな気力が備わっていれば復職だって遠い夢ではない。透は努めて冷静な声での応対を試みた。

「何か用だった？」

「おう。それよ、それそれ」

こちらが水を向けると先ほどの剣幕は嘘のように和馬は途端に声のトーンを低くした。和馬は単純すぎる。その度合いは弟として心配になってくるほどだ。

「千春ちゃんは今そばにいるのか？」

言われて透はベッドに腰掛けたまま千春の姿を目で探した。台所から何かを炒める音が聞こえてくる。

「台所で料理してるけど」

「そうか。じゃあ丁度良い。ちょっとテレビを点けてみろ」

リモコンに手を伸ばし和馬に言われるままにチャンネルを合わせる。画面には最近昼のワイドショーの司会を務めるようになったタレントとテレビ局の女子アナウンサーが並んで映っている。その二人に紹介され紫色のダブルのスーツを着た白人男性が重々しい扉の向こうから白いスモークとともに現れた。肘まで捲り上げた袖の先から毛むくじゃらの腕をこれ見よがしに露わにしている。掌を胸の辺りで大きく広げる仕草はまるで、種も仕掛けもありません、と示す手品師のようだ。女子アナウンサーが語学力をひけらかすようにその手品師と簡単な挨拶を交わし握手をした。

「何、これ」

「知らないのか？一年に一回この時期にやってる全国の失踪者を公開的に探す番組だ。結構有名なやつだぞ。んで、あの紫色のスーツのおっさんがとてつもない霊能力者なんだとさ。おっさんが失踪者の居場所を霊視で突き止めるっていうのが今回の目玉らしい」

「それで？」

話の道筋が全く見えてこない。この手品師のようなおっさんが今どういう意味があるのか。

「俺も真剣にこの番組を見てたわけじゃないんだ。その、なんだ。うちのアパートは壁が薄いもんだから、あれのときのカモフラージュのためにテレビを点けてただけなんだけどな・・・」

電話の向こうで「余計なこと言わなくていい」と春美が怒っている。こちらもそんなこと聞きたくもない。

「それで、気になる名前が出ててな。俺じゃなくて春美が見つけたんだけど」

「気になる名前って？」

「今、画面の右側に本日の捜索対象者って3人名前があがってるだろ。2番目に何て書いてある？」

そこには「本城さゆりさん（２０）」とあった。本城という姓は千春にも当てはまる。

「まさか・・・」

透は思わず声を潜めた。電話を耳から離して背後を確認すると台所で千春が料理をしている物音は続いている。透は息を詰めて再び電話を耳に当てる。
「千春なのか？」
そうである確率は決して低くはないように思えた。
千春の口から家族や友人の話を聞いたことはあまりない。知っているのは彼女の母親がフランス人ということだけだ。それはなぜか。身近な人のことは会話に出てきやすいものではないだろうか。とは言っても会話そのものを避けているのは透の方で千春が話したくてもその機会がないだけかもしれないが。
仮に千春が失踪者だったとしたら。千春の近親者はこの寒い冬空の下を重い足を引き摺って探し回っているに違いない。千春のことを想って何日も眠れない夜を過ごしているだろう。寝付けずに天井を虚ろに見つめている時間のなんと空しいことか。その苦痛は日々睡眠導入剤を使って強引に自分の意識を奪っている透には痛いほど分かる。
「分からん。俺たちもうつらうつらしてたからテレビをしっかり見てたわけじゃないんだ。そう言えば千春ちゃんって何歳なんだ？」
「俺が高三のときに高一だって言ってたから今は二十三歳か」
「お前、何かでそれを確認したか？」
「いや、高校の後輩らしいんだが記憶にない。千春が普段着に使ってる体操着は俺の高校のものと同じやつだけど」
「じゃあ、やっぱりお前の後輩なんだろ」
「だけど、いくら学年が違っても同じ高校に通ってたら千春なら目立つだろ」
「そうだな。あのど田舎にハーフは珍しい。とすると、嘘の可能性もあるわけだ。千春ちゃんなら二十歳でもおかしくない」
「確かに」白人との混血である千春は目鼻立ちの整った顔つきなのでもっと年上に見えなくもなく、逆に肌理の細かい瑞々しい肌の感じからして二十歳と言われても納得できてしまう。「でも、だとし

たら何のために嘘なんかつくんだ？」
「そりゃあ、お前にうまく取り入って」
「取り入って？」
「金品をせしめる」
「俺から金を？それはないだろ」あまりの馬鹿馬鹿しさに透は思わず失笑する。「・・・これって生放送か？」
この部屋にテレビ局の人間が現れたことは一度もない。この手品師の能力が本物でこの番組の収録がもう終わっているのなら本城さゆりなる人物の周辺には既にテレビ局からの接触があったはずだ。
「そうだ。生がこの番組のウリの一つでもあるからな」
透は立ち上がってカーテンの隙間から窓の外を見た。
いつもの街灯の暗い道路にはテレビ局のマイクロバスどころか自転車ひとつ見当たらない。霊能力がどれほどのものかは分からないが、霊視が済んでから動き出していては放送中に失踪者を見つけることなど無理に決まっている。もし本城千春が「本城さゆり（２０）」と同一人物なら既にテレビ局の人間が玄関前で待機していてしかるべきではないか。
透は再びテレビの前に座った。画面の向こうでは一人目の失踪者の居場所について霊視とやらが始まったようだ。手品師がさらに腕を捲り上げ目を閉じて顔の前で祈るように手を組んでいる。その様子を三人の人間がまさに滑稽なまでに真剣な眼差しで見守っている。二人は司会者でもう一人は失踪者の母親らしい。
「本当にそんな能力がこいつにあるのか？」
透が訊ねると和馬は後ろの晴美と二言三言交わした。
「さあな。でもこの番組の視聴率は毎回かなり良いらしいぞ」
それらしい緊迫感は画面から伝わってはくるが、どうにも作り物の臭いがしてならない。いんちき臭い霊能力者だけでなく失踪者の母親だとかいう人も本物かどうか疑わしい。しかし透は笑い飛ばすことはできなかった。千春が「本城さゆり（２０）」である可能性が全くないとは言い切れない。手品師が何やらぼそぼそと呟き始め

る。気がつけば手品師の口の動きに透の目は釘付けになっていた。隣に座っている女子アナウンサーが手品師の言葉を通訳し始めた。
「川が見えます。長い川です。川に沿って何本も何本も木が植えられています。えー、それから、少し離れるとテニスコートが何面も見えます。ナイター設備のあるテニスコートです。それから・・・」
そんな風景は日本中で幾らでも見つかるだろう。それに失踪者が日本にいるとは限らない。
「この調子だとまだまだ時間がかかりそうだな。春美が帰るって言うからとりあえず切るわ」
「ちょ、ちょっと待てよ」
慌てて呼び止めても既に電話は切れていた。いつものことだが、和馬はこちらの気持ちなど一切考えていない。今回もわざわざ問題を見つけてきては一方的にこちらに投げつけてそのままほったらかしだ。透はベッドに電話を放り投げそのまま床に寝転んだ。両手を枕に天井を見上げると仁王立ちしている千春が透を見下ろしていた。
「私、失踪なんてしてないよ」
「わっ！」
驚いた透は反射的に身体を起こし、千春を見上げた。口を尖らせて眉間に皺を寄せていた千春は視線を透からテレビへ移した。
「こんな胡散臭そうな霊能力者なんてあてになるの？」
「さ、さあ」
「私、二十三歳って言ってるじゃない。二十歳なら二十歳って言うわ。年齢を上に偽る必要がどこにあるの？」
「そりゃあ、そうだよな」
千春は怒りでどんどん興奮してくるらしく頬が朱に染まっていく。透は彼女の迫力に押されて通り一遍の相槌を打つだけで、どう宥めたものか思案に暮れた。全く、和馬は余計なことを。
「金、金ってどういういいことよ？」
「それは、その・・・」
和馬との電話を千春に全て聞かれていたのだ。透は取り繕う言葉

が見当たらなかった。
「陰で私のこと泥棒扱いにしてたんでしょ！もう！ムカつく！」
千春はこたつの上にあるリモコンに手を伸ばしテレビの電源を切るとそのままテレビに向かって力強く投げつけた。八つ当たりを受けたリモコンはテレビの角に当たって跳ね壁にぶつかって中の乾電池が飛び出した。スローモーションのように二つの金色の乾電池が舞い踊る。
千春は鼻息一つ残して透に背を向けた。部屋の壁に掛けられているダッフルコートを掴み玄関に駆け出そうとする。透は慌てて千春の後を追うために立ち上がった。無造作に鍵が開く音がする。
「千春！」
スニーカーを突っかけドアノブに掛けた千春の雪のように白い手を上から押さえつける。柔らかなその手はハッとするほど冷たい。
「何よ！」
乱れて顔に降りかかる細く柔らかそうな髪の向こうから暗く光る蒼い瞳が見えた。その瞳がさらに光を集め何かが零れ落ちた。頬を伝っていくのは涙だった。
「千春・・・」
「だから何？」
泣き声で叫ぶように千春は問い返してきた。ぽたぽたと足元に落ちる涙を隠そうともしない。血走った目は開いた傷口を見るようで痛々しい。しかし、透は千春から目を離さなかった。ここで全てをはっきりさせておいた方が良い。
「ここにいることを親は知ってるのか？」
「私、子供じゃないの。私がどこか行くのに親の了解なんて必要ないわ」
千春はまるで頭の中で想定問答を用意していたかのように間髪を容れず一息で言い切った。ドアのノブを回そうとする千春の手を透がさらに力を込めて押さえつける。
「子供だとか大人だとかいう問題じゃない。一緒に暮らしてる人間

が行き先も告げずに急にいなくなったら誰だって心配するだろう」
「心配しようがしまいが私には関係ないわ。私は自分の行きたいところに行くし、したいことをする」
「そんな勝手通用するかよ」
「じゃあ、お兄ちゃんはどうなのよ。毎日好きなようにやってるんじゃないの？」
痛いところを突かれて透は返答に窮した。確かに仕事もせず自分の嫌なことからは全て逃げて暮らす毎日だ。少なくとも千春の行動をとやかく言えるほど立派な人生を送ってはいない。しかし、事ここに至ってはこのまま今の生活を続けていくわけにはいかなくなっていた。透と千春との隔たりは次第になくなり、互いの背後にある物事がはっきりと見分けられる近さになっている。霞んでいたものがくっきりと姿かたちを現し何かを隠そうとするには意識的な繕いや嘘が必要となるほど二人親密度は高まってきている。
「とにかく、今から家族に電話しろよ。電話さえしてくれれば親の了解があってもなくても今までどおりここに居てくれていいからさ」
やはり家族には少なくとも生きていることだけは伝えておくべきだろう。透も和馬とはここのところよく会っているし、一年に一度ぐらいは父親とも当たり障りのない程度の会話を電話でしている。好きでも嫌いでもそれが家族というものだ。
「・・・いないのよ」
「いない？」
「そう、いないの。死んじゃったのよ。両親とも十五年前に」
「同時に？」
「交通事故よ。対向車線を走ってたトラックが何かの拍子にセンターラインをはみ出してぶつかってきたの」
千春は目を伏せたまま事故の様子を語った。トラックに衝突されて千春の乗っていた車はおもちゃのようにくるくると回転しガードレールに激突した。そこへ後ろから走行してきたセダンが避けきれずに追突。車は元の姿が分からないほどにひしゃげてしまっていた。

奇跡的に千春が座っていた助手席だけは何事もなく、結果千春だけが生き残ることができたと言う。
二人の間に重苦しい空気が流れる。
「俺に似てるって言う千春の本当のお兄さんは？」
訊かなくても千春の表情から何となく答えは分かっていた。しかし訊かずにはいられなかった。
「・・・死んだわ。そのとき一緒に。その後施設で育った私には電話する家族なんていないのよ」
嘘かもしれないとは思った。しかし、ゴメンという言葉も軽々しくて口には出せなかった。透はただ黙って千春の手を握り締めるだけだった。千春の冷たい手はさらに温度を失っていた。
透は二十年前のあの日のことを思い出していた。あの地震のとき父親と和馬は軽トラックで注文先に配送中だった。二人が急遽家に駆けつけたときには透は病院に搬送された後だった。消火活動も空しく燃え崩れていく我が家を前に父親は何を思ったのだろう。消防隊員から母親が逃げ遅れたことを聞かされて和馬は何を考えたのだろう。二人は何もできなかった俺のことをどう思っているのだろう。透の脳裏に浮かんだのは今まで幾度となく考え一度も口に出したことのないそんな疑問だった。
透と千春はドアノブを掴んだまま動かなかった。
「俺ってそんなに本当のお兄さんに似てるのか」
「・・・うん。うまくいえないけど雰囲気がね。何考えてるか分からないところとか、それでいて優しいところとか」
ベッドの上でまた携帯電話がブーンと振動している。重苦しく張り詰めた雰囲気に針が刺さったように千春がぷっと吹きだして笑う。
「きっと和ちゃんからよ」
涙を湛えた千春の瞳が冬空の星屑のようにキラキラと光っている。濡れた彼女の頬を優しく拭うと透は千春の手を引いてベッドに戻った。
電話に出ると和馬の声とともにどうやら先ほどの番組の音声が聞

こえてくる。
「まだ見てるか？」
「いや、それどころじゃなくなった」
「何かあったのか？」
お前のせいだ、と罵りたくなるがそんな元気もない。
「別に」
「千春ちゃんは関係ないみたいだな」
「そうなのか？」
「テレビつけてみろよ」
透は散らばった乾電池をリモコンにセットしてテレビの電源を入れた。
画面には一目で漁師と分かる良く日に焼けた丸坊主の中年男性とその妻と思われる丸々と太った化粧気の全くない女性が神妙な面持ちで瞑想に耽っている霊能力者の言葉を待っていた。「本城さゆりさんを捜索中」というテロップが出ている。
「本城さゆりの親は漁師なんだって」
「そうみたいだな」
「わりい、わりい。サダオとヒサエからあんなエキゾチックな子は生まれねぇわ。ま、今日のことは忘れろや。やっぱ良く考えたらさ、お前に言い寄っても良い事なんて何もねぇもんな。それに千春ちゃんなら可愛いから泥棒でも失踪者でもなんでも良いじゃん。あんな良い子他にいないから大事にしろよ」
「勝手なことばっか言うなよ」
強めの口調で言い返してはみたが和馬の言い草には透は呆れて頬を緩めるしかなかった。和馬の言うことに耳を傾けた自分の愚かさに思わず笑ってしまう。
「勝手でも何でも千春ちゃんを泣かしたら俺が許さねぇぞ。速攻九十万払ってもらうからな」
電話を切るとコタツの上にはチャーハンが二皿並んでいた。台所からビールを二缶持って現れた千春はコタツに座ると平然とした顔

でプルタブを開けた。細く白い首を露わにして美味しそうに咽喉を鳴らす千春は新鮮だった。やけにその姿が様になっていて透は呆然と眺めていた。ひょっとすると千春は鬼も逃げ出す酒豪なのかもしれない。

「和ちゃん何て？」

「ああ。千春を泣かしたら九十万円払えってさ」

「ふーん。じゃあ、早速払わなきゃね」

千春はそう言っていたずらっぽく微笑みながら「もう要らない」とビール缶を透に差し出した。苦そうな顔をして実は下戸だと白状する千春の愛らしさが透の胸を甘く締め付けた。

9

迫り来る猛獣に剣を突きつける。魔法を唱え味方の体力を回復する。精霊を呼び起こし一気に敵を駆逐させる。

ここのところ何となくゲームの世界が味気なく思えてきた。敵と戦っているときも謎解きをしているときも「こんなことに何の意味があるのだろう」という疑問が自分の頭から離れない。所詮、ゲーム会社の人間がプログラミングした架空の世界を限られた行動体系の選択肢の中でスタートとゴールのはっきりしている物語を進めているだけだ。それをクリアできたところで誰も誉めてはくれないし、取り立てて充足感があるわけでもない。ただ腰や肩が凝り固まり、目が疲れ、時間が無為に過ぎていくだけだ。

隣を横目で盗み見るとやはり千春はスケッチブックに何か絵を描いている。モデルは頭の中に明確に出来上がっているのだろう。スケッチブックから顔を起こして何かを確認するというようなことは一切なく、一心不乱に白紙を睨みつけ鉛筆を走らせている。一点を凝視する蒼い目が発している鬼気迫る力強さは透を圧倒する。あれだけ何かに没頭できるものがあればと羨み、そんなものには一生かかっても出会えないだろうと透は力なくコントローラーを床に放り投げた。

一体自分はいつまでこんな生活を続けていくのだろう。やがていつか学校から退職を勧告され、流されるように辞表を書き、消しゴムのカス程度の退職金を押し戴く。金の蓄えはあっという間に底をつき、近い将来この部屋の家賃も払えなくなるだろう。住む場所もなく食べものを買う金も使い果たして自分が行き着く先はどこなのか。来年の冬はどこか鄙びた商店街の裏道でダンボールに包まり寒さに震えているのかもしれない。そんな人生は嫌だと思う。しかし、ホームレス生活を回避するための方策が思いつかないでいるうちに、それならそれで仕方のないことだという諦めに似た思いが胸の奥底

に芽生えてきているのを透は否定できなくなっていた。そうなったら千春はどうするのだろう。幾ら一緒にいたいと言われてもそんな生活を送らせるわけにはいかない。できることならこれから先もずっと千春には好きな絵を描いて暮らしていけるようにしてやりたいと思うが、自分の居場所さえも確保できないのに千春の将来の面倒を見られるわけがない。

透は考えることを放棄してぼんやりと天井を見上げた。カーテンの隙間から忍び入って天井の端を明るく照らしていた陽光もいつの間にか茜色に変わっている。もう夕方と言っても良い時刻なのだろうか。脳の深いところに痺れのような疲労を感じる。いわゆる眠気というものだ。そろそろ睡眠導入剤を喰らって光も闇もない何もない世界に堕ちていきたい。最近少しずつ薬の量を減らしてきていたが今日はそれでは容易には眠れない気がしていた。どことなく神経が昂ぶっている。

「千春」

「何？」

千春は手を休めずに返事をする。ただでさえ大きな瞳をさらに大きく見開いてスケッチブックに集中している。

「千春は画家になりたいのか？」

「画家？」

千春は鉛筆を止め怪訝そうに何かを確認する顔で透を見ると、途端に吹き出した。

「真面目な顔して何言ってんのー。そんなの考えたこともないよ」

千春は苦しそうに腹を抱えて笑う。足をドタバタさせ、手で床を叩いて哄笑する。呆気に取られている透を尻目にひとしきり笑い転げると千春はおかしすぎて涙が出ると目尻を指で拭った。

「そんなにおかしいか？」

「そりゃおかしいよ。あー、おかし。お兄ちゃん、知り合いに画家さんっている？」

「そりゃ、いないけど」

「私もいないよ。画家さんってどうやってなるんだろうね。試験とかあるのかな」
自分の言葉が面白かったのかクックッと声を押し殺して笑う千春の様子が透には不思議だった。
もちろん透は千春を笑わせるために冗談を言ったのではない。素人目にも千春の描き上げる絵がかなりレベルの高いものだということは分かる。千春のキャンパスブックの絵をそのまま街頭に並べたら譲ってほしいと財布を開く人間はすぐ見つかるのではないか。しかし、少しふざけた感じの千春の口ぶりでは画家になることなど全く念頭にない様子だ。野球好きの少年はプロ野球選手になりたいと思い、歌が上手な少女は歌手になりたいと一度は憧れるものだろう。あれだけ絵が好きで才能もある千春が画家になることなど考えてもみなかったと言う。千春にとって絵とは一体何なのだろうか。
そのとき呼び鈴が鳴った。
透は反射的に時計に目を走らせる。時刻は五時を数分過ぎたところだった。
ピンポンともう一度呼び鈴が鳴る。間違いない。この部屋を誰かが訪れている。しかもこの尋常な鳴らし方は和馬ではない。まっとうな人間がこの部屋に用があると言っている。
「お兄ちゃん、誰かお客さんだよ」
「静かにっ」
透は猛禽類が敵を威嚇するような厳しい目で千春を制してゆっくりと玄関を振り返った。鉄の扉の向こうにいる何者かの気配に透は息を殺す。飛び交う銃弾から身を守るように身体を小さく低く保ってそのまま動かない。
「神谷先生。私です。教頭の景山です。いらっしゃいませんか？」
来た。死神が透を？まえにやってきた。いるのは分かっているんだ、と標的を追い詰める。透は必死に自分の両肩を抱き締めた。身体の内側から広がる堪えようのない寒さに全身が小刻みに震える。
「教頭先生だよ。出なくていいの？」

千春が小声で透に耳打ちする。透は忌々しげに舌打ちをした。
「黙ってろって」
「でも、心配してきてくれてるんじゃ・・・」
「やなんだよ。学校の人間と会うのは」
「でも、お兄ちゃんだって今のままで良いと思ってるわけじゃないんでしょ。教頭先生と話してみたら何か良い解決策が見つかるかもよ」
「黙ってろって言ってるだろっ！」
透は思わず声を荒げていた。千春は目を見開き息を飲むようにして黙りこくったが、透の声はおそらくドアの向こうにまで届いてしまっただろう。居心地の悪い沈黙が部屋の内外にはびこった。景山教頭は透が居留守を使っていることを確信したに違いない。どうやって透をおびき出すか次の一手を考えながら耳を澄ましてこちらの様子を窺っているのだろう。少し長めのロマンスグレーの髪をオールバックに撫で付け、身体は小さいが頭のてっぺんから踵に鉄の棒を差しているかのように背筋のビシッと伸びた初老の紳士が穴が開くほどドアを睨みつけているに様子が手に取るように分かる。
我慢比べだった。透は部屋にいることがばれても出て行くつもりはなかった。教頭がドアを離れるまでは絶対に身動ぎ一つしない覚悟だった。
「神谷先生。今日はどうしても会ってお話したいんです。お身体の調子はいかがですか？病院の方でうかがいましたが症状が緩和してきているみたいですね。私と話すことが現場復帰の第一歩だと思ってドアを開けてもらえませんか」
景山教頭は生徒をなだめるような声で話しかけてきた。
長年問題児の生徒指導を任されてきた酸いも甘いも噛み分け飴と鞭を使いこなす海千山千のベテラン教師だ。こちらの気持ちの整理ができていない今の状況で面と向かって言葉を交わしてしまえば知らず知らずのうちにこちらの意図していない結論を掴まされてしまう。

「私が助言、指導を行ってきたのは生徒だけではないことは神谷先生もよくご存知でしょう。神谷先生のように精神的な疾患で職場から遠ざかっている教師も今まで何人も見てきました。一人で抱え込むのはよくありませんよ。安心してベテランの私に話してみてください」

入り江の穏やかな波のように寄せてくる言葉の連なりが透を息苦しくさせる。透は両手で耳を強く圧迫した。壁に向かって倒れこみ額を床に押し付ける。今、ドアの向こうに立っているのは片桐の言葉が真実であれば一昨年の文化祭での事件を事故だと偽装した男だ。消えてくれ。頼むからこの場から立ち去ってくれ。

「悩んでいることは恥ずかしいことでも誰かに責められることでもない。そして口に出してみれば意外に何でもないことだったりするもんです。人間は一人では生きていけない。時には力を抜いて誰かに支えてもらうことも必要なんですよ。さあ、ドアを開けて私に・・・」

「病院だとか、復帰だとか、精神的な疾患だとか。ドアの前で大きな声で詰るように言うのはやめてください！」

不意に頭の中に割り込んできた千春の声に透は驚いて顔を起こした。透の横にいたはずの千春がいない。振り返ってみれば千春は締められたドアのこちら側に立って肩を戦慄かせている。

「詰るなどとは・・・」

教頭が虚を突かれたような呆けた声を出す。

「そのつもりがなくても、そう聞こえてしまうものなんです。本人は体調が悪くて寝ております。申し訳ありませんが今日のところはお引き取りください」

千春の低く抑えてはいるがはきはきとした小気味良い声がドアの向こうに吸い込まれていく。

「しかし」

「職場の方と会うのは精神的にすごく苦痛なんです。教頭先生がおっしゃるとおり人間は誰かに支えられて生きています。そして今は

私がその役目を担っています。今後は私も居ますので前もって電話をしていただいて本人に心の準備をさせてからお越しください」
「・・・失礼ですが、あなたは神谷先生とはどういったご関係で？」
「私は、・・・神谷の妹です」
「妹さん？」
教頭は千春の言葉を明らかに疑っている。透はがっくり項垂れた。採用時に提出した身上書を見れば透に妹がいないことなど一目瞭然だ。しかし千春は堂々と胸を張っていた。
「そうです。妹です。兄が病気なので看に来てるんです」
「では、妹さん。お兄さんの様子は・・・」
「とにかく、今日はお引き取りください！」
どうあっても退かないという千春の鋭い気概が辺りの空気を引き締める。千春の華奢な背中が今は大きく自信に満ち溢れて見える。
「分かりました。今日のところは帰ります。次はお電話を入れてからうかがいます、とお兄さんにお伝えください」
一段と大きな教頭の声は千春にではなく後ろで聞いている自分に向けて発されたように透には思えた。
コツコツと乾いた革靴の響きが遠ざかっていく。その音が小さくなっていくにつれドアの前に立っている千春の肩が萎んでいくようだった。
教頭の気配が完全に消えると糸の切れた操り人形のように千春は力なくその場に蹲った。
「千春？」
透は這い蹲りながらドタバタと千春の元に駆け寄った。
「千春。大丈夫か」
千春の背中に手をやりその顔を覗き込む。すると千春は声を出しながら大きく吐息を漏らした。
「あー、やっちったぁ」
泣き出しそうな湿り気を含んだ声だった。むっくりと起こした千春の横顔は生気なく青ざめていた。ちらりと透の方を盗み見たかと

思うと透に向き直るや土下座をするように再び床に崩れ落ちた。
「ごめんなさぁい」
今度は明らかに泣いている。不規則に揺れる背中と共に微かに嗚咽が聞こえる。
「どうした？」
「私、また勝手なことをしちゃった。お兄ちゃんを困らせちゃった」
「・・・困ってなんかない。今回ばかりは千春に助けてもらったと思ってるよ」
正直な気持ちだった。千春が言ったことは全て的を射ている。
透もこのままで良いと思っているわけではない。しかし何とかしなくてはいけないと思ってはいてもそこから先へは身体も心も一歩も前に踏み出せないでいたのだ。仕事を続けるにも辞めるにもいつかは教頭と話をしなくてはならない。それは分かってはいるのだが、教頭のことを頭に思い描くとどうしてもあの一昨年前のことが眼前にまざまざと蘇り足が竦んでしまうのだ。
透は休職前から教頭と向かい合って話すのは苦手だった。その意識は単純に上司と部下という上下関係から来たすものではない。他の教師の中には教頭を牧師のような包容力だと評して慕っている者も少なくないのだが、透にはどうしても彼の人間としてのその器の大きさのようなものに尻込みしてしまうような感覚があるのだった。しかし、先ほどの教頭と千春のやり取りを聞いていてその苦手意識が少しは払拭されたような手応えが透の心に芽生えていた。千春は教頭に対して物怖じせず自分の考えを開陳していた。教頭の言動に真っ向から対峙し自分の主張を受け入れさせ一時的にではあるが透の前から追い払った。今、透の胸に兆しているのは爽やかな解放感だった。教頭と千春のやりとりに、教頭の言うことはいつも正しい、教頭の考えには無条件に囚われなければならない、といういつの間にか心の中に出来上がっていた思い込みが絶対のものではないということに気付かされたのだ。
千春はいつまでも泣き止まず、透は千春の背中をさすり続けた。

千春の体温を感じながら時折小さく咽び揺れるその背中のカーブを手でなぞる。その柔らかな感触は不思議と透を穏やかな気持ちにさせる。

ふと気がつけば千春は静かに寝息を立てている。目尻を涙に濡らしたその寝顔を眺めながら透はいつまでもその背中をさすり続けた。

お兄ちゃん。

千春が寝言で透を呼ぶ。微かに笑ったような横顔は驚くほどあどけない。透の手の下で無防備に蹲る千春を見ていると作り物ではない自然な眠気が兆してくる。透はゆっくりと千春を抱えるようにしてその傍らに横たわった。キッチンの堅い床は頬に冷たかったが透はいつまでもこうしていたいと思った。

10

景山教頭から透の携帯電話に連絡があったのは三日後だった。「今からうかがいますが、よろしいですか」という教頭の苛立ちも優しさも感じさせない抑揚のない言葉は疑問形でありながら聞き手にはイエス以外の答えを口にさせない凄味があった。透にもこの三日間で教頭と会うことを避けることはできないという覚悟はできていた。しかし会って何を語れば良いのかという自分への問いかけには、その時が来ても明確な解答が見出せてはいなかった。

透は待ち合わせ場所の喫茶店アドゥマンの木製の扉を躊躇いなく開いた。一瞬でも動きを止めてしまえば二度とそこから先へは進めない気がして透は半ば自棄気味に目を閉じながら自分をドアの奥へ送り込んだ。

すでに約束の時間からは十分過ぎている。

わざと遅れてきたのだ。

教頭の性格からして遅刻してくることは考えられない。従って予定時刻にアドゥマンに向かえば店の前で鉢合わせする可能性がある。心の準備ができていない段階で昼日中の道端に不意に教頭と顔を合わせることは避けたかった。だからと言って時間よりも前に来て待つという選択肢は透にとってさらに苦痛なことだった。アドゥマンの椅子に腰掛け今か今かとドアと手元との間を視線を行き来させている自分を想像するだけで透は窒息死しそうになる。

教頭にしてみれば透が姿を現すかどうかもまだ半信半疑のところがあるはずだった。あの事件とも事故とも言えない日から今日ここに至るまでのほぼ一年半の間、透は教頭の誘いを何度となく無視し続け結局一度も顔を合わせたことがない。そんな人間との約束なのだ。十分ほどの遅刻で機嫌を損ねるようなことはないだろう、というのが透の読みだった。

ゆっくり目を開くと一番奥の席に見覚えのある灰色の後頭部が浮

かんでいる。透は心臓に一気に血が流れ込んだような痛みを感じて眉を顰めた。このまま踵を返して外に出て元来た道を帰りたいという思いに駆られる。

この前もいた白髪の男性がカウンターに座っていて、こちらを振り返ると前回と同じようにこやかに小さく頭を垂れすぐに向き直った。カウンター越しにマスターの視線とぶつかる。マスターはいつも通りすぐに視線をグラスを磨いている手元に落としてしまう。それは透に、先に進むのも後に引き返すのもご自由に、と言っているようだった。

透は部屋で待っている千春を思った。教頭に会わずに部屋に戻ったと知れば千春はどのような顔をするだろうか。おそらく透の不甲斐なさを責めるようなことはせずいつも通りのあの優しい笑顔で迎えてくれるだろう。そして薬を飲まなくては眠れない日々を今までと同じようにこれからも続けていくことになる。

不意に千春の声が透の耳に届いたような気がした。

お兄ちゃんだって今のままで良いと思ってるわけじゃないんでしょ。

確かにその通りだった。千春の言うことは痛いほど正しい。

一歩、透は足を前に進めた。一歩。また一歩。暑くもないのに額に汗が滲んでくる。できることならば教頭には振り返って欲しくない。途中で教頭と目が合ってしまえばそこから先に足が進んでいかない気がしていた。一歩。また一歩。喉が渇き胃が絞られるような圧迫感を覚える。ようやく教頭の横に辿り着くと足が竦み声が震えた。人生で一番緊張した「達磨さんが転んだ」だった。

「ご無沙汰してます」

頭がのぼせているのか平衡感覚がはっきりとせず全身に力が入らない。逃げ出したい。しかし、もう逃げる場所はない。

景山教頭は透の店内での様子を一部始終見ていたような泰然とした顔つきでゆっくりと透を見上げた。

「なかなか雰囲気の良い店をご存知ですね」

11

部屋に戻ると千春は部屋の壁に凭れスケッチブックに絵を描いていた。透に気付いているのかいないのか、千春はいつものように眼球が零れ落ちそうなほど目を真ん丸に開いてせっせと鉛筆を動かしている。

透はダウンジャケットも脱がずに倒れこむようにしてベッドに横たわった。着膨れした身体がベッドになじまない。身体を起こして強引にダウンジャケットを毟り取ると適当に床に放り投げて再びベッドに戻った。しばらくの間、枕に埋めていた顔を少しずらして千春の姿を確認する。

やはり千春は一心不乱に絵を描いていた。透は千春に聞こえるように盛大にため息をついた。しかし千春の指は止まらなかった。

あれだけ打ち込めるものがあるというのは羨ましいことだ。千春を眺めているといつも同じ思いに駆られる。身体全体でキャンパスブックに挑みかかるような千春の鬼気迫る姿勢はさながら得体の知れない妖怪にとりつかれているかのように見える。絵を取り上げたら千春は死んでしまう。そう誰かに教えられれば、なるほどそうなのだろう、と疑いもなく納得してしまうに違いない。それほど千春の絵への専心ぶりは激しい。

自らの命を鉛筆の芯に宿すようにして一枚の絵を描き上げたときに得る達成感といったら相当のものだろう。

何か一つの物事に深くのめりこんでしまうことにより、たくさんの何かを犠牲にしてしまっているということはあるのかもしれない。しかしそのマイナス面など全く目に留まらないほどの充実感がきっとそこにはあるのだ。

千春にとっての絵のように自分にも一切の雑念を捨てて集中できる何かがあれば、と透はよく思う。「それ」さえあれば今の不安定な精神状態などすぐに治癒するはずだと。しかし、だからと言って

その何かを探そうという気にはなれなかった。なぜなら「それ」は探そうとして見つかる類のものではなく、運命というものがこの世にあるとするならば見つかる見つからないはまさしく運命なのだ。しかも四半世紀も生きていればたいてい「それ」にはすでに出会っているはずだとも思う。「それ」そのものに出会えるのはごく限られた、出会うための能力を持った人間だけであり、どうやら大方の人間同様自分にもその能力は備わっていないらしいと思わざるを得ない。

透は自分について考えてみた。教師という職業は自分の口に糊するための手段でしかなく天職という自覚は全くない。何かの都合で幸運にもトラウマが払拭でき復職できたとしても教育という仕事に寝食を忘れてのめり込むようなことには決してなれない気がする。株や競馬、ゲームなども頭のどこかで他所事を考えながらやっているところがある。そして他の物事にも特に興味など持っていない。

つまるところは透と千春は身体のつくり、持って生まれたものが違うと言うことになる。ダイヤモンドの原石のような荒々しいまでの輝きを見せる千春が吹き溜まりの隅の隅に腐敗しかけながらも辛うじて存在している濡れ落ち葉のような自分を「好きだ」と言っていることが透にはやはり信じられない思いがする。何となく同じ部屋のすぐそこにいる千春が遠いところにいるような感覚に陥る。近い将来千春は自分を置き去りにしてこの部屋を出て行くだろう。透はそんな予感に心のどこかが凍えたような気がした。

「何描いてるの？」

胸に迫る寂しさに思わず声を出していた。呼びかけるというよりは手元に手繰り寄せるように。しかしすぐには返事が返ってこない。予想していたとは言え落胆がないということにはならない。八畳の部屋が無限の広がりを見せ透は千春に背を向けるように壁に向かって大きく寝返りを打った。目の前に動くことのない大きな壁があるとどこかほっとする。

「寝てるお兄ちゃん」

千春の楽しげな声が背後に聞こえる。
「寝てちゃ悪いかよ」
「違うよ。これ見て」
身体は壁に向けたまま顔だけで千春を振り返る。
千春はスケッチブックを透に向かって広げていた。そこに描かれているのはベッドに眠る透だった。うつ伏せで顔半分を枕に埋めて眠るのは透の癖だった。
透は目を凝らした。布団から出ている上半身は何も身につけていない。あるはずのケロイドに爛れた火傷の跡がそこには描かれていない。彼女が気を遣ったわけではないだろう。千春は俺の背中を見たことがないのだ、と透は思った。千春は嘘をついた。やはり初めて会った日には何もなかった。千春との間に肉体関係はなかったのだ。
「教頭先生とお話できた？」
千春は急に透の目から隠すようにスケッチブックを仕舞い話の方向を転換した。
不意にアドゥマンでの教頭の言葉が耳に響く。
いつまでもこのままの状態を続けることはできないということはお分かりでしょう。確かに制度のことを言えばまだあと一年以上はお休みいただけます。しかも神谷先生の場合は勤務中の事故がきっかけで病気になられたということで本当に同情を禁じえない。しかし、学校経営も楽ではないのですよ。理事長には顔を合わすたびに人件費が高い、教師の数をもっと減らせないのかと注文をつけられている。酷なことを言いますが理事長は昨年末から神谷先生を復帰のめどが立たないのなら退職金に若干色をつけてでもすぐに辞めさせろとおっしゃっています。現場を預かる私としても他の先生に業務量のしわ寄せが続いている現状をいつまでも続けるわけにはいかない。神谷先生に戻ってきていただけるのが一番なんですが、それが叶わないということなら次善策ということもやはり考えざるを得ない。

景山教頭は見事に渋面を崩さず、いかにも言いにくいことをやむを得ず口にしているという空気感をまといながらも淀みなく言いたいことは全て言ってのけた。
「まあ、このままだと年度末、3月いっぱいで免職だとさ」
透は努めて明るく振舞った。
辞めるのなら早く辞めてもらわないと次を雇えない。教頭の言いたいことはつまりそういうことだった。改めて現実を突きつけられてみるとどことなく吹っ切れた感じはある。半ば想像していたことでもあり思っていたほどの衝撃もなかった。
「だとさって・・・。免職ってクビってことじゃん！お兄ちゃん、いいの？ほんとにこのまま辞めちゃっていいの？」
「仕方ないだろ」
便利な言葉だ。しかし世の中には「仕方ない」で片をつけなくてはいけないことが意外と多いのだ。
「でも、このまま仕事を失ったら、お兄ちゃんきっと・・・生きていけないわ。お兄ちゃんは真面目な人だもん。こんな暮らし続けてたら近い将来身体壊して死んじゃうよ」
熱い口調で透の人生を心配する千春に透は温度差を感じる。当の本人が諦めようとしているのにどうして横から茶々を入れるのか。人生はなるようにしかならないのだ。行きつくところまで行けばゲームオーバーになるだけだ。
「もういいんだよ。死んでも」
思えばあの二十年前の火事で自分は死んだようなものなのだ。母を見殺しにし、自分もその母の道連れにあのまま業火に巻かれて死ぬはずだった。それがどこかでボタンを掛け違えて敢えなく死に損なってしまったのだ。そう思うとあのとき死に切れず、苦しみぬいて生にしがみついてきた今までの自分は何と無駄なことをしていたのかと感じられてならない。
「馬鹿なこと言わないでっ！」
目に溢れんばかりの涙を溜めて千春が怒り出した。

「千春？」
透はベッドの上に少し身体を起こした。
「ねぇ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは何のために生まれてきたの？」
鉛筆を操っていたときとはまた異質の、それこそ髪が逆立ちそうなほどの圧倒的なオーラを身体全体から発して千春が睨みつけてくる。
「何のためって・・・」予想外の千春の攻勢に思わず腰砕けになりそうになるところを堪えた。「そんなこと知るかよ。お袋にでも訊いてくれ。まぁ、俺のお袋は二十年前に火事で死んぢまったから訊くにはあの世に行くしかないけどな」
「違う。違うよ、お兄ちゃん」自嘲気味に笑う透の笑っていない目を覗き込みながら千春は諭すように話しかけてきた。「生まれてきたのはお兄ちゃん自身でしょ？お母さんのお兄ちゃんを産むっていう行為とお兄ちゃんのお母さんの身体から生まれてくるって行為は同じように見えて全く違うことだわ。確かにお母さんはお兄ちゃんを産んだ。そしてお亡くなりになるまでお兄ちゃんを育てた。それはお母さんにとって偉大な体験で、その体験をするためにお兄ちゃんを産んだのよ。でもお兄ちゃんはお母さんにその体験をさせるためだけに生まれて来たんじゃないわ。お兄ちゃんにはお兄ちゃん自身の大切な何かのためにこの世に生を享けたのよ。その何かって何？」
「何言ってんだよ。分っかんねえよ、そんなこと」
「分かんなくないっ！ねぇ、お兄ちゃん。答えは一つしかないんだよ。誰にとってもたった一つなの」
「俺が何のために生まれてきたか？そりゃ、結局死ぬためだろ。人間誰しも死ぬんだ。人間だけじゃない。この世に生きとし生けるものは必ず死ぬんだよ」
「それは違う。生まれてきたのは死ぬためだなんて本気で、・・・本気でそう思ってるのなら今ここで死んで見せてよ！」
「無茶言うなよ」

千春を突き放すように透は鼻で笑って見せた。しかし、千春は透の意図に反してさらに透に食いついてきた。千春は立ち上がって身振り手振りで透に訴えかけてくる。

「無茶言ってるのはお兄ちゃんよ。生きているのは死ぬためなんかじゃない。死ぬためだとしたらどうして死ぬのが怖いのよ。私は死ぬのが怖いわ。自分が死ぬことを考えたら怖くて怖くて泣けてくるし震えてくる。お兄ちゃんだって死にたいはずがない。したくないことをするなんて自分の人生に素直じゃないわ。人生に逆らうようなことがどうして生きるっていうことになるのよ」

「そんなこと・・・」

何とか抗弁しようと頭を巡らすが何も出てこない。

「生きるってことは体験するってことだよ。お兄ちゃんが生まれてきたのはお兄ちゃん自身がこの世界でいろんなことを体験したいからなのよ。体験って、何かを経験してそして自分の心の動きを感じること。経験を通じて何かを感じる。それが喜怒哀楽のどれだろうと構わない。その抱いた感情こそが生きている証なのよ。お母さんはお兄ちゃんを産んで育てて、それでものすごく多くの喜怒哀楽を感じたのよ。お母さんにとってそれが生きた証。お兄ちゃんこそがお母さんにとって生きているということだったのよ。じゃあ、お兄ちゃんにとって生きている証って何？この狭い部屋に閉じこもり続けることでいったい何を体験できるの？」

「そりゃ、ゲームだとかインターネットで何だって体験できるさ」

寂しいことを言っていると透は思った。我ながら貧しい発想だ。この程度のことしか言えない今の自分に透は大きく失望せざるを得なかった。それは先ほど教頭に今年度末での退職を示唆されたときに受けたショックよりもはるかに大きかった。

「確かにそれも体験よ。でもね、ゲームなんて所詮誰かが考えたプログラムをなぞらされているだけのことじゃない。あらかじめ用意された体験コースを歩いているに過ぎないわ。そんなコースで得られるものなんて多寡が知れてる。ネットで為替や株の取引をしてお

兄ちゃんは何か感じてるの？たとえ感じてるとしてもちょっとした後悔や失望でしょ。いつまでもそれじゃもったいないわ。この世に生きている人たちと交流してこそ本当の体験ができるのよ。この世がお兄ちゃん一人の世界だったとしたら、たとえどんなにすごいことを、例えば宝くじで一億当たっただとか、フルマラソンを完走しただとか、そういうことを経験しても意味ないと思わない？その経験を誰かと共にしたり、その経験で感じたことを誰かに伝えたりする。それでこそ感情が大きいものになるのよ。本当の喜怒哀楽を感じることができるの。お兄ちゃんにとっての身近な社会ってやっぱり学校なのよ。足を踏み出すならやっぱりそこからだと思う。それが一番自然だと思うの」

「じゃあ、千春にとっての社会ってなんだよ」

「今はお兄ちゃんよ」

「そんなの支離滅裂じゃねぇか。千春の言う社会ってもっと大勢の人間がいるところなんだろ。言ってることが矛盾してるよ」

「矛盾なんかしてないわ。問題は人の数じゃない。私にとってはお兄ちゃんと一緒にいることが最も生きてるって感じられるのよ。お兄ちゃんと同じ空気を吸っていることが私にとっての生きる証なのよ。迷惑かもしれないけど私にとってお兄ちゃんはそういう大きな存在なの。私、お兄ちゃんから力もらってる。だから力の限りお兄ちゃんを支えるわ。お兄ちゃんは絶対にやり直せるよ。だから、死んでも良いだなんて馬鹿なこと言わないで。」

お願い、と千春は大きく蒼い瞳を潤ませる。透は吸い込まれそうになるその瞳から目を逸らした。

「馬鹿なことじぇねえよ！千春には悪いけど俺にはもう無理なんだよ。もう自分の人生に見切りつけたからどうでもいいんだよ。もう諦め切ったんだよ。俺は毎日毎日、明日が来なければ良いのにって思いながら暮らしてるんだ。未来を見るのが怖いんだよ。俺の気持ちも知らないで軽々しく『絶対』だなんて言うな！」

吐き捨てるように言った透の前に千春は立った。黙って透を見下

ろしている。
「何だよ」
見上げると千春の顔からは表情と言えるものが消えていた。瞳から光が消え能面のように色の無い凍りついた相貌で置物のように動かない。
「俺があまりに哀れで掛ける言葉が見当たらないんだろ？」
鼻を鳴らすようにして自らを嘲る透の手首を不意に千春が掴む。予想外の強さで千春は透の手を引き自分の右胸に宛がった。透は千春の突然の意味不明の行動に抗うことができず、されるがままとなりそしてその右手の感触に驚いた。右手からは柔らかさも弾力も全く感じられない。
「私の気持ちも知らないで軽々しく『諦めた』だなんて言わないで」
投げ捨てるようにして透の腕を突き放すと千春は自分の上着に手を掛けた。
「千春？おい、何すんだよ」
ジャージの上着を脱ぎ、その下に着ていたロングTシャツを引きちぎるように脱ぎ去ると呆気に取られる透の前で瞬く間に千春の上半身はブラジャーだけになった。決して暖かいとは言えないこの部屋の中で千春の頬は見る見る上気して赤らんでくる。
「これが、私の身体よ！」
叫ぶように言うと躊躇なく千春はブラジャーをも剥ぎ取った。
そこに現れた乳房は一つだった。左の胸にその小振りだが形のよい女性の象徴とも言える膨らみがあり頂点には小豆程度の大きさの薄桃色の突起が備わっている。それに対して右側はあるべきはずの実りがなく脇の下から鳩尾の近くまで長くて太い百足のような傷痕が走っていた。眩いばかりの白く肌理の細かい肌をグロテスクに這う生々しく赤黒い傷痕はあまりにも異質だった。
透は思わず目を伏せた。羞恥で目のやり場に困ったのではなく、その傷の痛々しさに正視できなかったのだ。
「見て！」千春は透の顔を両手で挟み自分の胸に向けさせた「これ

がこの世にたった一つの私の身体なのよ。私、この胸でも生きてるわ。おっぱいがなくったってこうしてここで息をしているの。お兄ちゃんと生きていたいの。お兄ちゃんといろんなことを体験したいのよ。だから・・・だからお兄ちゃんも生きて」

千春の肩は震えていた。それが寒さのためなのか、興奮しているからなのかは分からないが透には痛ましいだけの風景だった。

透はベッドから降りて千春を抱き締めた。

「分かった、分かったよ。だからもう服着ろよ」

「嫌よ！私、お兄ちゃんと体験したいの。お兄ちゃんも脱いでよ。脱いでその身体を見せてよ」

言うが早いか千春は透の着ているトレーナーを捲り上げる。透に全体重を預け押し倒すようにしてベッドに転がる。透の腹部が露わになり皮膚が引き攣られた火傷の痕を覆うものがなくなった。透は観念したように目を閉じて自分の上に馬乗りになった千春のなすがままにした。全てをさらけ出している千春の前でこれ以上何かを隠すということはできなかった。トレーナーとTシャツを同時に剥ぎ取られて千春と同じ格好になった。目を開かなくても千春が脇腹から背中にかけてのケロイド化した皮膚を見つめているのがわかる。

しかし透の心はいつになく平穏だった。二十年前のあの火事のとき以来忘れていた心からの安心感を味わっていた。千春には何のためらいもなく火傷の痕を見せることができていた。

これを求めていたのだ、と透は悟った。本当は誰かに自分の火傷の痕を見てもらいたくて、その誰かを見つけるまで今まで必死に隠しながら生きてきた。そしてそれを今果たして漸く背負っていた重圧から解き放たれたのだ。

ふと透は脇腹に柔らかい感触を覚えた。指ではない。腹部に顔を埋めた千春の唇が這っているのだ。その周囲を千春の長く冷たい髪が撫でるように滑っていく。こそばゆいような甘い感触が糜爛した火傷の跡から電流が走るように全身に伝わる。少しざらざらとするその肌触りは千春の舌のようだ。千春の唾で濡れた辺りがひんやり

と冷たい。
「俺の身体、怖くないのか？」
「お兄ちゃんこそ私の身体はどうなの？」
起こして笑って見せた千春の顔がどことなく強張っている。しかしそこには透の身体に対する嫌悪感は見られなかった。千春は濡れた唇を薄く開き透を見つめたまま両手で透の脇腹から胸の辺りまでをゆっくり円を描くように滑らせた。自分の裸を透の眼前に晒し透の生の肌を愛撫する。いつの間にか肩で息をするようになった千春は明らかに興奮していた。
透は千春の右胸に手を伸ばした。傷口に優しく指を這わせるとビクッと千春が身体をくねらせる。今度は千春の左胸に触れる。そこにある膨らみを二度三度と揺するように揉むと乳首が朱色を増して突起していくのが分かる。
さらに呼吸を乱して喘ぐ千春の目が潤み口元は艶っぽさを帯びていく。
透は千春の乳首を指で挟み強弱をつけて刺激した。その刺激の強さに合わせるようにして千春の口から湿り気のある声が漏れ始める。千春が透にすがりつくようにして力なく横たわってきた。その千春の身体を持ち上げながら体位を入れ換え今度は透が千春の上に覆いかぶさる。
透も興奮していた。必死に左胸に吸い付き先端を舌で転がすと千春が堪え切れないようにして声をあげた。透がぎこちなく下腹部に手を伸ばすと千春は一瞬身体を強張らせたがすぐに身体の力を抜いた。
千春の身体の中心に向かって透が指を滑り込ませると千春は一つ甲高く鳴いた。
千春の性器はすでに音が鳴るほどに愛液に溢れていた。掻くように指を動かすとさらに高い声で喘ぎ身を硬く反らせた。胸から口を離し肩で息をしながら透は両手で自分のズボンを脱ぎにかかった。目の前に出現した己の性器は今まで見たことがないほど性欲に漲っ

ている。そのままの勢いで千春の下半身も一気に裸にさせ透は膝で千春の膝を割るようにして前に突き進んだ。千春の顔を確認すると何かを堪えるような気負った表情で強く目を閉じていた。両の拳を握り締め胸の上に置いている。その小動物の弱々しい仕草に、透の裡に潜んでいた自分も知らなかった獰猛さが暴れだし透は自らの性器を夥しく濡れそぼった雌の性器に強引に押し付けた。千春が一段と鋭い声をあげ身体を大きく仰け反らせた。

その瞬間透は達してしまっていた。気がついたときには千春の性器から臍の辺りまでを白濁した液体が散乱し黴臭いような臭いを放っていた。

千春は、ぐったりと横たわったまま時折魚が跳ねるように身体を痙攣させている。透は自分の性器からしぶとく垂れ落ちる精子を手で拭き取りながらコタツの上にあるティッシュボックスに手を伸ばした。素早く自分の股間の汚れを取り除くと千春が死んだように身動きしないのを確認してその下腹部にもティッシュを使った。既に乾き始めている精子を拭っていると小さな悲鳴と共に千春が身を捩じらせその全身を毛布で覆った。

「ゴ、ゴメン」

自分でも何についてなのかは分からなかったが直感的にそれが正しいと思って透は謝った。千春は、ううん、と首を横に振ってからくすくすと笑った。忍ぶような笑い声は次第に大きくなり千春は口元に毛布を当てて苦しそうに笑い転げ仕舞いには咳き込みだした。透も何が面白いわけでもなくつられて笑った。笑い出すと、股間を拭っていた情けない自分の姿や、結局事をし損なってしまった不甲斐なさが思い出されて透はさらに涙を浮かべて千春と笑い合った。ヒーヒー笑って透は千春の横に身体を投げ出して寝転がった。

全裸の四肢を思い切り伸ばすのは爽快だった。手足を伸ばして横になる。たったそれだけのことが今まで出来なかったのかと透は思った。あの火事の熱さ、怖さに身を縮めて生きてきたのだとつくづく思った。

「ダメだぁ。俺、やっぱりダメだった」
「私も全然ダメだったぁ。すぐいっちゃったもん」そして千春は少し恥かしそうに付け加えた。「すごく気持ち良かった」
俺も、と透は頷きゆっくり目を閉じた。
「ちょっと息が上がって疲れたなぁ。天井が揺れてるような感じがする」
「私も。何だか胸のドキドキが全然治まらないし」
そう言って千春は透の裸の肩に額を寄せた。千春の柔らかな息遣いが透の二の腕に当たる。透は黙って左側から伝わる千春の温もりに神経を集中させた。その心地良さがいつの間にか透の口を、心を自然と開かせていた。
「小学生のときに家が火事になったんだ」
「うん」
「うちは小さな工場をやっていて梅雨前の乾燥した時期に家と隣接してるその工場から火が出てあっという間に家の方に燃え広がった。気がついたときには周りは火の海になっていた。逃げようにも腰が抜けちまって逃げられなかった。そのとき母親が焼け死ぬところを目の当たりにして自分も火傷を負った」
背中から脇腹にかけてあのときの熱さが痛みとともに蘇ってくる。
「うん」
「それからは火を見ることがすごく怖くなっちまったんだ。汗が噴き出て、喉が渇いて、息苦しくなって、ぶるぶると震えが止まらなくて。だから極力火を遠ざけて生活してきた。煙草は一度も吸ったことはないし、線香花火も持ったことないし、湯を沸かすにはガスコンロじゃなく電気プレートを使う。そういう生活を送っていて十年、十五年と経ってもやっぱりあの火事のことは忘れることができないんだ。身体の火傷の痕を見る度に火の海に残された母親の顔だとか、燃えて倒れてきた柱だとか、自分の身体が焦げていく音だとかが鮮明に頭の中に蘇ってくる。それに常に頭のどこかであの日起きたことが繰り返し繰り返し映像として流れてるんだ。毎日毎晩身

体が燃えて爛れる夢を見るしね。一日たりとも心が休まったことがなかった」
「うん」
「勤務先の高校で文化祭があったんだ。最後にキャンプファイヤーをした。そのときの火が俺の背中に飛んできた。それは事故ではなくて教え子の一人が故意にやったことだっていう噂もある。もしそうだったとしたらその生徒は遊び半分だったんだろうけど、肩口に燃える火を見て俺は完全にパニックになった。逃げ惑い生徒にすがりついて怪我を負わせ最終的には気を失って救急車で運ばれた。それからは誰にも合わす顔がなくて引きこもり生活に入り込んだ。そのときから職場には一度も顔を出したことがない。それが今までの俺の暗い人生なんだ」
「うん」
千春は透を遮ることなく最後まで一言も口を挟むことはなかった。驚きも怯えも見せず静かに横たわっていた。時折小さく頷くことで眠っているわけではないことは伝わった。和馬から凡そのことは伝えられていたのかもしれない。そうでなければ透自身でさえも目を背けたくなるほど醜く爛れた皮膚に進んで手を伸ばし、あまつさえ唇で触れ舌で舐めるような真似はできなかったはずだ。
千春は自分の胸の傷痕を見せ心に抱えている暗部の大きさを示すことで透に心を開かせた。身体に傷を負った千春に対してでなければ透は自分というものをさらけ出すことはできなかっただろう。今度は俺の番だと透は思った。いくら底なしの明るさを装っていてもあれだけの傷を持っているのなら千春は心のどこかには癒しきれていない痛みを抱えているに違いない。
透は千春の告白を待った。
千春は先ほどから変わらず透の腕に額を押し付けて黙ったままだ。透の耳元で熱く湿った大きな呼吸をずっと繰り返している。彼女は今戦っているのだろう。やり遂げた透には分かる。傷痕が大きければ大きいほど、深ければ深いほどそのことについて全てを思い出し

口にすることは勇気が必要となる。彼女なりのタイミングで話し出すのを待つしかない。透はそっと千春の手を握った。
「乳癌だったの」
ぼそっと千春は言った。そして小さく息を漏らした。
「いつ？」
「分かったのは十五のとき。高一の夏の終わり」
「・・・そっか」
千春が一年生のとき二歳違いの透は三年生だ。千春は友達に誘われてバスケットボールの試合を観戦したと言っていた。透の高校最後の試合を観ていた彼女の右胸にはすでに病巣を宿していたことになる。
「若いと進行も早いって。すぐに手術しないとリンパ管から全身に転移する可能性が高いって。・・・おっぱい取っちゃって、私の人生終わったと思った。医者はおっぱいの再生手術を勧めてきたけど、偽物のおっぱいつけることに何の興味ももてなかった」
透は軽く顔を起こし口を開いたが掛ける言葉が見当たらずに、ゆっくりと枕に頭を戻した。千春にとっては神様からかけられても慰めの言葉は白々しく聞こえてしまうだろう。
乳房を失った十五歳の少女の眼前にはどんな人生が横たわっていたのだろうかと思わずにはいられない。どこまでも広がっているように見えていた無数の道は近づいてみれば足の竦む断崖絶壁の向こう側だった。あると信じていた花盛りの季節は造られた演劇のセットのように瞬時に跡形も無く取り払われ彼女は誰もいない明かりもない舞台に一人ぽつんと取り残されたのだ。まるでドラマのようだと思っただろう。ひどい脚本もあったものだと嗤っただろう。自分を取り巻く客の顔は見えず自分がどんな顔で立っているのかも分からず、しかもそのステージから降りることも叶わない。千春は次々と襲ってくる絶望感に身を震わせた違いない。
透はただ千春の手を握り締めるだけだった。
「お兄ちゃんの絵、何枚も何枚も描いたわ」

とうとう千春の声は涙に潤み始めた。隠し切れない嗚咽が痛々しい。

透は千春が最初に見せてくれた絵を思い出していた。夏の県大会の準決勝。顎から汗を滴らせ、チームメイトに向かって指示を出す一人の選手。千春は何を考えながらコートを駆け巡る透の姿を描いていたのだろう。

「えへへ。泣くつもりなんかなかったのに。ごめんね」千春は両手の指で濡れた頬を拭った。「私、手術が終わって退院しても学校には行けなかったんだ。どんな顔して友達とか先生とかに会えばいいのか分かんなくて。それにみんなに慰めの言葉なんて掛けられたらそれこそ頭の線がプチンって切れて、他人のあんた達に何が分かるのって自分で自分を抑えられそうになくて」

「その気持ち、少しは理解できる気がする」

「そうだね。お兄ちゃんはきっと分かってくれてると思う」千春は上半身を起こして透の顔を見つめた。「私たち身体に傷を持つ者同士だもんね」

にんまりと笑う千春はもういつもの表情だった。その笑顔を見ると透もつられて笑ってしまう。しかし今日は千春の柔和な表情の裏側に広く深く暗い河の流れを感じないではいられない。いつ氾濫するか分からない河の堤防を毎日毎日一人で少しずつ高く堅く土嚢を積み上げてきた。今まで知らずに千春の能天気さをあるときは蔑みあるときは羨んでいたことを透は恥じ入る想いで胸が詰まった。先ほど生きることについて語った千春の力強さは実際に死というものに顔をつき合わせて病魔と戦い抜いた彼女だからこそのものだったのだと思い至る。

「この間、強引にお兄ちゃんについてクリニックに行ったとき、結局中に入らなかったでしょ。あの時、病院の臭いを思い出して動けなくなっちゃったんだ。あの時は本当にご迷惑を掛けました」

ぺこりと頭を下げる千春の髪に手を伸ばす。優しく撫でると千春は気持ち良さそうに目を閉じた。

「癌は完治したのか？」
「うん。今のところはね」
「何だよ、今のところはって。そんなあやふやな」
「あやふやなものなのよ。いつ再発したって言われるか分かんないんだもん。だから、今のうちかもよ、この本物の私のおっぱいを楽しめるのは」
そう言って千春は左胸をぐいぐい透のひじに押し付けて笑う。「ふざけんな」と透は千春を抱き締めた。透の腕に包まれて千春は一瞬弱気な表情を浮かべた。
「再発って言葉本当に怖いの。こう見えて私、毎日毎日びくびくしながら生きてるのよ」
「・・・千春」
「なんちゃって。私、今幸せよ。心からそう言える。だって、今までお医者さん以外に裸見せたことなかったんだもん。好きな人と裸で抱き合っていられるってこんなに気持ち良いんだね」
「それ、同感」
ついさっきまで自分の裸を他人に見せるどころか自分で見ることさえ避けていた。浴室では目を閉じて身体を洗い流していた。毎日鏡に自分の身体が映らないように生活していた。しかし、こんな醜い肌でも千春と触れ合うとその温もりが伝わり心地良さを感じる。そのことに透は驚いていた。このぼろぼろの肌でも千春ともっと触れ合っていたいと心から思うのだ。
「ね。もう一回」
透の耳元で千春が甘い声を出し、その手で透の性器を優しく掴む。透は目を閉じて千春の柔らかい指の感触に意識を集中させた。千春がぎこちない仕草で上下に動かすと次第に透の中心に力が漲っていく。千春の息遣いが荒くなっていく。透は勢い良く千春の身体に覆いかぶさっていった。
透の携帯電話が床で振動している。透は微かにそれを耳で感じ取

った。誰かが自分の身体を乗り越えていき、電話の振動が遠ざかっていく。それと同時に再び意識が遠のいていく。

はい。・・・あ、はい、千春です。今、お兄ちゃんは寝てるんです。・・・え？私？今夜ですか？・・・でももう、飲んでますよね？・・・何かあったんですか？・・・そうですか。分かりました。私もお話したいことがあったので。・・・はい。今から用意して出ますので待ち合わせ場所を指定してください。・・・迎え？車でですか？冗談は辞めてください。・・・はい。・・・はい。それじゃ。

目を覚ますと隣に千春はいなかった。

じんわりと重い頭を持ち上げる。

外はすっかり夜の帳に包まれ部屋の中も息苦しいほどの完全なる闇に支配されている。手探りでベッドの上の千春の形跡を追ってみても何も残っていない。掌に伝わるのは冷たいシーツの感触だけだった。何やら胸の奥がすぅっと冷えていく感覚がある。根拠の無い悪い予感に透は慌ててベッドから降りた。確かこの辺りにと両手で携帯電話を探るがどの指もそれらしき物体にたどり着かない。痺れを切らして透は立ち上がり壁に手を伸ばして電気のスイッチを入れる。天井の明りが瞬き一瞬目の前が真っ白になる。慣れない明るさに目の奥にずしりと圧迫感を感じて思わず目を閉じる。すぐに重さは消えゆっくり目を開くとベッド脇の時計は十時を示している。眠っていたのはおそらく三時間ほどだ。

記憶が確かなら千春と立て続けに三度交わった。千春は初めてだったが、快楽に対して貪欲だった。その後のことが何も思い出せないのはそのまま眠りに落ちたからだろう。自分を見下ろせば一糸纏わぬ素っ裸だった。だらんと力なく垂れた性器の周りにこびりついているでんぷん糊の乾いた跡のような白いカスが雄弁に数時間前の情事を物語る。

この醜い皮膚を晒して誰かと抱き合えるなんて想像もしなかったことだ。しかしあれだけ抱いた千春が目の前から跡形も無く消え去

っている。言い知れぬ満足感と不安感が風通しの良い股間から湧き上ってくる。いったい千春は一体どこへ行ったのだろうか。

そのとき透はドアの外にマンションの階段を昇ってくる足音を聞いた。間違いなく千春のものだ。買い物をしてきたのだろうか、足音に合わせてスーパーの袋が揺れる音がする。透は慌てて浴室に飛び込んだ。こんな格好で千春を迎えるわけにはいかないし、あれだけ激しく交わった後にどんな顔をして千春と向き合えば良いのか俄かには分からなかった。

玄関のドアが開くと同時に蛇口を捻る。勢い良く降り注ぐ驚くほど冷たい水に鳥肌を立てながら透は眠っている間に千春が誰かと話しているのを聞いたような気がしてその内容がどんなものだったかを必死に思い出そうとしていた。

12

電話を切るともみ上げの辺りから顎に向かって幾筋も汗が流れているのに気付いた。正座している太腿に黒い染みができているのはその汗が滴り落ちていたからだ。脇も背中も掌もいつの間にか滲み出た汗でぐっしょりとしている。着ている服がやけに重く湿り気を含み、まとわりつく感じがある。透は携帯電話を手にしたまま立ち上がってカーテンを開き思い切り窓を開けた。

透の身体を包んだ風は想像していたほど凍てついたものではなかった。内側からカッカと火照る身体を持て余し清冽な真冬の冷気で鎮めたいと願ったのだが、透を待っていたのは穏やかな春の陽光だった。そういえばと透はカレンダーの掛かっている壁に視線を向けた。昨日から三月になっている。

「ひゃあ。さっぶい」

千春が大げさに泣き言を言って透を非難する。しかし、透は聞く耳を持たずさらに窓から身を乗り出すようにして外気に我が身を晒した。

窓から見える家々の屋根が日差しを照り返し光が波を打っているように見える。昨日まで空を覆っていた分厚い雪雲は跡形も無く消え、飛び交う鳥の鳴き声も威勢が良い。大きく息を吸い込むと土の香りや草木の芽吹きを感じさせるような青々とした爽快さを肺の奥で味わうことができた。長かったようで短かったような今年の冬が確実に終わりに近づいている。

「もう。いい加減に閉めてよ」

透はもう少し冷たい方が気持ち良いぐらいに思っているのだが、振り返れば千春がヤドカリのように肩までこたつの中に入り込んでしかめっ面をこちらに向けている。先ほどまで鉛筆を走らせていたスケッチブックも閉じてしまっていた。

「外は春みたいな陽気だぞ」

「寒いものは寒いの」
「風邪でもひいたんじゃないの？」
ここのところ千春の顔色が冴えないような気がする。真冬の寒さの厳しい時期よりも今日のように少し春めいた穏やかな日の方が心身ともに緩みがちで意外と体調を壊しやすいということもある。透は窓を閉めて千春の傍らに腰を下ろして掌を彼女の額に当ててみた。千春はされるままに大人しく目を閉じた。伝わってくる千春の体温は心持ち高いようだった。しかし、この部屋には体温計というものがない。
「ちょっと熱があるみたいだけど？」
「そんなことないよ。私の心配するよりも自分の心配したら？」
痛いところを見事に突かれて返す言葉に窮する。
先ほどの電話の相手は景山教頭だった。今回連絡を取ったのは透の方だ。職場復帰をしたいというのがその内容だった。やれるだけのことはやってみようと思ったのだ。とりあえずもう一度教壇に立つ。立った結果としてやっぱりだめだ、自分には無理だと分かったときには気持ち良く教師を辞めることができるのではないか。もちろん自信があるわけではない。透のような心の病の場合、今どのぐらいの病状にあるのかは誰にも分からず、元の生活に戻ってみてその結果から初めて身体の本当の調子を判断できるということがある。職場復帰は賭けだった。しかし残された時間はもうなかった。ここで復帰しなければ教師としての自分に戻る道には二度と爪先を向けることはできなくなる。たとえ万に一つでも可能性がある限りは勝負したいと透は思っていた。
こんな風に考えられるようになったのは隣でこたつの中で丸くなっている千春のおかげだった。千春の生きる姿をまざまざと目の当たりにして透の考え方も変わったのだ。
景山教頭は透の申し出を快く了承してくれた。
「いきなり授業を持つのは精神的に負担が大きすぎるでしょう。とりあえずはテストの採点や成績付け、新年度を迎えるこまごまとし

た準備など他の先生の手伝い的なことから始めてください」
そう言ってくれた。それだけでもやってもらえるのともらえないのとでは全然違うからと。
「見る？」
千春は寝転んだままスケッチブックに手を伸ばし描きかけの絵を開いて見せた。そこには悲愴な顔で携帯電話を耳に当てている透がそこに居た。自分でも想像していなかった険しい顔だった。
「お兄ちゃん、戦ってた。あのときみたいだったよ」
言われて思い出したのは千春が最初に見せてくれたバスケットボールの試合中の透を描いた絵だった。汗を振り撒き前を見据え周りに何事かを指示しながら駆け上がる。あの時と同じ真剣な眼差しがそこに描かれていた。
「道理で疲れるはずだよ」
そう言って千春と同じようにこたつに足を伸ばし寝転がろうとするところへ電話が鳴った。
「春美から連絡ないか？」
透が電話に出るや否や和馬が食いつかんばかりに急き込んで尋ねてきた。
「春美から？」何となくチラッと千春の顔を確認する。千春は先ほどと変わらずこたつに埋もれたまま目を閉じていた。「ないけど。どうした？」
「俺も知らなかったんだが、あいつ、実は結婚してたんだ。それで、この前旦那がホテルに乗り込んできてよ。そんとき春美を連れて帰ってからあいつと連絡が取れねぇんだ。住所は知らねぇし携帯に電話しても『現在使われておりません』で困ってんだよ」
何を困っているのだろうか。和馬の焦りように透は違和感を覚えた。透の胸中に蘇るのは大晦日に飲みに連れ出されたときのことだ。あのとき透は和馬に頼まれて和馬の女性関係を二件解消した。しかも一人は春美と同じ人妻であり、彼女と別れることができて和馬は天にも昇るような喜びようを見せた。「女って生物はどうしてこう

もしつけぇのか」と嘆いていた和馬はどこに行ってしまったのか。いつもの和馬なら夫に乗り込まれるような醜態を晒す前に春美との関係を清算していただろう。

「次行けば？」

和馬は今まで次から次へと女性をつまみ食いしてきた男だ。羊に逃げられたらシマウマを襲うのが肉食動物の発想だろう。

「馬鹿言え。このまま引き下がれるか」執着という言葉の対極に存在するような和馬が妙なところで意地を張る。「あいつ、やけに千春ちゃんのこと気に入ってたから絶対に連絡があると思うんだ。電話が掛かってきたら連絡先を聞き出して、それが無理でも俺が連絡欲しがってたって伝えてくれ」

和馬は何度も「頼むぞ」としつこく繰り返した。この強引さには勝てたことがない。

「分かったよ。伝えりゃいいんだろ。伝えた後で春美が実際に連絡を取るかどうかは俺の知ったこっちゃないからな」

突き放すように言い捨てると和馬は「分かってるよ」と元気なく呟いた。その元気のなさに透は一つのことに思い至った。

和馬は本気なのだ。本気で春美のことを愛してしまったのだ。そして春美と連絡を取る策が本当に見当たらないのだろう。困惑している和馬の顔が目に浮かぶ。透は和馬に同情している自分に驚いていた。今まで和馬が何かに失敗したことがあったとき自業自得だと蔑むことはあっても和馬の気持ちになって考えたことなど一度もなかった。ところが今は何とか和馬の力になってやりたいと思っている。それは今、自分が精神的に満ち足りているからなのだと思った。千春との出会いをきっかけに透の中で明らかに何かが変わり始めている。

「なあ、透」

「今度は何？」

「人妻と結婚するのって難しいのか？」

透は返す言葉を失った。春美と連絡を取れない状況に和馬は疲弊

しきっている。
　透が何とか励まそうと口を開いたときには電話は切れていた。一方的に会話を終わらせるやり方はいつもの和馬だったが今日ばかりは透も怒る気になれなかった。
　気付けば千春は壁にもたれて再びスケッチブックの上で鉛筆を踊らせている。強く握り締めた鉛筆を武器としてまるで何かと戦っているかのように紙に挑んでいる。
「どうしてそんなに絵ばっかり描いてるんだ？」
　透は「絵が好きだからよ」というような千春らしい単純明快な答えを予想していたが、意外にも千春は鉛筆を止めゆっくりと一つひとつの言葉を紡ぎ出すように口にした。
「描いておきたいからかな。見たこと感じたこと思ったことを全部絵として残しておきたいの。私、馬鹿だからどんなに感動したことでも少しずつ忘れちゃう。だから、いつでも絵を見たらそれがどんな風景だったか、その風景を見てどんな感動をもらったか、どんなことを思ったかをほんの小さなことまで細大漏らさずパッと思い出せるように自分の手で描いておきたいの」
　口を閉ざした千春は自分が喋った言葉が文字となって目の前に浮かんでいるかのように中空を見据え、やがて満足そうに頷くと再びスケッチブックの世界に戻っていった。

13

三月十五日、金曜日。透は一年半ぶりに出勤した。

今日一日の疲れを考えて翌日が休みとなる金曜日を最初の出勤日に選んだのは景山教頭の配慮だった。

三年生はすでに卒業式を終えており通学してくる生徒は三分の二になっているが、それでも通勤通学の時間帯ははずしたかった。早朝七時三十分。この時刻ならほとんど学校関係者の誰にも顔を合わせることなく出勤することができた。

さすがに学校の敷地内に足を踏み入れたときには息ができないほど心臓が高鳴り、自分がここにいてはおかしいような、不法侵入をしているようなやましさに似た感じがして思わず早足になったが、誰もいない職員室に入ってしまうと少しずつ落ち着きを取り戻すことができた。

職員室の様子は変わっていなかった。透の机も以前あった場所にそのまま置いてあった。引き出しの中も拍子抜けするほど休職前と変化はなかった。

透はスーツの上着を脱ぎバケツに水を汲んで掃除を始めた。全員の机を拭いてまわり、窓を磨いて床を掃いた。そうこうしているうちに一人ずつ同僚たちが出勤してくる。

景山教頭から透の復職は前もって知らされているはずだが、誰もが透の存在を発見すると一様に驚きと困惑をない交ぜにしたような強張った笑顔で無言の会釈をしてくれた。茶を淹れて「また、よろしくお願いします」と差し出すと、ある人は「あ、どうも」と透の顔を見ることもなく小さな声で返事をするだけで、またある人は「一緒に頑張ろう！良く戻ってきたな！」と大きな手で透の華奢な背中を何度も叩いたりした。やがて出勤した景山教頭は透のことを見つけると小さく頷いて見せただけで教頭席に座った。透が湯気の立った湯飲みを持っていくと少し頬を緩めて「おはよう」と声を掛け

てくれた。
「ちょっと良いかな」
促されるままに応接セットに向かい合って座ると教頭の目に浮かんでいる厳めしい威厳に透は思わず身を縮めた。
「急なことだけど、昨日付けで片桐先生は退職しました。正確に言うと諭旨免職です」
「え？」
「今年の卒業生、君も知っている生徒だが、その子をを強請った上、怪我をさせてね。まあ、怪我と言うほど大げさなものではないんだがその子の父親も色々と力を持ったうるさい人だから我々も手を焼いたよ。方々に手を尽くして一応は手打ちとなったんだけど強請ったのは事実らしいし理事長の怒りはどうにも抑えようがなくて」
教頭の渋面に透は反射的に先日卒業したであろう山内のことを思い浮かべた。透の肩に火を放ったかもしれない山内とその山内を警察に突き出すべきだと今さら進言しに来た片桐。その二人の間に何があったかは聞きたくもないが、この学校に山内も片桐もいなくなったということは事実のようだ。そう思うと透は少し肩の力が抜けるようだった。正直言ってあの二人の顔はもう二度と見たくない。
「神谷先生」
「はい」
「初日からこんなこと言ってプレッシャーを与えるようで申し訳ないが、ゆっくりとはしていられなくなったんだ。今から片桐先生の代役を見つけることは難しい。四月からは神谷先生に新一年生のクラス担任になってもらうのでよろしく頼む」
深々と頭を下げる教頭の姿に透は全身にゾクゾクと寒気が走るのを感じた。鳥肌が立ち冷たい汗が脇から腰へ伝っていった。
しかし、それは一瞬のことだった。すぐさま千春の笑顔が脳裏に浮かび身体から震えを取り除いてくれた。根拠はないが何とかなるような気がしていた。椅子から腰を上げると透は軽い立ちくらみを覚えたがすぐさま席に戻ると教材を取り出し新年度の準備に取りか

かった。

14

夕方六時を過ぎてもクリニックはそれなりに混雑していた。さすがに座る場所もないほどの昼間の盛況振りとは比べようもないが、受付時間が終わるまで三十分を切っても「客」足は鈍らない。透と同じように会社帰りと思われるスーツの男性の姿もちらほら見えて、自分と同じような境遇の人が他にもいるということに少し救われるような気持ちになる。

それぞれ雑誌や仕事の資料などを眺めつつ順番を待っている彼らは皆、特に顔色が悪いわけでもびくびくと挙動不審なわけでもない。外見的に心身の疲労を思わせる特徴はなく、ビル街を颯爽と歩いているサラリーマンと何ら変わらない。しかし、ここにこうして座っているということは精神的な不調を自覚してそれを治療したいがために精神科医による診察を待っているということだ。彼らは努めて平然そうに振舞っているのだろうか。彼らの居住まいには何かを装っているような不自然さは見当たらない。

きっと今の姿が平生の形なのだと透は思う。つまり現代のビル街に勤務している普通のサラリーマンにとって精神疾患は珍しいものではなく、メンタルクリニックは世間一般に敷居の高い場所ではなくなってきているのではないのかもしれない。見た目に分かるほどの症状は出ていないが、本人にしてみれば自分の体調に違和感があってその原因を精神的なものと自覚している。そういう人が社会には意外に多く存在しているということなのだろう。

「神谷さん。神谷透さん。診察室にお入りください」

受付の女性に名前を呼ばれ立ち上がると近くに座っていたサラリーマン風の男性と目が合った。彼も雑誌を繰りながら自分の周囲を観察していたのだろう。彼の目には自分はどう映っていたのだろうか。また一人、特徴のない普通のサラリーマンが風邪のような心の病を少しこじらせて今から診察を受けるのだと思われているのだろ

うか。
　もしかすると自分は普通ではないが取り立てて特別ということでもないのかもしれないと透は感じていた。他人に言えない過去を持ち他人に見せられない傷を背負った社会から浮き上がった人間だと思っていたが、世間から見れば黒っぽい色のスーツに身を包んだ特徴のない大勢の現代人の一人として一般社会になじんでいるのかもしれない。そんなことを考えながら透は診察室のドアを開いた。
　椅子に座ると相変わらず医師はカルテらしき用紙に何かを書き込みながら顔を起こさずに診察を始めた。
「神谷さんね。どう？」
「・・・どう、って？」
　医師はいつものように曖昧な質問を放り投げてくる。
「先週から仕事に復帰したんだよね？出勤できてる？」
　医師はちらりとこちらを見てすぐに手元に視線を落とした。
「そうですね。まあ、なんとか」
　そう答えると医師は手元にすらすらと何やら書き込んでいく。ミミズの這ったような字で何が書いてあるのかはさっぱり分からない。
「やっぱり緊張した？それとも意外にすんなり？」
「緊張しましたね。みんなの目には自分がどう映ってるのか気になりましたし」
「周囲の人の接し方はどういう感じ？受け入れてくれてる？」
「冷たい感じはないですね。長期で休んでた僕をどう迎えたら良いか少しずつ探りながら距離を詰めていくみたいな」
「なるほど。一週間でその距離は縮まったかな？」
「そうですね。縮まってきてると思います」
「サポートもしてくれる？」
「それなりには。でも、年度末で忙しい時期なんで、みんな自分の仕事で精一杯っていうか」
「そっか。でもまあ、あんまり頑張り過ぎないように。ここが一番大事な時期だから」

言葉は優しいが目はカルテに落としたままで響きも軽い。見つめ合って励まされるよりも圧迫感がなくて楽なのは確かだが。
「食欲は？」
「まあまあ、あります」
「疲労感や倦怠感は？」
「仕事から帰るとどっと疲れますが、倦怠感はありません」
「眠れてる？」
「寝つきが良いわけじゃないですけど、まあ、なんとか」
「薬飲んでる？」
「飲んでますけど量は減らしてます」
「そう。それで悪化した感じはない？」
「今のところは」
「最近、自分の中でこれは変わったなって思うことはない？」
「変わったこと・・・。そうだなぁ・・・。そうだ。部屋のカーテンを、窓を毎朝開けるようになりました」
透がそう言うと医師は驚いたように顔を上げた。眼鏡の縁を押さえて透の顔を覗き込む。
「そう。それはいい。最近、すっかり春めいてきたからね」
医師は微かに笑って満足げに頷いた。
透は初めてこの医師から人間らしい表情を見たと思った。思わず釣られて透も微笑み返す。しかし、そのときにはすでに医師の視線はカルテに落ちていた。肩透かしを食らったような気分だった。
「薬、とりあえず同じ量出しとくね。飲み方は任せるよ。飲まなくて済むのならその方が良いけど、まだ飲んでおいた方が無難かな」
「分かりました」
「他に何か言っておきたいことはある？」
医師はカルテの上でペンを動かしながら口ではそう言った。顔も起こさないではこちらも何かを話そうという気にはなれない。
「特には」
「じゃあ、今日はこれでいいですよ」

医師の視線はもうこちらに戻ってくることはなかった。
透は少し憮然とした表情で腰を上げた。今後この医師との会話でこれ以上何かが良化するようには思えなかった。医師もそう思っているから素っ気無い態度を示すのだろうか。どちらにせよこの医師を必要としなくなる時期が近い将来来る。そう考えたとき透は決して不快ではない震えが走り全身に鳥肌が立つのを感じた。この予感は自信と呼べるものだと思った。回復への手応えというもの今初めて確固たるものとして体感した瞬間だった。

15

マンション前の道路から部屋を見上げると窓から漏れているはずの灯りが見えなかった。千春はどこかに行っているのだろうか。クリニックに寄るから少し遅くなると今朝伝えたときは「ご飯作って待ってる」と言っていたのだが。

階段を上がりドアの前に立って耳を欹てみる。しかし、部屋の中からは物音一つ聞こえてこない。鍵を差し込んでドアを開ける。そこは真っ暗な世界で懐かしくも寂しい感じがした。つい数ヶ月前まではこの暗さを平然と受け入れていたのに、今は室温のせいだけではない得体のしれない冷たい雰囲気が床を這っているのを感じて軽い不安に襲われた。

千春はどこに行ったのだろう。買い忘れを思い出してスーパーに走ったのだろうか。しかし部屋の空気の冷え切りようはその考えを否定させる。急な用事で誰かに呼び出されたのだろうか。それなら透の携帯電話に連絡してくるはずだ。だとすれば千春はどこへ。まさか、事故に？

透は何かに急き立てられるように慌てて靴を脱ぎ部屋に上がって電気を点けた。千春が何かメモでも残していないかと部屋の中を見渡す。

寝ぼけたような唸り声がしてもぞもぞとベッドの上で何かが動いている。千春が眩しそうに顔を顰めながら目をこすっている。

「なんだ、寝てたのか」

驚かすなよ、と透はコートを着込んだまま床に座り込んだ。

「んんー。ごめん。私、寝ちゃってた」

千春は大きく欠伸をしたかと思うと寝返りを打ち蛍光灯に背を向けて再び動かなくなった。

「どうしたんだよ、こんな時間に寝てるなんて。熱でもあるのか？」

透は立ち上がってクローゼットを開いた。ハンガーにコートを掛

けた。薬箱を取り出しクリニックで受け取ってきた薬を補充しようとして透は何となく違和感を覚えた。箱の中の薬の量が減っているような気がしたのだ。ここのところ服薬する量を減らしているのでもう少し残っていても良いように思える。気のせいだろうか。

「千春」

「・・・ふぁい。今起きまふぅ」

ワンテンポ遅れてつかみどころのない返事が返ってくる。そのとき鞄の中で透の携帯が振動し始めた。慌てて鞄を手繰り寄せ中から電話を取り出す。画面に表示された電話番号は登録されていないものだった。直感的に春美の顔が脳裏に浮かんだ。

「春美さんか」

「あらぁ、千春ちゃんの愛しのお兄さま。千春ちゃんは今いるぅ？」

春美までもが舌が回らない感じで喋っている。こちらは寝ぼけているのではなく、どうやら酔っ払っているようだった。鼻から抜ける息の荒さが電話越しにも分かる。

傍らで千春が漸く身体を起こした。もぞもぞとベッドから降り、そのままキッチンに向かう。喉が渇くのかコップに水を注いでぐいぐい飲みだした。

「千春は今、お取り込み中みたいだよ。千春に何か用？」

「千春ちゃんと一緒に飲みたいなぁって思って。丁度良いや。あんたも一緒に飲まない？」

先日電話で聞いた和馬の憔悴した声を思い出す。春美に実は夫がいて、しかも連絡がとれなくなったことにあの能天気な和馬が打ちひしがれている。そう思うと春美には春美の事情があるのだろうとは分かっていながらも弟として言いたいことが溢れてくる。

「その様子はもう飲んでるんでしょ。いつから飲んでるの？今日は旦那さんはいないの？」

「うるさいわねぇ。頼んでもないのに夫の話なんかしないでくれるぅ？やっぱりあんたなんか来なくて良いわ。千春ちゃんだけうちに来るように伝えて」

「うちに来るようにって言ったって場所分かんないでしょ」
「お生憎様。あんたは知らないかもしんないけど、千春ちゃんと私は飲み友達なんですからねー。二人っきりで差しつ差されつ飲んだことあるんだから」
勝ち誇ったように春美が言う。通話口を抑えて透が確認すると流しの前で千春はこくりと小さく頷きまるで浮気を白状するかのごとく眉を曇らせて「一度だけ」と申し訳なさそうに人差し指を一本立てた。いつの間に、と思ったが取りあえず電話に戻る。
「そんなことより、兄貴が連絡欲しいってさ。実際に連絡するのは春美さんの勝手だけど、俺は今間違いなく伝えたからね」
「聞こえませーん。あー、聞こえない聞こえない。伝えたいことがあるならこ・・・」
「ん？伝えたいことがあるなら何だって？・・・春美さん？」
呼びかけても応答がない。電話はつながったままだ。
「どうかしたの？」
眠気覚ましに洗っていたのか水に濡れた顔をタオルで拭きながら千春が怪訝な表情で首を傾げる。
「なんだか春美さんが突然喋らなくなっちまったんだ。電話は切れてないんだけど」
そう言って透は再び春美に呼びかけた。すると電話口に春美が戻ってきた気配がした。
「・・・すごく気持ち悪い。お願い。とにかく来て」
「ちょっと待ってよ。ねぇ、春美さん。あれ？」
電話に出たかと思うと春美は一方的に切っていた。ツーツーと不通を示す音が空しく耳に響く。
「なんだよ、あいつ」
思わず舌打ちをする。和馬と春美は似た者同士だ。
「春美さん、どうしたの？」
「気持ち悪いから来てくれってさ。飲みすぎなんだよ」
透は付き合っていられないという顔で携帯電話をコタツの上に放

り投げ先ほどまで千春が眠っていたベッドにスーツ姿のまま倒れこむように雪崩れ込んだ。千春の温もりが頬に優しい。目を閉じると急に睡魔が近づいてくる。だらけ切った身体を急に社会生活に放り込んだためかここのところ部屋に戻ると眠たくて仕方がない。身体が深くベッドに沈みこみ鉛のように重く感じる。気を抜けばこのまま意識を失ってしまいそうだった。

ふと目の前が暗くなった感じがした。

「行こうよ」

瞼をこじ開けると千春が目の前に立っていて透を見下ろしていた。逆光になってその表情はよく分からないが冗談を言っているような様子ではなかった。

「行くってどこに？」

「もちろん春美さんの部屋よ」

「何でだよ。あんな酔っ払い相手にする必要ないって」

「この前、春美さんすごくまいってた。きっと誰かそばにいて欲しいんだよ」

「そんなの俺たちの役目じゃねぇだろ。それよりメシにしてくれよ。腹減った」

透は寝返りを打って千春に背を向けた。その拍子にきゅるきゅると腹が鳴った。口に出すまでは意識していなかったが気がつくと空腹感は耐え難いレベルに達していた。そういえば忙しさにかまけて昼もろくすっぽ食べていない。何でも良いから胃に詰めなければこの部屋からは一歩も外に出ることはできそうにない。

諦めたのか千春は透から遠ざかっていった。きっと千春はてきぱきと素早く料理をこしらえてくれるだろう。千春の料理はなかなかのものだ。彼女の手料理が毎日の透の疲れを癒してくれている。

「はい。早くこれ食べて。食べ終わったら春美さんのところに行くから」

予想外の早さだった。千春が台所に行ってからまだ一分と経っていない。いくらなんでも、と驚きと共に振り返ってみて透は納得し

た。千春が手にしていたのは蓋の隙間から湯気が立ち上っているカップ麺だった。千春は透に有無を言わせずカップ麺をコタツの上に置くと矢庭に着替え始めた。

これ以上何を言っても無駄だと透は悟った。笑顔を絶やさない千春ではあるが言い出したら聞かない頑固さを持っていることを透は知っていた。透はカップ麺の蓋を剥ぎ取りまだかたさの残る麺に箸を突き刺しほぐすようにして掻き混ぜた。

「千春は食べないのか？」

「うん。いらない」

千春に遠慮することなくスープを一口吸うともう止められなかった。透は息をするのも惜しんで麺を次から次へと啜り上げた。

「ほういへば。あの人の部屋って場所分かるのか？」

「一度だけだけど行ったことあるし、そのときのメモも残ってるから大丈夫だと思う。大通りに出てタクシーつかまえよ」

着替えを済ませた千春は化粧ポーチを引き寄せると眉毛を描き、口紅を引いた。千春の化粧は普段からこの程度のシンプルなもので、ごたごたと塗りたくるようなことはしない。気がつけば千春は髪を梳き終わって苛立たしげにこちらを睨みつけていた。トントントンと足の爪先で床を叩くと「追いかけてきて」と千春は玄関に向かった。

「ちょっと、待てよ」

ラーメンを啜りながら千春の背を追うと千春は靴を履き透を振り返ることなくドアを開けた。新芽がほころび出したとは言え風が吹けば時折肌を刺すような冷たさを感じる三月の夜に躊躇なく飛び出していく。透は慌てて遮二無二ラーメンを掻きこみ戸締りもそこそこに千春の姿を追った。

千春を追って大通りまで出ると彼女はタクシーに乗り込むところだった。物を食べた後に急に走ったので横腹が痛い。しかし千春はお構いなしに運転手に行き先を告げている。透はやっとの思いでタクシーにすがりつくように千春の横に腰を滑らせて乗り込んだ。

「何もそんなに急ぐことないだろ」
タクシーが動き出しほっと息を撫で下ろしてみると今度はふつふつと怒りらしきものがこみ上げてきて透は千春の横顔を見た。前を走る車のテールライトに赤く浮かび上がる千春は前のめりの姿勢で真剣な眼差しを真っ直ぐ前に向け下唇を噛んでいる。まるで祈りを捧げるように両手を組んで顎に押し当ててた。
「約束したのよ」
「何を」
「お互い助け合おうって」
「そんな大げさな」
透は小さく笑った。春美は単に退屈しのぎに呼んだに違いないと透は思っていた。約束だの助け合うだのというような高尚な問題ではないだろう。
「私にとって春美さんは唯一の友達なのよ」
少し気色ばみ今にも泣き出しそうな潤んだ声で千春は言った。
透は何も言えなくなった。千春にとって春美がどういう存在なのか想像がつかなかった。透の知らないところで千春と春美は強靭な心の結びつきを構築しているようだった。少なくとも先ほどの電話を耳に挟んだだけで千春は涙が出るほど春美のことを心配している。
透は置いてけぼりを食らったような唖然とした気分ですぐ隣の千春の横顔を遠くに見つめた。
彼女は何か不吉なことを予知してしまったかのような思いつめた表情だった。
自分は傲慢だったと透は理解した。彼女の秘密中の秘密である右胸の手術痕を目にし、自分の腕に組み敷いて何度も交わったことで目の前の女の全てを知っているような気になっていたがそれは全くの誤りだった。まだ千春という人間の薄皮一枚程度の上っ面しか見えていないのだと透は自分の浅はかさに打ちのめされたような気分でシートにぐったりと身を委ねる。無理やり詰め込んだカップ麺が胃の中で暴れているためか少し気持ち悪いのを我慢しながらぼんや

りと窓の外を眺めていた。
辿り着いたのは閑静で高級感の漂う住宅街だった。タクシーのエンジン音が遠ざかるとあたりは深い静寂に包まれ千春に話しかけるのにも気を遣う。千春が指差したのは振り仰ぐと首がつらくなるほどの高層マンションだった。透がその豪奢な造りに圧倒されている傍らを千春は堂々とエントランスに向かって歩いていく。重々しく開く自動ドアの向こうに消えていった千春を慌てて追いかける。
二人が足を踏み入れたエントランスホールは「何のために？」と問いかけたくなるほど広い。中央に幾つかのボタンの付いた台座がポツンと立っている。左右の壁には監視用カメラがその台座に向けて設置されていた。ホール右奥にはいかにも排他的な重厚感のあるガラス扉が二人の行く手を遮っていた。
千春は臆することなく台座に向かいボタンを押し始めた。やがてピンポーンと呼び鈴の音が聞こえてきた。どうやら春美の部屋を呼び出しているらしい。しかしその後は何の反応もない。
「どうした？」
「呼び出しても出ないわ」
千春はもう一度ボタンを操作し春美の部屋に呼びかけた。しかし呼び鈴が空しく響くだけで誰も応答してはくれない。
そのとき背後の自動ドアが開き、いかにも高級そうな光沢のある黒いコートに身を包み淡い色のサングラスをした男がホールに入ってきた。こちらを威嚇するようにコツコツと革靴の踵で床を鳴らしてやってくる。年齢は透と十歳と離れていないように見えるがその持っている周囲を圧倒するような雰囲気はすでに風格と呼べる落ち着きのあるものだった。彼のオーラに気圧されるように透と千春はじりじりと脇に退いた。男は少しサングラスをずらすと胡乱な不審者を蔑み忌避するようにこちらを睥睨し、その視線をまともに受けた透は思わず息を詰めた。彼はフンと鼻を鳴らすとズボンのポケットから金色に輝く鍵を取り出し鍵穴に差し込んでボタンをいくつか操作した。ホール右奥のガラス扉から鍵が開く音が聞こえる。男は

もう透と千春には何の興味も示すことなくその扉を開いて奥へと消えていった。すぐに鍵が閉まる音がして透は金縛りから解き放たれたように呼吸を取り戻した。
「どうすんだよ、千春。春美が開けてくれないと夜が明けてもここに突っ立ってることになるぞ」
先ほどの男の他人への礼節のかけらも感じられない態度に今頃になって萌してきた苛立ちをぶつけるように透は台座をドンドンと叩いた。
千春はやれやれという顔でダッフルコートのポケットに手を突っ込み先ほどの男が持っていたのと同じ金色の鍵を取り出した。ゆっくりとした動作で鍵穴に差し込みボタンを操作する。すると、いとも簡単にガラスの扉の鍵が開いた。
合鍵を渡すほど春美は千春のことを信頼しているのかと透は改めて二人の関係に驚くとともに、それを千春から知らされていないことに拗ねたいような気持ちになる。仲間外れにされた疎外感にも似た感情だった。
「なんだよ千春、鍵持ってたのかよ」
「まあね」
「まあね、って、持ってるんならはじめから使えよ」
少し声が非難めいた色を帯びてしまう。しかし千春は頓着していない。
「お兄ちゃん、さっきの男の人にビビったんでしょ」
そう言って千春はいたずらっぽくニッと笑ったかと思うとガラス扉に向かって逃げるように駆けだした。
「お前よくも・・・」
馬鹿にしやがって。拳を振り上げて見せると千春は小さく悲鳴を上げてガラス扉を押し開けた。その仕草に怒りも薄れる。透も千春に続き、近くに見つけたエレベーターに乗って階を上がった。
十五階でエレベーターを降り、廊下の一番奥の部屋の前で千春は立ち止まった。

「ここ？」
千春は真剣な表情でこくりと頷きドア横の呼び鈴を押した。やはり反応はない。もう一度呼んでみて部屋からの反応がないことを確かめると千春は先ほどの鍵を使ってドアを開けた。
「春美さん？千春だよ。入るね」
奥に向かって声を掛ける。
部屋の中からは何の物音も返ってこない。
透と千春は玄関で靴を脱ぎフローリングの廊下を足音を忍ばせて歩いていった。突き当りの部屋から灯りが漏れている。その灯りに誘われるように二人は廊下の奥に足を踏み入れる。
ドアを開けるとそこはリビングだった。甘ったるい匂いが立ち込めている。菓子の袋、コンビニのおでんの容器やピザの箱などゴミが散乱して座る場所がないぐらいだった。キッチンのシンクには様々なアルコールの壜がひっくり返っている。甘い臭いはその辺りから漂ってくるようだった。
「ひどいな」
「お兄ちゃんの部屋も私が来る前はこんな感じだったけど？」
そう言われると返す言葉がない。透は千春から逃げるようにゴミの間をすり抜けて換気用の窓を開けた。普段味わうことのない海抜の高さの清浄な冷たい空気が流れ込み部屋の中の濁度と粘性の濃い澱みをやわらげていく。
振り返ると千春は隣の部屋を開けていた。
「千春さんいないわ」
「困った人だな。どこに行ったんだ」
二人は手分けをして春美を探した。
すぐに透はトイレの中で便器にもたれかかるようにして眠ってしまっている春美の背中を見つけた。顔を覗き込むと周囲に吐いたあとがあった。口の周りや髪の毛にも吐瀉物がこびりついている。饐えた匂いが鼻についた。
「春美さん。おい、春美さん」

肩を揺り動かし頬を叩いてみても春美は目を開かない。
透はとりあえずの処置としてトイレットペーパーで春美の顔の汚れを拭い取る。抱きかかえて近くで見る春美の顔は病人のそれだった。肌は粉を吹いたようにかさかさと荒れ、顔全体が血色悪くむくんでいる。たった二ヶ月程でこうも変わってしまうものかと透は驚いた。しかも良く見ると何かにぶつけたのか左の頬や口角の辺りが青黒く変色している。
千春を呼んでトイレ掃除を任せ春美を寝室に運び台所から濡れたタオルを持ってくると再度顔と髪を拭いた。
春美の身体から立ちのぼるアルコールの匂いは口からだけではない。アルコール中毒がどのようなものか具体的に知っているわけではないが、その一歩手前と言って良いのではないだろうか。病院の世話になる日も遠くないことは誰の目にも明らかだった。
春美のこの状態を知っていれば千春の先ほどの言動も理解できなくはない。誰かが支えてやらなくては春美一人の力ではもう立ち直れないところまできているようだ。彼女をここまで追い詰めたものは何なのか。和馬との別れか、夫との確執か。核心をうかがい知ることはできないが春美の深い苦悩がそこにあることだけは彼女の全身からにじみ出る懶惰な臭気から感じずにはいられない。
春美をベッドに寝かせたままリビングに戻ると千春はゴミを片付けていた。透も参加して手当たり次第ゴミを袋にまとめていく。ゴミ箱の周り、ソファの上、テーブルの下。部屋が少しずつ本来あるべき姿を取り戻していく様子は意外にも爽快だった。本来自分は掃除好きなのかもしれないと透は思った。
何とか格好のつくところまで片づけが終わり腰に疲れを感じてL字型のソファにどっかりと身体を委ねると千春が紅茶を淹れて持ってきてくれた。ゴミの臭いにいつの間にか慣れてしまっていた嗅覚に紅茶の自然で優しい芳香が心地よい。口に含むと程よい甘みと渋みが口の中に広がって身体全体の力が抜けていくようだった。
「春美さんの旦那さんは仕事が忙しくってこの部屋に帰ってくるの

は一月のうち二日ほどなんだって」
　千春はティーカップを両手で包み込むようにして持ち紅茶に話しかけるようにぼそぼそと語り出した。
　大手証券会社に勤務していた春美の夫は結婚当初から多忙だったが、いくら遅くても毎日春美のところに帰ってきていた。ところが、結婚二年目に会社を退職しネット系の証券会社を起業したあたりから次第に彼は外泊するようになった。スケジュールは多忙を極め講演等で各地方への出張も多く、また家に帰る時間がもったいないからという理由で職場に寝泊りすることも多くなった。春美はそれも仕方ないと愚痴を言うことなく毎日広い部屋で一人寂しく食事を済ませ風呂に入り就寝した。しかしあるときひょんなことから夫の浮気の証拠を見つけてしまい、そのとき何かが春美の中で音を立てて崩れてしまった。悔しくて悔しくて何でも良いからとにかく自分を壊してしまいたくなった。携帯電話の出会い系サイトを駆使し次から次へと男を漁り、かつて結婚当初「誰にも触らせたくない」と夫に言われた身体を大勢の男たちの前に晒してみせた。和馬もその男たちのうちの一人だった。
「春美さんは和馬のことをどう思ってるんだろう。やっぱり自分に群がる大勢の男たちの一人でしかないのかな」
「・・・そうじゃないみたい」
「じゃあ、特別な存在なんだ」
「うん。なんて言うかその・・・」千春は何故か言いにくそうに俯いた。見る見る首筋が赤くなっていく。「気持ち良いんだって。ものすごく」
「気持ち良いって・・・あれのこと？」
「そう。あれ」
「そんなに違うのか？」
「知らないわよ、そんなこと」
　透は思わず唸った。透にはまだ理解できない領域だった。和馬が他の男たちと何が違うのか。確かに経験は豊富だろうが、あの勝気

な春美がそこまで言うのだからおそらくそれだけでは説明できない何かがあるのだろう。
「じゃあ、身体だけの関係なんだけど特別な存在ってこと？」
「んー。身体が特別だからこそ身体だけじゃないみたい。春美さんが言うには、かずちゃんが他の人と何か違うことをしてくれるわけじゃないらしいの。同じことをするんだけど、かずちゃんの持ってる匂いとか繋いだ手の大きさとか重ねたときの肌の感じとか唇の厚さとかが春美さんにはびっくりするぐらい気持ち良いんだって。旦那さんともこんなにしっくりくることはなくて、で、こんなにしっくりくる人はこれから先の人生でももう二度と現れないだろうし、常にどこか身体を触れ合っていたいと思うらしいの。いつも傍にいたくて大切に思うんだって。春美さんは和ちゃんとの出会いは奇跡なのかもしれないって言ってた」
少しずつ口調が熱を帯びてくる千春の顔を見つめながら透は千春の身体を想った。まだ自分の身体との相性のようなものを推し量る余裕などなく、自分たちの関係が春美の言う奇跡の出会いなのかどうかは自信がなかった。そうであって欲しいと思うし千春と身体を合わせることは病み付きになるような快感なのだが、やはりいたって平凡な男と女の性交渉の域は超えられてはいないのではないか、と寂しいような切なさを覚える。
「二人ともここで何してんの？」
振り返ると部屋の灯りを眩しそうに目を瞬かせながら春美がリビングに入ってきた。幽界からこの世へ迷い込んでしまった死人のような顔色で眼下には見事にくまができていた。唇はプールから上がったばかりのような紫色で髪も油気を失いぼさぼさに広がっている。
「春美さんが呼んだから来てあげたんでしょ」
「私が？」
透の言葉に春美は考え込むような顔をしたかと思うと急に眉を顰め「イタタ」とこめかみの辺りに手をやりその場にしゃがみこんだ。
「春美さん、大丈夫？」

千春が慌てて駆け寄る。大丈夫よ、と春美は手で千春を制するが、一度しゃがみこむと一人ではなかなか立ち上がることができないようだった。その衰弱ぶりは今日の酒酔いだけが原因ではない。

「春美さん、ちゃんと食べてるの？」

こんなことをぽろっと口にしている自分に透は驚いた。しかし、今の春美の状況はつい先日までの自分と重なって見えてそれだけに透は黙ってはいられなかった。

千春が抱き起こすようにして春美を立ち上がらせソファに腰掛けさせる。

「春美さん、お腹空いたでしょ？今、おかゆつくるから待ってて」

「ありがとう」

ぼそぼそと声にならない声で春美が礼を言う。顔にかかる髪の隙間からあの青痣が垣間見える。

「もしかして、殴られた？」

キッチンに向かった千春の足が止まる。春美は慌てたように髪を掻き寄せ左頬を隠したが今さらと思ったのか諦めたようにため息をついた。

「離婚してって言ったらね・・・」

春美の言葉に千春は悔しさと悲しさが入り混じったような表情を浮かべたが何も言わなかった。透には千春の気持ちが理解できた。春美の行動から考えれば彼女には同情する気にもなれないが、そもそも春美の夫が浮気さえしなければこんなことにはならなかったはずなのだから一方的に殴るという法はない。入院一歩手前の不健康極まりない妻を殴るだけ殴ってほったらかしという態度も何か違う気がする。

突然春美の顎から手の甲へぽたぽたと滴が落ちていった。夏の夕立を思わせる粒の大きな涙は次から次へとこぼれていく。

「春美さん」

思わず透は腰を浮かせた。

「おっかしいなぁ。泣けてきちゃう。へへへ。ごめんね」

春美は指や掌で何度も何度も頬を拭うが伝い落ちる涙は止めどなかった。
泣いている春美は驚くほど小さく見えた。頬は窪んだようにやせこけ、首筋や腕の細さは戦時下の栄養失調の子供を連想させた。何とかしなければ春美は近いうち死んでしまうのではないか。身体の衰弱もさることながら精神面での消耗度合いもかなり激しいようだ。その生気を失いつつある顔は死神に魅入られたように思えてならない。
「和馬に連絡してみたら」
無責任な発言だということは透も十分理解していた。和馬と会うことで春美は余計につらい思いをすることになるかもしれない。しかし、このままでは春美は本当に死んでしまうのではないか。春美が最悪な結果を免れるには和馬に抱き締められてほんの僅かの時間でも安息を得るしかない。それ以外に助かる道はないように透には思えた。
「和馬も連絡待ってるよ」
透の言葉に千春が小さく頷いたのが視界の端に確認できた。千春も透と同じことを考えていたのだ。
「そりゃ、会いたいよ。でも・・・、怖いの。見つかったらまた殴られるわ。もう殴られるの嫌なの。怖いのよ。どうしようもなく怖いのよ。もう、私・・・いったいどうしたら良いの？」
春美は両手を顔に押し当てて大きな声をあげて泣き出した。反射的なスピードで千春が春美の傍に駆け寄る。千春に抱き締められて春美は幼子のように泣きじゃくった。水難者のように助けを求めすがり付いてくる春美を優しく包みながら千春は自分の力の無さを悔やむように下唇を噛締めていた。鍋が煮える音が寂しく部屋に響き出した。

16

昨晩から降り始めた雨は今日になっても止む気配を見せていない。激しくなる様子も収まりそうな気配も見せず、ただ同じ映像が繰り返し流れているように一定の強さで降り続けていた。彼岸後の一週間で長い間根をおろしていた寒さもあっという間に緩み一気に世界が彩り豊かに春めいてきたのだが今日は再び冬に逆戻りのような寒気が上空を支配していた。さすがに雪に変わることはないだろうが外に出れば手足の先に鈍痛をもたらすようなかじかむ寒さが全身に重くのしかかってくる。不意打ちのような天候の変化に芽吹き出した道々の草花も勇み足を反省するかのごとく頭を垂れているように見える。

「冷えるなぁ」

吐く息が白く濁り降りしきる雨に逆らうように中空に昇っていく。傘を差して歩き出すと雨音が耳に強く響いた。背後でコンコンと千春が乾いた咳をする。昨日までの好天が嘘のような寒さに風邪をひいてしまったのだろうか。咳は今朝起きたときから断続的に続いているようだ。

「大丈夫かよ？」

「ん？何が？」

「何がって・・・。風邪ひいたんじゃないのか？」

「大丈夫だよ。平気、平気」

千春は傘の角度を上げて透に微笑んで見せた。その笑顔に張りがないように見えるのは傘の影のせいだろうか。

「もうすぐだね」

「ん？何が？」

今度は透が訊ねる番だった。

湿気を多く含んだ冷たい風が吹きぬけ思わず首を竦める。千春は首に巻いたマフラーを口元まで引き上げた。雨が刺さるアスファル

トを見ながらとぼとぼと歩いた。
「もちろん、新学期よ」
透の胸に緊張が走る。背筋を這い登る寒気に思わず身体を震わせた。
「そうだな」
新学期が始まれば透は本格的に復帰する。先日復職してから今までの間はリハビリみたいなもので他の教師たちの裏方として働き生徒の前に出ることはほとんどなかったが、始業式が済めば他の教師たちと同じように授業を持つことになるし担任としてクラスをまとめていかなくてはならない。昨日教頭から正式に新入生のクラス担任を任せるという言葉があった。明日から新年度が始まるという三月三十一日の今日に至ってもまだ一年間やり通せる自信はなかった。ややもすると不安の虫に心を蝕まれて逃げ出したくなるのを何とか首の皮一枚のところで堪えているといった感じだった。
やってダメだったらしょうがないじゃん。千春がそう励ましてくれるたびに透は黙って頷いてはいたが、正直言ってそんな開き直った考えは持てていなかった。言うは易しという言葉がどうしても頭に浮かぶ。負担を軽くしようとしてくれているのは分かるしありがたいと思うのだが、定職に就いたことのない千春の言葉には知らない人間の無責任さが少し垣間見えるようだった。
「春美さん、ちょっと元気になったね」
二人は今出てきた透の部屋を振り返った。あそこに春美がいる。間もなく和馬もやってくることになっている。透の部屋でほぼ一ヶ月ぶりに二人は密やかに再会するのだ。
お互いの部屋でもなく良く使っていたラブホテルでもなく、そして誰にも邪魔されない場所。大事な再会の場として春美が透の部屋を選んだのはそういうことのようだった。そこで二人がどういう会話をし、どのような結論を見出すかは透には分からない。このまま二人で駆け落ちするかもしれないし、話し合った結果二人が出会う以前の生活に戻ることになるかもしれない。しかし、千春が言うよ

うに今日の春美は少し気力を取り戻しているように見えた。少なくとも死を連想させるような顔色からは脱していた。和馬に会えるという事実。ただそれだけでも彼女の裡に僅かながら残っていた生きる力は息を吹き返したのだろう。

一台のタクシーが近づいてきて透たちの前で止まった。傘を開いて中から出てきたのは予想通り和馬だった。しかし、和馬の姿を見て透と千春は驚きの声を上げた。和馬の芝のように緑色だった髪は黒く染められしかも柔道の選手のように短く刈りそろえられていた。全く、いつも和馬には驚かされる。

「おっす。今日はありがとうな」

二人の前に現れた和馬は柄にもなく少し緊張しているように見えた。表情が強張っているように見えるのは低い気温のせいではないだろう。何と言っても会って早々礼を口にするところが和馬らしくない。

「かずちゃん、初恋の人と会うみたいな顔してるよ。短い髪のせいか少し幼くなったみたい」

千春が和馬の脇腹を突付くような素振りで冷やかすと漸く和馬も表情を緩めた。恥かしそうに短く刈った自分の頭を撫でている。

「自分でもびっくりするよ。女と会うことがこんなに緊張するなんてな。少しは晩生の透の気持ちも分かる気がする」

「相変わらず、一言多いんだよ。で、どうするつもりなんだ?」

春美と結婚したいという気持ちは変わっていないのだろうか。今日ここに来たということは春美を迎えにきたということなのだろうが相手が和馬だけに最後の最後のところで信用できないでいた。春美のことを救うのは和馬の真摯で熱い想いしかないと透は考えていた。今日の話し合いの結果和馬と春美がどういう答えを出すかは別にして、この気の多い和馬が真剣に春美と結婚したいと思っている、それぐらい愛しているということを春美が知ればもう一度彼女の心に生き続けるための自信が備わってくるに違いない。

「俺は、春美を幸せにするよ。そのためにここに来たんだ」

和馬は力強く言ってのけた。今日ほど真剣な眼差しをしている兄を透は見たことがなかった。彼の言葉をこんなにすんなりと信用できたのは初めてのことだった。今の和馬ならきっと春美を幸せにする。無条件にそう思わせる逞しさが和馬の全身から滲み出ていた。これなら春美も安心して和馬の胸元に飛び込んでいけるだろう。

「格好良すぎるぞ」聞き慣れない愛の言葉にこちらが恥かしくなってしまう。「俺たちあそこの喫茶店で待ってるからごゆっくり。結論が出たら教えてくれ」

立ち去ろうとする透に向かって和馬が右手を差し出した。

「今回は本当に感謝してる。俺たちがうまくいったらお前と千春ちゃんのおかげだ」

「気持ち悪いこと言うなよ」

透は照れながら和馬の右手に応じた。冷雨に濡れたその手は想像した以上に厚く熱いものだった。この手ならどんなときも春美を離さないでいられるだろう。

透の手を離した和馬は千春にも同様に握手を求めた。千春もにっこりと笑って和馬の手を握り返す。

「千春ちゃんも幸せになってな。ちょっと痩せたみたいだけど無理しちゃだめだよ」

和馬と千春が一瞬黙って見詰め合う。千春がこくりと頷くと和馬は「じゃあな」と透に別れを告げ透の部屋に向かった。

雨が和馬の傘に降り注ぐ。今の春美と和馬には春めいた陽気よりも今日のような雨の方が似合っている。二人は雨音が響く静かな部屋の中で焦らずゆっくりと結論に辿り着くだろう。

「かずちゃん、泣かせるね」

千春は感極まったように目を潤ませた。その千春を見ていると透の胸にも熱くこみ上げてくるものがある。鼻を啜りながら歩き出すと背後から和馬がマンションの階段を駆け上がる音が聞こえてきた。やがてドアが開きすぐに閉まる。その音がどことなく平和な温もりを感じさせるようで透と千春はにっこり微笑み合いながらアドゥマ

ンに向かった。
アドゥマンは相変わらず空いていた。いるのはいつものカウンターに陣取る白髪の男性だけ。彼は毎度おなじみの笑顔で透と千春に会釈をしてくれた。千春がにっこりと笑って頭を下げると彼はもう一度同じようにお辞儀した。マスターはその様子に何の反応も示すことなくただ一言「いらっしゃい」と呟いたきりでこちらに目も合わせようとはしなかった。
透はいつもの奥の席に千春を導いて腰掛けた。マスターが仕事だから仕方なくという顔つきで注文を取りにくる。無造作に差し出されたおしぼりの熱さに生き返る心地がした。
「俺はホットコーヒー。千春は？」
「んー、何にしようかな」千春は決めかねるという顔つきでメニューを上から下へ何往復も眺めた。「何がおいしいですか？」
困惑顔で千春がマスターに問いかけるのを見て透はドキッとした。強面で愛想無しのマスターが「いらっしゃい」以外に口を動かしたところを見たことがない。マスターがどう受け答えるか興味もあるが何か空恐ろしい感じもする。開けてはいけないと言われたドアを開けた時のように。
「何でも」
マスターは表情一つ変えず目の前をうろつく羽虫を手で追い払うように一言呟いただけだった。
「何でも？」
千春はさらに困った顔になってメニューとマスターの顔を交互に見た。しかしマスターもそれ以上は何も言うつもりはないらしい。ひたすら銅像のように突っ立ち口を真一文字につぐんで千春の注文を待っている。
二人の噛み合わないやり取りに気が気でなくなり「ホットコーヒーにしておけよ」と透が口を開こうとした瞬間、カウンターの方から救いの声が届いた。
「シナモンティーがお勧めですよ、お嬢さん。香りがすごく良いし

身体が温まる」
白髪の男性ににこやかに礼を言って千春はシナモンティーを注文した。マスターは復唱することもせずに相変わらずの仏頂面でカウンターに戻っていった。
何とか注文が無事済んだところで透はずっと気にかかっていたことを千春に尋ねた。和馬と春美が結論を出すまでの限られた時間だから訊けることがある。今を逃せば再びこのことを口にするのは難しい気がしていた。透は声を潜めた。
「蒸し返すようだけどさ」
千春が怪訝そうに透に顔を近づける。
「何？」
「本当のところは、あの夜俺たちは何もなかったってことなんだよな？」
二人にとって「あの夜」とは昨年の大晦日の晩のことしかない。千春はあの日二人は「関係を持った」と言うが、９９％それは嘘だと透は思っていた。千春が透の部屋に住みつきたいがために少し言辞を弄したのだろうと。たとえ真っ暗がりの中でいくら酔った勢いがあったとしても自分が他人の目の前に火傷の痕だらけの醜い裸を晒すことなど考えられなかったし、千春が決死の覚悟で乳房のない右胸を露わにしたのならその感覚を覚えていないような不義理な自分でありたくはない。しかし、透は千春と初めて交わったのはこのアドゥマンで教頭に年度末での退職を示唆されたことを千春に告げて口論になった直後のつもりなのだが、千春はそのときあまり痛がるそぶりを見せなかったし、血も出なかった。破瓜の痛みや出血の程度は人それぞれと言うからそれでも不思議ではないのかもしれないが、透はそこに引っかかりを覚えて残りの１％を埋められないでいるのだ。かと言って透が初めての男だという千春の言葉は絶対に嘘であってほしくはない。
「ワタシ、ニホンゴ、ワカリーマセン」
千春は欧米人のように手を広げ首を竦めて見せる。

「おいおい」
「何もないはずないじゃない。若い男と女が酒に酔って一つのベッドに入ったのよ。それだけでも十分『何か』よ」
千春は澄ました顔で突き放すように言う。
「そういうことじゃなくてさ。俺が言ってるのは、つまり・・・」
「お兄ちゃんに何されたかなんて言えないわ。恥かしい」
「いやらしい言い方するなよ」
透が窘めるように言うと千春は心外だと目を大きく見開いて、すぐにくすくすと笑い出した。
青みがかった大きな瞳。栗毛色の長いストレートヘアー。肌理の細かい白く輝く肌。西洋人の大人っぽさと東洋人の幼さが同居している美しい顔立ち。
千春を正面に見つめながら透は三ヶ月前を振り返った。今思えばあの日あの時自分は一目惚れしていたのかもしれない。最近透はよくそう思うのだった。そうでなければやはり無理やりにでも彼女を部屋から叩き出していたはずだ。そうしなかったのはつまるところただ単に好きになった千春に傍にいてほしかっただけということになるのか。
千春は黙ったままただじっと見つめてくる透に「何よ」と訝しげな様子だったが、それでもやめない透の目を逆に覗き込むように真っ直ぐな視線を送ってきた。視線が絡み合うと透は千春への愛しさがさらに胸に迫るようで、ずっとこうしていられたらと思わずにはいられなかった。
「おやぁ、火事ですかね」
白髪の男性が窓の外を指差している。火事とは似つかわしくない、まるで鶯を見つけたときのような長閑な声だった。
釣られて外に目をやる。水墨画のようなモノトーンの冬の景色にもうもうと禍々しい黒煙が立ち上っている。煙の方角に向かって窓の外を人が走っていく。野次馬の一人が何が嬉しいのか楽しそうに「火事だ、火事だ」と跳びはねている。すぐにサイレンの音が聞こ

えてきた。
「お兄ちゃん！あれって」
透は一瞬千春と見つめあうとすぐさま駆け出していた。千春を置き去りにしてマスターに詫びる暇もなく透は分厚い扉を弾き飛ばすように押し開け傘も差さずに道路に飛び出した。雨が顔に降りかかる。しかしその冷たさを感じる余裕は透にはなかった。
走りながら透には確信めいた予感があった。燃えているのは自分のマンションではないか。しかも自分の部屋で。透の脳裏を「無理心中」という文字が占拠して離れない。和馬と春美の顔が交互に透の眼前に浮かんでは消えていく。
火事現場の付近には既に十重二十重の人垣ができているのが見える。透を追い越した二台のパトカーがクラクションを鳴らして人と傘の波を押し分けて行った。人垣に取り付き僅かな隙間から出火場所を確認する。家々の影に隠れてはいるが、やはり思ったとおり透のマンションから煙が立ち昇っているようだった。
透はその景色に胸を深く抉られ足元から力が抜けるのを感じた。和馬と春美が黒煙と共に空へ消えていってしまう錯覚がそこに見えた。
透はその場に座り込みたくなるのをこらえて人を押し分けて行った。「すいません、通してください」と言いながら強引に人垣を抜ける。そこには白いカッパに身を包んだ二人の警察官がテープを張り巡らせて野次馬を現場から遠ざけていた。
そこまで近づいても手前の家に隠れてはっきりとは分からないが透の部屋のあたりから黒煙が上がっているように見える。あの不吉な煙の下で今まさに和馬と春美が燃え盛る炎に巻かれているのかもしれない。
「通してください。僕の部屋なんです。燃えてるのは僕の部屋なんです」
透の言葉にぎょっとした顔で二人の警察官が顔を見合わせる。そのとき野次馬の一人が素っ頓狂な声で指を差した。

「あっ、あいつが犯人なんじゃねぇか」
警察官の間から奥を見ると黒い煤に顔を汚したスーツ姿の男性が両脇を警察官に抱え上げられてパトカーに押し込まれるところだった。知らない顔だったが透はそれが誰だか分かったような気がした。春美の夫に違いなかった。となると無理心中ではなく放火だったのか。
道路の反対側から消防車が二台現場に進入してきた。すぐさま放水が始まり雨の中をマンションから逃げ出してくる人の姿も確認できた。
「お兄ちゃん！」振り返ると雨に濡れそぼった千春が人垣を分けて姿を現した。「やっぱり、うちなの？」
「多分」
透が頷くと眉間を曇らせて千春は寒そうに身体を縮めた。肩を揺らして激しく咳をする。このままでは千春が本格的に風邪をひいてしまいそうだ。
透はもう一度警察官に向かって叫んだ。
「通してください！僕の部屋が燃えてるんだ。中に兄がいるんです！」
それでも警察官は「危険ですから」と道を空けてはくれなかった。透が強引に身を乗り出すと警察官は二人して執拗に透の前に立ちはだかった。その警察官の脇を小走りに千春がすり抜けて行く。
「千春！」
追いかけようと駆け出す透の身体を二人の警察官が押し留める。
「危険ですから！」
「千春！千春っ！」
透の目の前でマンションの敷地に走りこもうとした千春がパトカーから降りてきた警察官に捕まった。
「君っ！危ないだろ。離れなさい！」
さらにもう一人の警察官がパトカーから駆け出してきて千春を背後から抱きすくめようとする。

「離して！離してっ！燃えちゃうの！」警察官の腕の中で手足をばたつかせ狂ったように泣き叫ぶ千春が透に救いを求めるように振り返った。「お兄ちゃん！燃えちゃう！燃えちゃうのよ！」
「千春っ！」
「ベッドの下にプレゼントのスーツがあるんだから！あれを着てもう一度教壇に立つんだからっ！」
千春は髪を振り乱しあらん限りの声を振り絞って泣き叫んでいた。
「千春・・・」
透の顔に冷たい雨が降り注ぐ。しかし透の頬を濡らすのは雨だけではなかった。

17

あたりにはまだ火事の影響による鼻を刺すような刺激臭が残っている。黒く焼け焦げたドアの前に立って初めて透は火に対する積年の恐怖心にからめとられて身体を竦ませた。

不思議なことに黒煙を見つけた瞬間は火事に対して臆するところはなかった。燃え盛る炎を直に見ていなかったからだろうか。ただひたすら和馬と春美のことを心配して走り出していた。野次馬の間を潜り抜けマンションに目と鼻の先というところまで辿りついても火の赤さを目にすることはなかった。

結局、透と千春の行く手を制止した警察官が道を通してくれたのは消防車からの放水で鎮火された後だった。しかし今焼け跡の残る現場に立ってみると見てもいないのにまるで実際に目の当たりにした光景のように猛り狂って逆巻く炎のイメージが網膜を熱く焦がして消し去ることができない。

震える手で鍵を回しドアノブに指で触れる。指の腹にざらついた感触があって思わず手を引っ込めた。黒い煤が掌に微かに付着しているのを見つけ透はこみ上げてくる吐き気に身を屈めた。このドアの向こうにあるはずのない巨大な炎の揺らぎを思い描いて自分の顔から血の気が引いて行くのが分かる。しかし顔以外の身体の表面は今まさに業火に炙られているかのようにじりじりと熱く全身から噴き出す汗が止まらない。透は一旦ドアから目を離し真っ黒な夜空から降り注ぐ雨を見つめた。

雨は午後九時を回って少し弱まっていたが相変わらずいつ降り止むとも知れず一定の強さで降っていた。今朝春美がやってきたときも、火事騒ぎで人だかりになったときも、警察署でぼんやりと窓の外を眺めていたときも、そして今も全てを洗い流すように雨は降り続いている。

事件関係者ということで和馬と春美だけでなく透と千春も部屋に

入ることを許されないまま警察署に同行を求められ延々と何度も同じ説明をさせられて漸く先ほど帰宅を認められたのだった。

火事は灯油を撒いた上での放火で犯人は透の想像した通り春美の夫だった。彼は最近探偵を雇って春美を監視していたらしい。春美が透の部屋に入っていったことを探偵から知らされた彼は車で駆けつけた。そのとき和馬が部屋に入っていくのを見つけて逆上した彼は近くのガソリンスタンドで灯油を購入しマンションに戻ってきて部屋の周囲に撒き散らし火を放ったということらしい。はじめから灯油を持ち運ぶためのポリタンクを用意していたらしく警察は衝動的ではなく計画的な放火殺人未遂としての立件を視野に入れているようだ。

事件当時ドアの外の異常に気付いた和馬と春美はすぐにベランダに避難しており、そのまま消防車に救出されたので幸運にも二人とも火傷一つすることなかった。ドアの周辺に撒かれた灯油は勢い良く燃えドアや外壁をおびただしく焼け焦げたが朝から降っていた雨のおかげもあってマンション全体に燃え広がることはなかったようだ。「さすがに部屋の玄関は水浸しでしたけど奥の方は大丈夫だと思いますよ」と現場検証を終えた刑事が署で教えてくれたことを思い出して透は少しでも落ち着きを取り戻そうと自分に言い聞かせた。

千春は今傍にはいない。和馬と春美は結局透の部屋ではほとんど会話らしい会話をできず仕舞いだったが、さすがに事情徴収を終えたばかりの今から話し合いをすることは春美の疲れ具合がからも不可能でひとまず別の日に仕切りなおしということになった。春美が夫と過ごした部屋に帰る気にはなれず、どこかホテルに部屋を取ると言い出したので透は千春に春美に付き添ってやるようにと言った。千春は透の提案に一度は顔を曇らせた。透一人で火事の起きた部屋に帰ることをどうしても不安に思ったのだろう。しかし透は自分よりも春美の方が今は千春の力を必要としていると感じていた。透の提案に春美は内心ほっとしている様子が見て取れた。「千春ちゃんが春美に付き添ってくれるなら俺がお前と一緒に帰ってやろうか」

と和馬が言い出したのは透は即刻却下した。
「お兄ちゃんはもう大丈夫だよ」千春は透の両手を握り締めいつになく思いつめたような表情で透を見つめた。「離れててもいつでも傍で応援してる」
「あ、ああ」
千春の目の力強さに透は気圧された。千春の全身から悲壮感のようなものが立ち上っている気がしてならない。
「私も大丈夫だから」
「何言ってんだよ」
まるで死地に赴く兵士を見送るような様子の千春に大げさだよと笑い、和馬に冷やかされる前に透は手を振って帰途についたのだった。
透は雨に手を伸ばして指についた煤を洗った。ポケットからハンカチを取り出し手を拭く。意を決してドアに向き直り、手にしたハンカチでドアノブを包みゆっくりとドアを開いた。
暗闇の向こうに手を伸ばしスイッチで灯りをつける。
浮かび上がった部屋の内部は拍子抜けするほどいつもどおりだった。水に濡れている部分は見当たらず「軽く掃除も済ませておいたよ」と刑事が言っていたのを思い出す。靴を脱いで部屋に上がろうとしたそのキッチンの床に踵の一部分と思われる黒い靴跡を見つけ透は持っていたハンカチで丁寧に拭った。掃除をしてくれたとありがたく思っていたがそれは間違いだった。そうでもしなければここは靴跡だらけだったに違いない。刑事たちは土足でここを歩き回ったのだ、と思うと微かに怒りがこみ上げてくる。
玄関に屈みこんでいる透の首筋を冷たい風が通り抜けて行った。次の瞬間背後でドアが叩きつけられたように閉まる音がした。風の流れた先を見ると街灯の淡い光にカーテンが揺らめいている。春美と和馬がこの部屋から脱した時からそのままだったのだろう。ベランダに出るサッシ窓が開いていた。
不意に元日の目覚めを思い出す。あの窓を思い切り良く開き太陽

の光を真正面に浴びていた千春。まるで内側から輝いているかのように透には眩しく見えた。あのとき透は千春の美しさに圧倒され見惚れていた。目を逸らすこともできず言葉を発することもあたわず今思えば我ながら恥かしいほどに眼前の光景に目を奪われてしまっていたのだ。あんなに美しいものを透は目にしたことがなかった。これからも彼女を超える存在には出会わないだろうとあの時に確信していた。

透はベッドの横に座りその下を覗き込んだ。

千春が言ったとおりそこにはスーツカバーらしきものが赤いリボンを施された格好で寝ていた。ベッドの下から引っ張り出しカバーのファスナーを開けて新調のスーツを取り出す。うっすらと縦にストライプが走った黒のスーツだった。おそらく千春は透の知らないうちに透が持っているスーツの寸法を調べておいたのだろう。背広を羽織ってみると大きさはぴったりだった。スラックスのウエストや丈の長さも透に合っている。

胸のポケットから白いものが飛び出していた。メッセージカードだった。

離れててもいつでも傍で応援してる

このスーツには千春の心が宿っているから着ているときはいつでも一緒に居るよという意味だろう。偶然なのかこのメッセージは先ほど警察署の前で千春が透に告げた言葉と同じだった。

透は一抹の不安を覚えた。先ほどから千春がどこか遠くへ行ってしまうような気がしてならない。このカードを見てその思いは一層強くなった。透はスーツを着たまま千春が目の前にいることを思い描きながら両腕を抱き締めた。

18

四月一日は朝から慌しかった。新規採用となった二名の新任教師の紹介もそこそこに様々な打ち合わせが行われる。学年ごと、担当教科ごと、担当行事ごと、担当部活ごと。たとえ一年半近いブランクがっても新任ではない透に甘えは許されない。全ての打ち合わせのどんな話し合いにおいても寸分たりとも気が抜けず透は常に前屈みの気持ちで参加した。それでも事あるごとに「昨年度と同じように」という言葉が使われ、そこからは曖昧なイメージしか想像できず透をまごつかせた。その度に申し訳なさと人前で喋る緊張に掌を汗でぐっしょりにしつつも透は場の人間に細かな説明を求めて一つひとつ疑問を潰していった。

打ち合わせが終わっても息つく暇などなかった。前年度中から新年度を迎えるにあたってある程度の作業は進めているが、八日の入学式までに片付けなければいけない業務はごまんとある。各種名簿の作成、名札や学生証等の配布物の整理、入学式当日のスケジュールの確認。細かいことではあるが少しでもスムーズに新年度を滑り出すにはどれもおざなりにはできないものだった。

授業のイメージトレーニングも欠かすことはできない。一年間で教える内容は担当教科ごとの打ち合わせで決められている。この時期にはここらあたりまで進めておかなくてはいけない、という学期ごとの進行表は頭に入っているが、実際に教壇に立ち三十人ほどの生徒の目に自分をさらしたとき頭が真っ白にならないとも限らない。数をこなしていくうちに慣れてはくるだろうが生徒の顔つきを確認しながら授業が進められるような余裕が持てるレベルに達するまでは反復練習で身体に覚えこませておくしかない。丸暗記でも棒読みでも何でも良いから途中で立ち止まることだけはないようにしておきたかった。時間があれば教科書を睨みぶつぶつと口の中で模擬授業を進める透を好奇の目で見る同僚がいたがとてもそんなことは気

にしていられなかった。
ドアがガラガラと開き「お先に失礼します」と同僚教師がまた一人帰っていく。時計に目をやると間もなく十一時になろうとしていた。気が付けば職員室内に残っているのは透を含めて三人になっていた。机の上のコップに手を伸ばしコーヒーを啜る。先ほど淹れたつもりがすっかり冷めていて不味かった。
「あんまり根詰めちゃダメだよ」
また一人コートを小脇に抱えドアを出ていく。
広い職員室に自分以外の人間が一人しかいない絵は寂しいものだった。どこも開いていないのにひんやりと隙間風のようなものが流れた気がして透はスーツの前を掻き合わせた。昨日の雨の後に寒気が戻ってきたらしく今朝は霜の降りる寒さで一日中気温は上がらなかった。天気予報で明日は霙が降る可能性もあると言っていたのを思い出す。暖かくなったと思ったら急に寒くなり体調管理が難しい。季節の変わり目というのはこういうものかとは思っても知らず知らずため息が出てしまう。温かいコーヒーを淹れ直そうと立ち上がろうとしたとき、机の一番下の引き出しに仕舞ってある鞄の中で携帯電話が振動している音が微かに聞こえた。千春からだろうか。透は引き出しから鞄を取り出した。
「神谷先生はまだ帰らないの？」
最後まで残っていたベテラン教師もどうやら帰宅のようだ。
「もう少しだけ」
透の返事に小さく手を挙げるとその教師もそそくさと職員室を出て行った。
鞄の中を探り携帯を取り出すと既に電話は切れていた。気付いていなかったのだが着信を確認すると立て続けに四度同じ番号から掛かってきていたことが分かる。どれも春美からだった。和馬との話し合いの件だろうか。それとも犯罪者となってしまった夫のことだろうか。透は気分転換を兼ねて春美に電話を掛けた。春美は透からの連絡を待ちかねていたようにすぐに出た。

「何度も電話したんだけど。やっぱり忙しいの？」
「この時期はどうしてもね」
「大変ね。昨日あんなことがあったばかりなのに。私のせいで迷惑かけちゃって本当にごめんなさい。今日はもうそろそろ帰れそうなの？」
「いや、もうちょっとかな。何せブランクがあるからいろいろと手間取っちゃって」
「そう」
今日は酔っ払ってはいないようだが春美の声はトーンが低かった。
愛があったかどうかは別にしても三年間夫婦として連れ添ってきた夫に放火という手段で命を狙われたという事実を春美はどう受け止めているのだろうか。犯罪者としての逮捕という事態によって夫から殴られることはなくなったのだが、だからと言ってこれで伸び伸びと暮らせるという心境になれるものでもないだろう。夫が犯罪に手を染めるきっかけの一つである和馬と屈託なく笑顔で向き合えるようになるまでには時間がかかるのかもしれない。
「実はね、千春ちゃんのことなんだけど・・・」
春美は何か言いにくそうに間を開ける。その口ごもり方に透は胸の奥がざわめいた。四度も電話を掛けてくるほどの差し迫った状況とは何なのか。
「千春がどうした？」
「今朝から熱出しちゃって。さっきも熱を計ったんだけど三十九度もあってとてもホテルから出られそうにないの。熱がひくまでは二人でこのホテルに泊まろうかと思うんだけど」
コンコンと乾咳を繰り返していた千春のことを思い出す。しかも昨日は長い間冷たい雨に全身を晒してしまっている。今朝からの底冷えも千春の身体には応えたのかもしれない。
「そんなにひどいの？」
「朝から薬を飲んで寝てるんだけどなかなか熱がひかなくて。起きても頭がふらふらするみたい。三十九度も熱が出たら当然よね」

「病院には行った？」
「ええ。千春ちゃんは平気だからって嫌がったんだけど、ホテルの近くに内科の診療所があって夕方に強引に連れて行ったわ。先生はインフルエンザじゃないから安静にしていればすぐに熱は下がるだろうって言ってた。点滴打ってもらって帰ってきたの」
「そっか」
取りあえず医者に診てもらったのなら安心だろう。ただの風邪ならば後は医者が言うように寝て養生するしかないに違いない。
「・・・ごめんね。本当にごめんなさい。私のせいでこんなことに。二人にはすごく迷惑掛けちゃって」
春美は昨日から謝りっぱなしだった。今も語尾を震わせ鼻を啜っている。
「そんなことないって。春美さんのせいじゃないよ」
「私のせいよ。私が千春ちゃんを巻き込んじゃったから。昨日だって私が一人で帰ればこんなことには」
「それを言うなら春美さんについてやってくれって千春に言ったのは俺なんだから俺のせいだよ。それに千春は春美さんに頼られて嬉しそうだった。春美さんは私の唯一の友達だって、お互いに助け合うんだって言ってた。だから、千春はきっと迷惑だなんて思っちゃいないよ。俺だって同じ」
「ありがとう」春美は噛締めるように言った。「今度は私が千春ちゃんを助ける番ね。しっかり看病するわ」
「ああ。千春を頼むね」
「うん。任せといて。こんな電話しといてだけど透君は安心して仕事して」
春美は力強く言い切った。電話の向こうでは胸を張って示しているに違いない。今は春美に任せるしかない。春美も千春の看病をしていればあれこれ悩まずに済むのかもしれない。
春美が「じゃあね」と電話を切ろうとする。そのとき春美の一つの仕事をやり終えたような息のつき方に透は何かが引っかかる気が

した。何かは分からないが心に爪を立てるものがある。胸騒ぎはまだ治まってはいなかった。透は追いかけるように春美に声を掛けた。
「春美さん」
「何？」
「千春は、本当にただの風邪なのか？」
「私のことが信用できないの？診てもらったのは大きな病院じゃないけど今時はインフルエンザかどうかくらい検査をすればすぐに分かるわよ」
　インフルエンザか風邪かという問題ではないのだ。しかし、透は考えすぎだと首を振って電話を切った。

19

翌日は全くと言って良いほど仕事に身が入らなかった。千春が傍にいないだけでこんなにも心が乱れるものかと透は自分にとっての千春の存在の大きさに驚いていた。春美との電話以来何となくざわざわと胸の奥の奥で蠢いているものも透の気持ちを散漫なものにさせていた。春美の電話の内容は不自然ではなかった。しかし何かが引っかかる。その正体が何なのか、いつまで経っても見極められず透は半ば自棄気味に仕事を残したままマンションに戻った。

壁に掛けてあるプレゼントのスーツを見つめていると不思議と心が凪いだように感じられた。ベッドに凭れて時間の感覚を忘れてしまうほど心を空っぽにしてスーツをぼんやりと眺めた。

この三ヶ月で思い出すのは笑顔の千春ばかりだった。あの笑顔にどれだけ助けられたことか。しかし、彼女のあの笑顔の裏には癌と闘い続けた深い苦悩が今も癒しきれずに存在しているはずだ。俺はその苦しみを少しでも和らげてやれているのか。千春にもらった元気を同じように千春に与えられているのか。今も苦しんでいるのなら千春をこの手で解放してやりたい。透が思うのは千春のことばかりだった。

ピンポーン。ピーン・・・ポーン。ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン。

呼び鈴の響きに透は苦笑して玄関に向かった。和馬は他人から命を狙われるという危機に遭遇しても何も変わっていないらしい。変わることのない根本的な心のありようは感嘆に値する。

ドアを開けると缶ビールを立ち飲みしている和馬が立っていた。手の甲で濡れた唇を拭うとコンビニの袋を揺らしながら部屋の中に入ってきた。

「今日は意外と早く帰ってきたんだな」

昨日は十一時にまだ職場にいたことを春美から聞いたのだろうか。

部屋の前でビール飲みながら待ってるつもりだった、と言いながらこたつの前に座る和馬に透は今日は早めに帰ってきて良かったと胸を撫で下ろした。和馬は持っているコンビニの袋からスルメを取り出しうまそうにしゃぶっている。こんな格好で部屋の前で待たれていてはマンションの他の住人に白い目で見られそうだ。

「飯食ったのか？」

以前にもこの部屋で和馬にこう訊ねられたことがある。透は和馬に大晦日の夜に居酒屋に連れて行かれたことを思い出した。何とはなしにスーツを眺めているうちに時間は過ぎて九時になっていた。気が付けば空腹なのは夕飯を何も食べていないから当然だった。

「またあの居酒屋か？」

「馬鹿言え。そう何度もただ酒飲ませられるか」

和馬はスルメを銜えながらコンビニの袋から弁当と缶ビールを取り出して透に手渡した。弁当は温かかった。立ち上るご飯の匂いが食欲を増進させる。

「良いの？」

「ああ。どうせろくなもん食ってねぇだろうと思って買ってきてやったんだ。俺は外で食べてきたから気にするな」

コンビニ弁当はろくなものなのか、と憎まれ口を思いついたが黙って包みのラップをはがす。遠慮せずに食べ始めると和馬は慈しむような目で透を見ていた。そんな兄弟愛を感じさせるような優しい眼差しが気味悪かったが透は食べ始めると止まらなくなって和馬を無視して箸を動かし続けた。やがて弁当を空にし、ビールを咽喉の奥に流し込むと小さなげっぷとともに人心地ついた満足感が胃の奥から湧き上ってきた。

「お前、変わったな」

「そうかな？」

否定するような表情を作りながらも内心透は自分の変化を認めていた。食べ物を見て耐え切れないほどの食欲に動かされるということ自体がすでに以前の透にはありえないことだった。

「影が見える」
「影？」
「大晦日にここに来たときに見たお前はまるで幽霊みたいだったよ。じめじめと陰気な薄暗い部屋の中で、お前はいるのかいないのかはっきりとしない向こうが透けて見えるような灰色っぽい感じでその辺りにゆらゆら漂ってた。けど、今のお前には実体がある。はっきりと一人の人間としてここにこうして座っている。蛍光灯の光を受けてその反対側にしっかりと影を作ってる」
「まさに生き返ったんだよ」
ふざけた調子で笑ったが的外れなことでもない。和馬の言葉通り昨年の自分は生きているとは言えない状態だったと透は思った。仕事に出ることなくできる限り世間から遠ざかってこの部屋の中にだけ存在しようとしていた。昼と夜の区別もなく、寝たいときに薬を飲んで横になり、起きたいときに少しずつ目を開く。何も考えることなくスナック菓子を口に運びそれをジュースで胃に流し込みながらテレビゲームの中の主人公を自分に準え指に任せてコントローラーを操作しているだけだった。
今は違う。昨日今日は違ってはいるが三度三度の食事を摂り、就寝と起床の時間もある程度一定となり、雨の日も風の日も毎日毎日職場と部屋とを往復している。昼間はカーテンを開いて陽光を取り入れ、夜は蛍光灯の灯りの下で千春と翌日の予定について語ったりもした。精神的に病むとスケジュールという言葉を忌み嫌うものだが、今はそうでもない。まだ手探り状態ではあるが人として世間という世界に生を取り戻して参加できている。まさに生き返ったのである。
「千春ちゃんの体調が心配だな」
やはり和馬は今日春美と連絡を取ったようだ。電話で春美と喋ったのなら千春のことを何か聞いているんじゃないか、と透は思った。先ほど春美に電話しても呼び出し音が続くだけで春美が出ることはなく千春の様子がずっと気掛かりだったのだ。

「ああ、春美さんに世話になってる。彼女は何か言ってなかったか？」
透の問いかけに和馬は意外な返事を寄越した。春美とは電話ではなく直接会ったと言うのだ。
「そうそう。今日になって熱が少し下がったみたいなんだけど、寝汗の量がすごいらしいんだ。何度も着替えなきゃならないのにホテルじゃ不便だからってことで春美に呼び出されて車で春美の部屋に千春ちゃんを運んだよ」
「じゃあ、今はあの春美の部屋で寝てるのか？」
「そういうことだ」
何でそんな大事なことをもっと早くに言わないのか。人の気も知らないで、と思ったが相手が和馬なので怒る気にもなれない。
「千春はどんな具合だった？」
「車で移動している間もぐったりしてたな。でも自分で歩いてたから昨日よりは回復してるんじゃないか？昨日はベッドから起き上がることもつらかったみたいだから」
「ここにも寄ったのか？」
今日帰ってきたときにクローゼットの中にあるはずの千春のリュックがなくなっていたことに気付いていた。スケッチブックも消えていて部屋の中には千春の痕跡がまるきり見つけられなくなっていたのだ。千春がこの部屋で暮らした三ヶ月の証が忽然と雲散霧消してしまっていた。
考えてみればこの三ヶ月で千春の荷物は何一つ増えていない。いつかはこの部屋から姿を消さなければならない。千春はそう考えていたからこそ今まで自分のモノを増やさないでいたのではないのだろうか。もう二度と千春はこの部屋で生活をすることはないのかもしれない。そんな根拠のない予感に透は心に大きな穴が開いた感じがしてうなだれる。千春を感じさせてくれるのはプレゼントのスーツだけだった。これがなかったら千春の存在自体が夢だったのかと疑ってしまいそうだった。だから透は時間を忘れて壁に掛けたスー

ツを眺めていたのだ。
「ああ。千春ちゃんの身の回りの物が必要だったからな。と言ってもリュックとスケッチブックだけだったけど」
「春美さんの方は元気か？」
「ああ。千春ちゃんの看病で気が紛れるのかな。一昨日ここで会ったときは病人みたいな顔してたけど今日はちょっと気の強いいつもの春美だった」
和馬の灰汁の抜けた嬉しそうな顔は弟の目から見ても新鮮で微笑ましい。和馬と春美はやがて幸せな家庭を築くことになるだろう。そのためには越えなければならない大きな山が幾つかあるのだろうがそれを登り切るのは時間の問題のようだ。そしてそこから見える二人の景色はまた格別のものに違いない。
「迷惑掛けたな」
透は和馬が千春を春美の部屋に運んでくれたことに礼を言った。言いながら前回和馬に礼を言ったのはいつだったろうかと頭の中で振り返ってみた。どうやらそれは思い出せないほど昔のことのようだ。
「礼を言うのはこっちの方だ。おかげで春美の部屋の場所がようやく分かったからよ。旦那は冷たい塀の向こうだから気兼ねなく忍び込ませてもらうとするさ」
二人は顔を見合わせて笑った。笑いながらも透は千春のことを考えていた。
今日仕事から戻って透は薬箱の中の睡眠薬や抗不安剤の量を数えなおしてみた。そしてやはり明らかに残量が不足していることが分かった。もしも透の睡眠薬を千春が飲んでいたのだとしたらそのことと今回の体調悪化と何か関係があるのではないか。千春は透の傍で透に気付かれないようにしながら何を思いつめて眠れない夜を過ごしていたのだろうか。
和馬の向こうの壁に掛けてあるスーツの礼をまだ言えていない。透はどうしても千春に会いたいという気持ちが募って仕方がなかっ

た。

20

昼休み開始のチャイムが鳴ると同時に透は携帯電話を持って職員室から走り出た。苛立つような手つきで画面に春美の番号を呼び出して通話ボタンを押す。電話を耳に当てながら足の向くままに歩を進める。

二度。三度。四度。呼び出し音が透の耳に空しくこだまする。春美は出ない。五度、六度、七度。これまで電話を掛けたときに呼び出し音の回数を数えたことなどなかった。八度、九。

「もしもし？」

漸くつながった春美の声はこちらの気配、息遣いを探るような慎重さを帯びていた。彼女は鳴っている携帯電話を前にして心の準備ができるまで出るのを躊躇っていたのだろう。そう思えてならない重苦しい雰囲気が電話の向こうから伝わってくる。

千春に何かがあったのだ。目の前が一瞬真っ暗になる。

あれはいつのことだったろう。ボツボツとした手触りの、不吉な紫色の実が胸の奥に垂れ下がり始めたのは。表面のざらついた突起はいつの間にか硬く鋭い棘と変質し、そのために触れることもままならず、少しずつ少しずつ確実に膨らみ続けていく禍々しい光景を今日まで見て見ぬ振りしてきたのだ。その不安という名の果実はやがて甘酸っぱい匂いとともに皮がたるみ爛熟して今まさに現実のものとして透の眼前に落下したのだ。落ちた衝撃で中から弾け出た赤黒い血のような果汁が透の目に飛び込んできて視界が遮られた。

「もしもし？もしもし、透君？」

「あ、ああ」

「何よ、電話してきたくせに一言も喋らないなんて」

「ごめんごめん。ちょっと考え事してたから」

「何それ。おかしな人ね」

おかしいと言いながら春美はくすりとも笑わない。

「千春は？」
「熱は下がってきたわ。でもまだ微熱が残ってるのよ」
「会いたいんだ。今から行ってもいいかな？」
春美が息を飲んだのが分かる。次の瞬間何かを割り切って決心したようにやけにはっきりと春美は言った。
「千春ちゃんは、始業式が終わるまでは透君とは会わないって言ってる」
春美の口調は取り付く島なくこちらを突き放すような感じだった。
「どうして？」
透は必死に春美が振り払う袖に食らいつく。このままでは千春がどんどん遠ざかっていく。透にはどうしようもない速さで手の届かないところへ行ってしまう。
「嫌なんだって」
「嫌？俺に会うのが？」
「透君、もうすぐ新学期が始まるんでしょ？今が正念場じゃない。千春ちゃんは大事な時期に透君に風邪をうつしたら困るからって。今、会って万が一にも透君が寝込むようなことになったら一生後悔するからって」
「それだけで、千春は俺と会うのが嫌だって言ってるの？」
「嫌っていうわけじゃないけど」
「さっきそう言ったじゃないか！」
思わず頭に血が昇り声が震える。煮え切らない春美の態度に透の苛立ちは募る一方だ。
「そうじゃないの。そうじゃないのよ」
「千春に代わってよ」
「透君」
「千春はそこにいるんだろ？電話で喋ったって風邪はうつらないっ！代わってくれよ」
たとえ会うことが叶わなくても千春にそう告げてもらいたい。千春の声が聞けるまでは引き下がれない。千春の言葉で風邪だと伝え

てほしい。正真正銘、風邪で体調を崩しているのだと、それ以外の理由で会えないのではないと千春本人に断言してもらいたいのだ。
「透君。分かってあげて。千春ちゃんも我慢してるのよ。千春ちゃんだって会いたいに決まってるじゃない。だけど風邪をひいてるから今は会えないのよ」
「俺は千春にどうしても会いたいんだよ」
搾り出すように透は哀願した。いくら春美が理屈を並べたところで納得できない。今、会わなければもう二度と千春に会えないような恐怖心に透は追い詰められていた。
「分かったわ。千春ちゃんに訊いてみる。電話は一旦切るわね。また連絡するから」
一方的に電話は切られ、千春の返事は十分後にメールで送られてきた。
私も会いたい。明日、PM三時にアドゥマンで。千春
従うしかなかった。千春に会うためには信じるしかない。
透は千春と会えることだけをエネルギーにその日は前日の分を取り返すべく日付が変わるまで仕事に没頭した。新学期を迎えるプレッシャーもそのための準備をしている間は軽減された。仕事をしているときは悪いことを考える暇もなく、透にとっては仕事から解放されることの方が恐ろしかった。
しかし、翌日は朝から全く仕事にならなかった。学校からアドゥマンまでは一時間の道のりだ。二時になったら忘れ物を取りに帰ると言って学校を出る。電車とバスを乗り継いで三時になれば千春の顔を見ることができる。あと数時間で千春に会えるのかと思うと嬉しいような苦しいような不思議な気分で何をしても集中できなかった。千春に会うことに緊張している自分がいる。何かに心を乱されて落ち着かないのだが、その何かの正体がどうにも見極められない。
正午直前からとうとう何も手に付かなくなり最後の手段として透は消しゴムを三個持って新学期から自分が受け持つ教室に入った。整然と並ぶ机を前に怯むような気持ちになる。本番はここに生徒た

ちが座り一様にこちらに目を向けてくるのだ。挑戦的な眼、意欲的な眼、臆病そうな眼、期待に満ち溢れた眼、白けたような眼。それらを全て正面から受け止めることから透の新学期は始まる。

透は一つずつ机に向かって座りその落書きを消して回った。一心不乱に消しゴムを使った。

誰かの似顔絵。プロ野球選手の名前。女性の性器。スペースシャトル。透は全て消し去った。消しゴムが熱を持ち輝が入りやがて折れるまで。折れても指でつまめなくなるまで消しゴムで机の表面を飽きることなく擦った。昼食をとることも忘れてただただ落書きと戦った。やがて指の感覚がなくなり手首や肩の疲労が限界になる頃全ての落書きを消し終わり、時刻は二時になった。

透が「忘れ物を取りに」と言っても誰も顔を起こすことはなかった。誰もが新学期の準備に追われて透のことに目を向ける余裕がないのだ。透は堂々と職員室を後にした。

電車もバスも透の足も予定通りに透を目的地へ運んだ。暖かな春の日差しにいつの間にか咲き出した桜の花びらがどこからともなく舞い飛ぶ。この陽気なら千春の体調に悪い影響は与えないだろう。歩いているとアスファルトの照り返しもあって額に汗が浮かんでくるほどだった。透はスーツのズボンからハンカチを取り出し顔を拭った。手もじっとりと汗ばんでいる。息苦しさを感じネクタイを少し緩めてワイシャツの一番上のボタンを外した。やがて左手に自分のマンションの一部が姿を現し、右手にアドゥマンの茶色い建物が霞んで見えた。

透は立ち止まって空を仰いだ。

ここまで来たのに何故かここから逃げ出したいような気持ちになっている。会って千春と何を話せば良いのか。今さらそんなことに思い至って頭が真っ白になった。俺は千春を前にして何を告げたいのか。千春に何を言ってもらいたいのか。

透はもう一度ハンカチで顔を拭い喫茶店に向かって歩を進めた。

ただ、千春の顔を見られれば良い。あの真夏の太陽のような俺に

だけ降り注ぐ眩しく熱いあの笑顔をもう一度目に焼き付けたい。
アドゥマンの重い扉を開くといつもの席に赤いダッフルコートと淡い黄色の毛糸の帽子を見つけることができた。ひまわりの花のような存在感のあるその帽子が千春だった。いかにも千春らしいその色に透はほっと頬を緩めた。まだ千春は俺の傍にいる。約束どおり来てくれたことが千春の愛の証のように思えた。
「いらっしゃい」
マスターは相変わらずの仏頂面でティーカップを磨いている。初老の男性は今日もカウンターに座っていた。振り返っていつも通りの笑顔でこちらに会釈をくれる。彼はいつもあそこに座って何をしているのだろうか。マスターとの会話を楽しむわけでもない。ただひたすら厨房の壁を見つめてにこやかに微笑んでいる。マスターとはどういう関係なのだろうか。いろいろな疑問を頭に浮かべながら透は会釈を返し千春の席に向かった。
千春の横に立つとシナモンの香りが漂っていた。そう言えばと透は前回アドゥマンに来たときのことを思い出した。あのとき千春はシナモンティーを注文したのだが火事騒ぎで一口啜ることさえできなかった。
「美味いか？」
そう言って千春の向かいに腰を下ろし正面を向いたときに透は思わず声を出して驚いた。
「ぶさいくでしょ」
千春の顔は鼻まで隠れる大きなマスクで覆われていた。頭にはひまわりのようなニット帽を被っているので千春の顔で見えているのは透が最も愛する青みがかった瞳とその周辺だけだった。その瞳が透を試すような色を帯びている。いたずら好きの子供のように透の反応を楽しんでいるようだ。
「何だよ、それ」
「マスクよ」
「分かってるよ、そんなことは」

こちらを愚弄するような千春の物言いに透の口調も強くなってしまう。せっかく顔が見られると思っていたのに、と心の中で嘆息した。
「風邪をうつすといけないから」
怒らないで、と千春は上目遣いになる。確かに少し鼻声だ。
「風邪なんてな・・・」
身を乗り出そうとしたところにマスターが注文を取りに来る。出鼻を挫かれたような気になったがホットコーヒーを注文すると再び千春に向き合った。テーブルの上で指を組む。
「風邪なんてひくときはいくら気を付けてもひくし、ひかないときは腹出して寝てもひかないもんなんだよ」
「ワタシ、ニホンゴ、ワカリーマセン」
「また、それか」
「可能性の問題よ。用心するに越したことはないの。これで万が一にもお兄ちゃんに風邪がうつったら死ぬまでネチネチ言われそうだもんね」
「言うかよ」
透は背凭れに身をあずけ足を組んだ。拗ねたような素振りを見せつつ透は内心ほっとしていた。千春との会話にぎこちなさはない。変に気負うことなく互いに向き合えたのは千春のマスクのおかげかもしれない。
「大体それじゃせっかくのシナモンティーが飲めないだろ」
「いいの。お兄ちゃんが来るまでに少し飲んだから」
「じゃあ残りは俺が帰ってから飲むつもりか？」
「そうよ」
二人の間の空気が一瞬にして凍りついた。冗談のつもりが冗談にならなかった。千春は透の前でマスクを取るつもりはないと言ったのだ。冷める前に帰ってくれと暗に突き放されたようにも取れる。これまで透に対しては全てをさらけ出し透の腕の中に全身で飛び込んできていた千春が今はたった一秒でさえ顔を見せることを拒否す

る。透は千春との間にある距離が七十センチメートルほどのテーブルの幅だけではないことを思い知らされた気がした。千春の心がどこにあるのか。それを探る手がかりは僅かに覗く目元しかなかった。
マスターがコーヒーカップを透の目の前に置いていく。二人の間に柔らかい湯気が立ち上り張り詰めた雰囲気が少し和らいだ。先ほどの登場は間の悪い演出だったが今回は救われる思いだった。透は間を取り繕うようにカップに手を伸ばし熱いコーヒーをゆっくり二度三度と啜った。
「荒れちゃってひどい顔してるのよ。お兄ちゃんにだけは見せたくないの」
千春は詫びるようにシナモンティーに目を落とした。
千春の顔で透から見えるのは頬骨の上から眉毛の辺りまでだった。その覗いている部分に改めて目を凝らし透はハッと胸を押しつぶされたような気持ちになった。
目の周辺をうっすらと影が覆っているように見える。明らかに肌に張りがなく眼窩が窪んでいるのだった。そしてその分頬骨が高く感じその周辺の皮膚に瑞々しさはなくカサカサと白く粉をふいた状態になっている。お粥のようなものしか口にできていないのだろうか。素人目にも栄養が不足しているのが分かる。透はマスクに気を取られすぎていて千春の体調を気遣うことを忘れていたことに反省する思いだった。気丈に振舞ってはいるがやはりかなり体力が衰弱しているに違いない。ここまで来てくれただけでありがたく思わなければいけないのだ。
「熱はまだあるのか？」
「うん。まだ微熱が続いてて」
僅かにだが千春は肩を上下させている。今こうしてただ椅子に座って会話をするだけでも少しずつ体力を奪われているのかもしれない。透は自分自身の愚かさを呪った。新学期を迎えるプレッシャーに負け千春のいない空虚な暮らしに自分を見失い、ただ自分の都合だけで強引に千春を病床から呼び出すようなことをしてしまってい

る。
「ごめん。わがまま言って千春に無理をさせちゃったみたいだな」
「いいの。私もお兄ちゃんに会いたかったから」千春は物憂げで弱々しい視線を手元に落とし小さく首を左右に振った。「ベッドで寝てるとこの三ヶ月のことを思い出すんだ」
千春は窓の外に目をやった。千春の視線は三ヶ月を一緒に過ごしたマンションの方角を向いている。細く長い睫毛に春の柔らかい日差しが降り注ぐ。
「昨日、俺も思い出してた。あっという間だったよな」
「楽しかったね」
「ああ。楽しかったな」
窓の外を見つめたまま千春が右の目元に指を添える。すぐに左の目尻から一筋の涙がこぼれマスクに滲んでいった。透は一瞬目の前にいる千春の向こう側が透けて見えたような気がした。生命力に満ち溢れていたはずの千春が春の綿雲のようにとらえどころのないぼんやりとした存在になってしまっている。千春がどこか遠くへ、手の届かないところへ行ってしまうという予感は透の中でさらに確固たるものとなり背筋を寒くさせる。
「千春」
「へへへ。私、お兄ちゃんがいないとダメみたい」
千春は照れを隠すように笑いながら右手の指でゆっくりと両の目尻の涙を払った。
「俺だって同じだよ。俺も千春が傍にいなきゃ前に進めない」
そんなことない、という感じで千春は小さく首を横に振った。
「私、お兄ちゃんのこと本当にすごく好きだよ」
「分かってるって」
「ううん」千春は今度はしっかりと首を横に振った。「お兄ちゃんが思っているよりももっともっと私はお兄ちゃんのことが好き」
「千春・・・」
「・・・だから、もう行って」

「千春」
「お願い」
「千春！」
透が身を乗り出して千春の肩に手を伸ばすと千春はそれを拒絶するように身体を強張らせた。透は千春に触れることができなかった。透の手が宙を掻く。
「八日の始業式が終わったら迎えに来て」千春は必死に取り繕ったような笑顔で透を見つめた。「それまでには絶対に治しておくから」
透は唇を噛締めながら立ち上がった。その透に千春は慌ててすがりつくような視線を送ってくる。透はなんとか口角を引き上げ歯を見せて笑顔を送った。
「千春。スーツありがとう。俺はもう大丈夫だ。何があってもあれを着て教壇に立つよ。始業式が終わったら一緒に夜桜を見て乾杯しよう」
千春は透を眩しそうに見上げて大きく頷いた。にっこりと笑ったであろう表情はマスクでほとんど隠れてしまっていたが透にはマスクの下にいつもの千春の笑顔が見えるようだった。透をここまで生き返らせた奇跡の笑顔だった。

21

プレゼントのスーツを着て透は四月八日を駆け抜けた。息をつく間もなく、周りを見る余裕もなかったがとりあえずは無難にこなし切った感触だった。教室に生徒を集めての担任としての自己紹介も多少声は震えたがスムーズにできたし、一人ひとり名前を呼び上げたときには腹の底に力が入って自分でも満足のいく出来だった。配布物や提出物の確認などの事務的な処理も手落ちなく済ませ、一日の行事を終え下校の途に就く生徒を見送った後に透は誰にも見られていないことを確認してから教室の隅で小さくガッツポーズをした。

職員室の自分の席に戻ると時計に目をやりながら残務をこなした。今日の出来と明日への自信を早く千春に報告したいという気持ちが募れば募るほど時計の秒針は遅々として進まないようだった。

漸く終業時間となり喜び勇んで席を立とうとすると背後から肩を叩かれた。

「一杯どう？」

振り返ると教頭が酒を飲む仕草をしていた。教頭は教頭なりに気遣ってくれているのだと思うと嬉しくもあり、その誘いを断るのは心苦しかったが、今日だけはどうしても寄り道はできなかった。

「妹が待っていますので」

教頭以外には聞こえないように声を潜める。教頭は目を見開きポンと一つ手を叩いて納得の意を示した。教頭は当然透に妹がいないことを知っている。

「そうだった、そうだった。兄妹水入らずか」

笑いをかみ殺すような顔で「野暮なことを言ってすまん」と去っていった。

教頭の背中に「すみません」と詫びると透はこそこそと職員室のドアに向かった。新人教師たちはこれから歓迎会と称して飲みに連れて行かれるだろう。もたもたしていると若い透も声を掛けられか

ねない。中には強引なベテラン教師もいる。そんな人たちに囲まれでもしたら退くに退けなくなってしまう。透は足音を忍ばせるようにして外へ出た。
空気が冷たく澄んでいた。北斗七星が雲のない藍色の夜空にうっすら浮かび始めた。いつの間にか満開を過ぎた校庭の桜の花びらが寒風に運ばれていき濃い緑色の葉が目立ち始めている。今年はゆっくりと桜を眺めるような余裕はなかった。しかし、去年は部屋から出ることもなく風に飛ばされた桜の花びらを見ることさえなかったことを思えば我ながら頑張ったものだと葉桜に向かって微笑んだ。
携帯電話を取り出し春美に掛ける。花冷えの寒さのなか透はスーツの襟を少し立てて春美が出るのを待った。
「透君？」
気のせいだろうか。春美が泣いているように思えた。声が震え鼻が詰まっているように聞こえたのだ。
「終わったよ。何とか無難に終わった。千春はそこにいるんでしょ？悪いけど代わって」
「透君。冷静に聞いて。・・・千春ちゃんはここには居ないわ」
予想もしない答えに達成感に昂揚していた気持ちが急速に萎んでいくのが分かる。春美の言葉が上手に飲み込めない。冗談を言っているのではないことだけはその口調から伝わってくるだけに、透はうろたえた。
「居ない？居ないってどういうこと？マンションに戻ってるの？」
千春に会わなければ四月八日という日を終えられない。今日一日何を張り合いにして頑張ってきたのか。全ては千春の笑顔を見るためなのだ。透は噛み付くように春美に問い詰めた。
「・・・マンションにも戻ってないわ」
「じゃあ、・・・じゃあ千春はどこに居るんだよっ！春美っ！」
渦巻くような混乱によって生み出された怒りの奔流は春美という唯一のはけ口に向かって殺到した。透は我を忘れて怒鳴っていた。わなわなと全身が震え出す。春美の返事を一言も聞き漏らすまいと

痛いほど耳に電話を押し当てる。
「ごめんね。透君、ごめん。本当にごめん」
春美の声は潤み、やがて嗚咽しか聞こえなくなった。
何の説明もなく繰り返し謝るだけの春美の態度に透の苛立ちは強まる一方だった。泣いている意味が分からない。迎えに行くという千春との約束はどこでどうやって果たせば良いのか。透は怒りに任せて桜の樹を足の裏で突くように蹴った。目の前に聳える幹はあまりに太くごつごつと堅い。二度三度と繰り返してもびくともしない桜の力強さが足から伝わってくる。舞う花びらがなだめるように頬をやさしく掠め透に落ち着きを取り戻させた。透は掌の小さな携帯電話にすがりついた。
「泣いてちゃ分かんないよ。春美さん。千春はどこに居るんだ？」
春美さん。教えてくれよ、春美さん。精一杯の優しさと冷静さを装って泣いてばかりで返事をしない春美に透は何度も呼びかけた。千春につながる道は春美が知っているはずだ。黙って何も言わないのは何かを知っている証拠とも言える。
透は春美に呼びかけながら走り出した。このまま駅の近くまで行ってタクシーをつかまえるつもりだった。電話では限界を感じていた。春美に会って直接話せば何かしら手がかりが掴めるのではないか。何よりも春美の部屋に千春がいないことを自分の目で確認しなければ今何が起きているのかを理解できないと透は思った。
「・・・病院」
突然春美がそう呟いた。
「病院？」透は足を止めて耳に神経を集中させた。「千春は入院してるの？」
「・・・うん」
「風邪をこじらせたの？この前俺が無理言って外に出させたのがいけなかったのかな？」
「・・・違う」
「違う？じゃあ、どうして入院してるの？」

透の問いかけに春美はまた貝のように口を閉ざしてしまった。言いづらいのか、千春に口止めされているのか。何かを透に伝えようとしながらも言ってしまって良いものかと逡巡している春美の様子が伝わってくる。透は春美の様子に注意を払いながら再び駅に向かって歩き出した。

「春美さん。病院ってどこの病院？」

そのとき空車のタクシーが透を追い抜いて行った。透は慌てて追いかけた。

「タクシー！タクシー！」

車道に出て右手を大きく振った。背後に襲い掛かるようにブレーキの音と激しいクラクションが鳴り響く。透は構わずにタクシーを追い駆け続けた。漸く運転手が気付いてくれたのかタクシーはハザードランプを点滅させながらスピードを緩め路肩に停まった。歩道に向かってドアが開く。透は後ろの車に向かって手を挙げ頭を下げて詫びを入れるとすぐにタクシーに飛び乗った。

タクシーのバックミラーに五十がらみの運転手の目が映った。その目が行き先はどこかと尋ねている。

「春美さん！どこの病院だ？」

それでも春美は何も言わない。

「黙ってちゃ分からねぇだろ、春美さん！教えてくれよ、春美さん！」

車道に出て手を振って追いかけてきたと思えば乗車しても行き先を言わず電話に向かって怒鳴り散らす。透を見る運転手の視線が胡乱な客を訝るようなものに少しずつ変わりつつある。

根負けしたように春美がぼそっと病院名を漏らした。透はそれを悪い夢のように聞いた。放心したようにタクシーの座席に身を委ね電話の重さに耐え切れず耳から離して腕を下ろす。追い抜いていく車のテールランプが透の目に赤い残像を残していく。

「国立がんセンター」

透の呟きでタクシーはゆっくりと滑り出した。

国立がんセンターは隣の市にある癌治療専門の病院で国内はおろか世界的に見ても最先端の癌治療研究が行われている国立機関だった。そこに入院しているということは取りも直さず千春の身体が癌に侵されていることを意味している。千春の体内に潜んでいた癌が再び活動し始めたのだ。

透は渾身の力を振り絞って再び電話を耳にまで持ち上げた。電話はまだつながったままだった。

「春美さん」

「うん？」

電話の向こうはバタバタと騒々しかった。ドアが開きすぐに閉まる音がする。やがてコツコツと靴音のようなものが聞こえてきた。

「千春はいつから入院してるんだ？」

「・・・火事騒ぎがあった日の次の日から」

透は静かに携帯電話を切った。

先ほどから運転手が時折透の様子をバックミラーで確認してくる。その目には先ほどまでの異邦人を見るような冷たさはなかったが、同情に染まった哀れむような色が浮かんでいて、それが透には顔の周りをうろつく蛾のような鬱陶しく感じられた。透は運転手の視界から消えるように窓に凭れかかった。窓ガラスに額を当てるとひんやりと冷たくて火照った顔に気持ち良かった。

道路脇に等間隔に並ぶ街灯が近づいては遠ざかっていく。同じリズムで現れる一つひとつの光に千春の姿が繰り返し浮かんでは消えていった。

突然何の前触れもなく元日の朝、目の前に現れた千春。透の傍らを離れずいつもスケッチブックの上に色鉛筆を走らせている千春。出来上がった絵を透の前に広げて見せ無邪気に笑う千春。

千春と過ごしたこの三ヶ月は透の人生の中で最も華やいだものだった。生まれて初めて心から笑った気がしていた。

おみくじの「病」の欄を気にする千春。右胸の手術の痕をさらけ出して透に迫った千春。風邪をうつすのは嫌だからと大きなマスク

で顔を覆う千春。
彼女は精神安定剤や睡眠薬を透に隠れて飲んでいた。それはきっと癌が身体を蝕んでいることを何らかの形で知り不安で仕方なかったからに違いない。自分は千春に苦しみから解放してもらったのに、その身代わりのように彼女が苦悩を深めていったことに気付かずにいたことが透は情けなく腹立たしかった。
千春は透のわがままに応えてアドゥマンで再会した。あの時は既に入院していて病院から抜け出してきたことになる。そんな体調で透に「必ず八日に迎えに来て」と約束した。千春は何故あんなことを言ったのだろう。透を少しの間だけでも遠ざけ新学期の開始を控えて切羽詰っている透に心配をかけさせないためだろうか。それとも八日に透と会うことを心の支えとして病魔と闘うためだろうか。
千春。千春。透はいつの間にか自分の頬が涙に濡れていることに気付いた。次から次へと溢れ出る涙を止めることができない。千春は今頃病院のベッドで透が姿を見せるのを待っていてくれるのだろうか。一刻も早くこのスーツ姿を千春に見せたい。教壇に立てたことを伝え一緒に笑いたい。透がそう思ってフロントガラスに目を向けたときタクシーは病院の門を潜り夜間入口に向かってスピードを緩めつつあった。
タクシーを降りると入口の自動ドアの傍らで蹲っている人間が立ち上がった。こちらに向かってゆっくりと近づいてくる。
「いつまでも冷えるな」
透に向って軽く右手を挙げたのは和馬だった。春美からの連絡を受けて先回りしていたのだろう。透は心の中で身構えた。和馬は何を知っていて何を告げるためにここで待っていたのか。透を喜ばせるつもりでないことは分かる。おそらくはこの病院で起こっている透にとって最悪と言っても良いような事態について前もって心の準備をさせ実際に目の当たりにしたときの衝動を和らげ動揺を最小限に抑えようという配慮なのだろう。
大きなお世話だと透は思った。透は立ち止まったまま睨みつける

ように和馬を見据えた。千春の病気は俺の問題だという思いが透には強かった。透の知らない千春についての情報を第三者の口から聞かされることは不愉快だった。たとえそれが兄からであったとしてもだ。
「この髪だと首筋がスースー寒いんだ」透の三歩前のところで立ち止まると和馬は頭を掻いた。「五階の５０１だ」
透は小さく頷くと何も言わず和馬の横を通り抜けて夜間入口に向かった。階段を足早に駆け上がる。和馬からは何も聞かされたくはなかった。たとえどんなにつらいことでも千春のことならば全て自分の目で見届けたいと透は思っていた。
背後で車が急停車しドアが開く音がした。
「透君！」
春美の声が静かな病院の敷地にこだまする。振り返ると春美がこちらに向かって駆けてくる。コツコツとアスファルトを叩きつけるのは先ほど電話で聞いた靴音と同じだった。
「透君、千春ちゃんを責めないで。ねぇ透君、聞いて」
「良いんだ、春美！」透の方へ駆け寄ろうとする春美を和馬が押し留める。「俺たちが口を出すようなことじゃない。透と千春ちゃんの問題なんだ」
「でも・・・」
「良いんだ。透だって分かってるんだ」
透を見上げる春美に向かって透はゆっくりと頷き病院内に足を踏み入れた。愛する千春のことを責めるはずがないよ。そう心の中で伝えたつもりだった。
中へ入るとすぐ右に受付があり紺のカーディガンを羽織った看護婦が一枚の紙とボールペンを差し出した。用紙に氏名などの必要事項を記入すると和馬が言ったとおり５０１号室と教えられる。透はしっかりと礼を述べて奥へ歩を進めた。
外来受付の時間が終わっているからか最低限に灯りの数を減らされた薄暗い廊下を歩いていくとやがてエレベーターホールに出た。

ボタンを押すとすぐに扉が開き箱の中から光が溢れてきて透を包み込むように明るく照らした。エレベーターボックスの中までは灯りを抑えることはできないのだろう。扉が開き眩しく光り輝くＵＦＯの機内から宇宙人が現れる。透はＳＦ漫画で良くあるようなシーンを頭に思い描いた。箱の中に本当に人影を見たように思い目を凝らすとそれはエレベーター内に備え付けられた鏡に自分の姿が映っているのだった。扉が閉まりかけたので再度ボタンを押し明るさに慣れない目を瞬きながら透は乗り込んだ。

この箱は俺をどこに連れて行くのだろうか。先にあるのは悪夢とよびたくなるような世界かもしれない。あるいは三ヶ月間見続けてきた長い夢から現実に連れ戻されるのか。

階を選択しようと手を伸ばし、伸ばした指が震えていることに気付いて透は思わず手を引いた。自分を落ち着けるように顔の前で手を開く、握る、開く、握ると動かす。大きく息をつき覚悟を決めると五階のボタンを押した。

扉が閉まりエレベーターが動き出すと透は背後を振り返った。鏡に映った自分の顔は少し青ざめ強張ってはいたが、緊張感に引き締まって見えた。数ヶ月前は同じ顔色でももっと腑抜けた覇気のない相貌だったことを思うと自分でも回復振りが良く分かる。透は気合いを入れるようにごしごしと掌で顔を擦り指の間から階数表示を見つめた。あっという間に五階で停止したエレベーターは同情の欠片もなく無造作に扉を開いた。軽く頬を叩くと透は薄暗い廊下に足を踏み出した。

正面の壁に病室の案内が載っている。５０１号室は廊下の突き当たりだった。そちらの方へ視線を送る。廊下に出ている人は誰も居なかった。手前の三部屋はドアの窓から灯りが漏れているのに一番奥の部屋だけは暗い。腕時計に目をやるとまもなく七時になろうとしている。夕食の時間はもう終わったのだろうか。どこの部屋からかテレビの音が微かに漏れていた。

透は廊下の奥に向かって歩を進めた。５０１号室に近づけば近づ

くほど心臓が激しく脈を打った。
千春はどのように俺を迎えてくれるのだろうか。「実は全てお芝居だったんだよ」と深刻そうな俺の顔を指差して大きな声で笑い飛ばしてはくれないだろうか。和馬や春美とも一緒に肩を組み互いに罵りあいながら透の部屋に戻れればこんなに幸せなことはないのだが。
手前の５０２号室から高校生と言えなくもない童顔の看護婦が出てきた。奥の部屋に向かう透とすれ違いざまに目を合わすどころか顔を背けたように見えた。５０１号室で起こっている悲劇を知っていて透に顔を合わすことができなかったのではないか。透の逃げるように去るナースの背中を見送り胸はさらに不安に締め付けられた。
５０１号室の前に立ち止まる。病室内には小さな灯りが点いていることがすりガラスの入った小窓で分かった。目を移すと「本城千春様」と書かれたプレートを扉の横に見つけて透は思わずその場に崩れそうになった。一気にこみ上げてくる涙で視界が霞む。声を上げてしまいそうになる口を右手で強く押さえつけた。不意に「私、お兄ちゃんがいないとダメみたい」と力なく笑った千春の顔が思い出された。あのとき既に千春は自分が長く生きられないことを知っていたのだろう。それでも四月八日までは何が何でも生き続けると約束したのだ。この部屋で間もなく千春は短い生を終える。ごめんな、今まで傍にいてやれなくて。透は廊下の天井を見上げた。涙が乾くまでには数分かかった。しかしその時間で漸く透は扉を開ける勇気ができた。
小さくノックをすると中から男性の返事があった。医師の声だろうか。ドアの取っ手を握りゆっくりと開く。
部屋の中は夕焼けのような橙色の灯りにぼんやりと浮かび上がっていた。正面にベージュのような淡い色のカーテンを引いた窓が見える。千春が寝ているであろうベッドの一部分も確認できた。千春はどんな顔で寝ているのかと思うと再び目に涙が浮かんでくる。
室内に足を踏み入れるとベッドの脇に透が来るのを待ち構えてい

たかのように背広姿の男性と西洋人の女性が緊張した面持ちで立っていた。女性の方は今し方まで泣いていたのか赤い目をしていて口元にハンカチを添えている。
「神谷透さんですか？」
白髪混じりの恰幅の良いその男性は柔和な表情で透を迎えたが、その顔には疲労が色濃く滲んでいるように見えた。
「はい。神谷です」
透が答えると二人は顔を見合わせて頷き合った。女性の方が「あの子の絵にそっくり」と言ったように聞こえた。
「千春の両親です」
二人は深々と透に向かって頭を下げた。驚きはなかった。二人の姿を見たときに透はそうだと直感していた。二人の様子を見れば彼らが千春の両親であることに疑いはなかった。特に母親の方は顔立ちが千春に良く似ていた。
「こちらへどうぞ」千春の父親がベッドを挟んで反対側に置いてある椅子を透に勧めてくれた。「ずっと眠ったままなんだが」
透は勧められた椅子に腰を下ろして千春の顔を覗き込んだ。
「可哀想に。やつれたでしょう？」
母親が口元をハンカチで押さえたまま透に訊ねてきた。流暢な日本語だった。
頷くしかなかった。千春は鼻から顎にかけて酸素マスクに覆われていた。そのマスクの下の顔は頬の肉がげっそりと落ちてしまっている。それは千春の病状の深刻さを物語っているようだった。しかし、眠っている顔に苦痛の色は無く穏やかそのものだった。
枕もとに見覚えのあるスケッチブックが立てかけられていた。何枚もの透の絵がそこには収められているはずだ。
透は居住まいを正して千春の両親と向き合った。
「ご存知かもしれませんが、一週間前まで僕は千春さんと・・・」
「聞いてますよ。あなたとのことはそのスケッチブックを開きながら千春が嬉しそうに教えてくれました」初めて千春の母親が微笑ん

でくれた。「人生で一番幸せな三ヶ月間だったって」
「僕にとってもかけがえのない三ヶ月間でした」
「それを聞いたら千春はさぞかし喜ぶことだろう」
父親は愛しそうに千春の寝顔を眺めた。
「いつから眠っているんですか？」
「ちょうど丸二日になるかな」彼は千春の髪を優しく撫でた。「冷たく聞こえるかもしれないが、娘は明日までもたないだろう。もう目を開くこともないかもしれない」
「そんな・・・」
後頭部を鈍器で殴られたような衝撃があった。咄嗟に透は千春の母親の顔を確認した。否定してくれるかという淡すぎる期待は彼女が透に目を合わせることなく顔を俯けてしまったことであえなく破れた。
「君を悲しませたくて言っているのではないんだ。しかし、癌細胞はすでに千春の全身に転移してしまっている。一週間前にこの病院に入院したときにはすでにいつ息を引き取ってももおかしくない状態だと医者からは言われてるんだ。今朝になってもまだ生きながらえてる千春を見て医者たちは千春の生命力に感嘆してるぐらいなんだよ」
彼はまるで娘が何かの表彰を受けたかのように誇らしげに語った。
透は千春との約束を思い出していた。始業式が終わったら迎えに来る。千春は今も夢の中で透が姿を現すのを懸命に待っているのかもしれない。
透は両膝に力の限り掌を押し付け千春の両親に頭を下げた。下を向いた途端それまで何とか堪えていた涙がこぼれて落ちた。熱く湿った吐息が手の甲にかかる。
「・・・申し訳ありません。本当に申し訳ありません」
「どうして謝るんですか？どうか顔をお上げになって」
母親の言い方は子供をあやすようだった。優しい人だ。
「僕と一緒に暮らしている間にも千春さんの身体は癌細胞に少しず

つ蝕まれていたことになります。僕が千春さんの身体の異常に気付いてもっと早くに入院させていればこんなことにはならなかった」
「それは違う」千春の父親はゆっくりと首を横に振った。「君が千春と出会ったとき、すでに千春は手の施しようがないほど癌細胞が身体中に転移してしまっていた。もう医者もなす術を失っていた。あのとき私たちは千春の余命は長くて一ヶ月と宣告されていたんだ」
「一ヶ月・・・」
すでに一ヶ月は三回クリアしている。医者が驚くのも無理はない。しかし、余命一ヶ月の患者を病院側はどうして退院させるようなことをしたのだろうか。千春の両親もなぜ見す見す娘の死に顔さえ見ることができなくなるような事態を許したのだろうか。
「一つ伺ってもよろしいですか？」
「何かな？」
「千春さんにはお兄さんがいらっしゃいますか？」
千春は両親を事故で失ったと言っていたが、実際には二人ともここに生きている。となると兄の話も疑わしい。今現在も元気に生きているかもしれないし、逆にそもそも最初から兄なんていないのかもしれないと透は思ったのだ。
しかし、透は千春の兄のことを口にした瞬間にそのことを後悔していた。千春の両親は表情こそ変えなかったが二人の間の空気が冷たく張り詰めていくのを透は感じた。千春に兄はいたのだ。しかも今はもういない。
「どうしてそんなことを？」
千春の父親の口調は柔らかい。しかし、その瞳には物悲しい光が宿って見えた。
「いえ、あの・・・」透は口ごもった。しかし今さら後には退けない。「千春さんが僕のことを『お兄ちゃん』って呼ぶんです。僕が千春さんの本当のお兄さんに似ているからと言って。僕って実のお兄さんに似てますか？」
「千春に兄はいる。いや、いたと言うべきだね。もう亡くなって十

五年になる。亡くなったときは十歳だったから今の君と似ているかと訊かれても・・・。しかし、千春は君に兄の面影を見たのかもしれないな」

千春の父親が小さくため息を漏らす隣で母親の方が一語一語紡ぎ出すように語り出した。

「千春の兄も癌でした。十歳のときに殺風景な無菌の集中治療室で全身にチューブをつながれ化学実験の材料のように扱われて死んでいったのです。肉親の私たちでさえも普段はガラス越しでしか顔を見ることができません。手を洗い、白衣を着、マスクをし、帽子をかぶり、全身を滅菌処理してからでなければその手を握り直接一言声を掛けることもかなわなかったのです。ビニールの管に巻かれ青白い顔で生気なく横たわっている千春の兄は正直言って腹を痛めた我が子でありながら既に自分の息子ではなく、どことなく得体の知れない小動物のようにさえ思えました。死は免れないとするならばもう少し人間らしい死に方を与えてあげたかった。そして亡くなる前にもう一度この手で抱き締めてあげたかった。あの子もきっと無念だったと思います。今思えばあの子はあの寒々しい集中治療室に入れられたときに人間としての生を終えていたのです。・・・私たちはもう二度とあのような最期を見届けたくはなかった。何とか千春にはこの世に生まれてきたことの喜びを感じてほしかった。人間でなければ味わえない幸せを一度だけでも噛締めてほしかった。ですから私たちは余命一ヶ月と知った千春が『このまま動けなくなって死ぬのは嫌。歩けるうちに病院を出てやりたいことがある』と泣いて叫んだとき反対することなく送り出したのです。病に身体を冒されていることを知りながら医療行為から娘を遠ざけた私たちの行動は非難されるべきことなのかもしれません。そういった声は甘んじて受けますが、私たちも千春も何一つ後悔しておりません。あの子が病院に帰ってきたときのあの晴れ晴れとした笑顔。千春は間違いなく人間として人生を謳歌したのです。千春が出て行ってから私たちは来る日も来る日も『今日も千春が帰ってきませんように』と

祈っていました。悲しいことですが、千春が帰ってくるということは千春が死ぬということですから。余命と宣告された一ヶ月が過ぎ、二ヶ月が過ぎても姿を見せず何の連絡もないことに私たちは涙を流して喜んでいたのです」

再びハンカチで目頭を押さえる母親の背中に父親が優しく手を添える。

「初めて自分が癌におかされていると知ったとき千春は私たちに『こんなに苦しむぐらいなら生まれてこなければ良かった』と当り散らして手がつけられないことがあった。しかし君の元から帰ってきたとき千春は『お父さんとお母さんの子に生まれて良かったよ』とにっこりと笑ってくれた。千春のあんな笑顔はここ何年と見ていなかった。私も妻も君には本当に感謝している。たった三ヶ月の間だったが娘に幸せを与えてくれて本当にありがとう」

二人は透に向かって深々と頭を下げた。

「とんでもない。礼を言わなければならないのは僕の方です。千春さんに出会わなければ僕はじめじめした暗い部屋のなかで自暴自棄になりそれこそ味気ない人生を終わらせてしまうところでした。千春さんが僕に勇気をくれたんです。千春さんのおかげで今日僕は人生の再スタートを切ることができました。一年半のブランクを乗り越えて教師という仕事に復帰し今日教壇に立てたんです」

千春の両親は我が子の成長を見るような眼差しで透を見つめた。

「千春があなたのことを『お兄ちゃん』と呼んでいたことはお父さんがいないときにこっそりと千春から聞いていました。あの子は本当は『透さん』とあなたをお名前で呼びたいんだけど、そう呼ぶのはどうにも照れてしまってあなたの顔を見られなくなってしまうからできなかったって。あの子は何度もそう呼んでみようと試みたようです。だけどやっぱりあなたと面と向かうと恥かしくてできなかったみたい。それだけが心残りだと言っていました」

「そうだったんですか。全く知りませんでした」

「どうか手を握ってやってください。あなたが呼びかけてくだされ

ば、千春はもう一度目を覚ますかもしれません」
　彼女の目は真剣だった。もう一度愛娘と目と目を合わせて見つめ合いたい。その切なる願いが痛いほど伝わってくるようだった。
「千春」
　透は布団の中に手を伸ばした。透の指先が触れたのは硬い骨の感触だった。針金のように細い指。皿のように薄い掌。痩せて骨ばった千春の左手から伝わってくるのはすでに死が避けられないものであるという厳然たる事実だった。涙が堰を切って溢れ出た。二つ三つと千春の布団に涙の染みが広がっていく。透は俯き嗚咽を押し殺すように奥歯を噛締め強く目を閉じた。千春のためなら何でもできる。自分の命を削ってでも千春を救いたい。透は千春の手を包み込むように両手に挟み込んだ。叶わない願いだとは分かっている。それでも奇跡を祈らずにはいられなかった。
「千春」
　透が涙声で呼びかけたとき握り締めていた手がぴくりと動いた。枯葉が風に揺れた程度の心許ない感触でしかなかったがそれは幻ではなかった。ハッと透は目を見開いた。
「今、今・・・」
　驚き急き込んで言葉が出てこない。しかしそれだけで千春の両親は全てを理解したようだった。
　千春。千春。両親が代わる代わる愛娘に向かって呼びかける。
「千春！千春！」
　透がさらに強く呼びかけると千春は微かに顎を動かしやがてうっすらと目を開けた。
「千春！分かるか？俺だ、千春」
　焦点の合っていない眼差しが少しずつ透に向けられる。透は息を飲んで千春の瞳が自分を捉えるのを待った。
「・・・お、お兄ちゃん・・・」
「千春」
「・・・私、やつれちゃって、ひどい顔してるでしょ？・・・こん

な顔見せたくなかった」
　途切れ途切れに千春は言葉を紡いだ。遠くを走る車の音にさえ千春の消え入りそうな声は掻き消されてしまいそうで透は息を殺して千春の微かな口の動きに注視した。
「何言ってるんだ。千春はいつだって綺麗だよ」
「・・・ありがと」千春は力なくゆっくりと頬を緩めた。「私、お兄ちゃんに嘘ばかりついてた。あの日本当は、一晩のつもりだったの。・・・夜明けがきたら・・・お兄ちゃんが起きる前に帰ろうと思ってた。それで十分自分の人生に満足できると思ってた。でも、・・・お兄ちゃんの隣は静かで温かくて居心地が良くて・・・。もう少しだけ。あと少しだけって。・・・ごめんね。・・・私のわがままでお兄ちゃんの、・・・透さんの人生に迷惑かけちゃって」
　そこまで言うと千春は苦しそうに咳をした。枯れ木を折るような乾いた空咳があまりに頼りない。千春の姿が霞んで見えるような気がする。目の前で今にも気化してしまいそうな千春にすがりつくように透は千春の手を握る力をさらに強くした。
「そんなことない。今日千春がくれたこのスーツで俺は教壇に立ったんだ。千春のおかげで俺は生き返れたんだよ」
　千春の色を失った唇が微かに弱々しく動く。何と言おうとしているのか。もはや声は全く聞き取れない。
「千春」
　千春が死んでしまう。しかし、もうその現実をどうすることもできない。透には声を限りに千春の名前を呼ぶことしかできなかった。
　透のスーツ姿を愛しそうにじっと見つめる千春の両目が次第に潤みを増していった。もう声は出ず唇を動かすこともままならないからと千春は乾いた身体を絞るようにしてその瞳に涙を湛え必死に喜びの気持ちを伝えようとしてくれたのだ。しかし涙は頬にこぼれることはなかった。千春の命が今枯れ果てようとしている。
「千春。分かる？お母さんよ」
　千春の母親が千春の右手を握り呼びかける。千春は母親の方に顔

を向けにこりと微笑んだ。ゆっくり頷いたかと思うとすぐに千春の手が母親の手からコトリと滑り落ちた。誰もがそのときが来たことを悟った。安らかな眠りが訪れた瞬間だった。

22

校庭に出ると髪が揺れスーツの裾がはためいた。ここ数日雨が降っていなかったせいか桜の花びらを舞い上げる風が埃っぽい。
「風が強いね」
「うん。今日で見納めかな」
電話の向こうの春美が残念そうに言った。吹き抜ける風に目を細めながら見上げれば校庭の桜は花弁よりも深緑色の葉の方が目立ち始めている。春美もどこかで同じように目にゴミが入るのを気にしながら桜の樹を見上げているのだろうか。
「毎年思うけど、桜ってあっという間だよね。この時期はいつも忙しくてゆっくり眺められたためしがない」
「私も、今年は忙しくて花見する余裕なかったな」春美の口調はため息交じりだったが何かを成し遂げた感じがあった。「出してきたよ。ようやく」
春美が出したもの。それは婚姻届のことだ。先月から同棲を始めたことは和馬から聞いていたが、今日という日に法律の上でも二人は晴れて夫婦になったということになる。
「そっか。おめでとう。こんな日が来ることを俺も心待ちにしてたよ」
「ありがとう。なんだか長い道のりだったわ。でもこれでいろんなことが吹っ切れた気がする」
春美の言葉には実感がこもっていた。二人の軌跡を辿れば透も確かに長かったと思う。何よりも前夫との離婚に時間がかかり過ぎたのが誤算だっただろう。
透の部屋を放火して逮捕された春美の前夫に春美は離婚を申し出た。自分を殺そうとするような犯罪者と夫婦関係を続けられるはずがない。和馬という存在がなかったとしても春美は離婚を選んだだろう。そして和馬や透は当然前夫が速やかにそれを了承するものと

思っていた。それが社会人としての常識だと高を括っていたのだ。しかし現実には彼は春美の希望に応じようとはしなかった。それどころか、春美がいなければ頭がおかしくなって生きていく自信がない、自殺するかもしれないなどと半ば脅すようなことを口にした。放火事件についての刑事裁判においても彼の弁護士は心神喪失状態による無罪を主張。愛する妻の度重なる浮気によるストレスで被告人は精神の健康を著しく損ない犯行当時は責任能力に欠ける状態にあったと弁明した。事件当時の被告人の責任能力の有無についてが争点となり裁判は難航。被告人の精神鑑定が要求され、さらに勾留中に春美の前夫が衣服を使って首吊り自殺を図るという事件が起こり二ヶ月以上の入院加療が必要となって裁判は一層長期化した。その後の法廷において春美は和馬が聞いている前で過去の男性関係についてあれこれと問い質されたこともあった。

和馬と春美にとっては苦難の連続だったに違いない。それでも最終的には愛を成就させた二人の互いを想う気持ちの強さに彼らの姿を間近に見てきた透は万感胸に迫る思いだった。

「二人ともすごいよ。本当によく頑張ったよなぁ。きっと幸せになれる。俺が保障するよ」

「何それ。すごい自信ね」

「あれだけのことを乗り越えてきたんだから幸せにならない方がおかしいよ」

「そうね。我ながらよくやったと思うわ。透君にもいっぱい迷惑掛けちゃったね」

「迷惑はお互い様。これからもよろしくね」

「こちらこそよろしくね。透君は私より年上だけど義理の弟になるんだよね。何か変な感じ」

「義姉さんに何を甘えようかなぁ」

「ちょっと、やめてよ」張り詰めていたものがすこし緩んだような春美の柔らかい笑い声が聞こえてきた。「あれから二年が経つのね」

「ああ。今から千春のところに行ってくるよ」

今日は千春の二回目の命日だった。二年前の今日、透は教師生活を取り戻し、その犠牲のように千春は息を引き取った。あの日からの二年間は透にとっても決して楽なものではなかったが、周りのバックアップもあって何とか今日まで引きこもりに戻らずに暮らすことができている。今年もこのスーツ姿を千春に見せられると思うとこの一年も無事に乗り切れそうな気がしてくる。千春にもらったスーツは普段は大切に仕舞って入学式の日にだけ着ることにしていた。毎年この日のこの格好で千春の墓前に立つことを二年前眠りについた千春に誓ったのだ。

電話を切ると、透は花びらがまだ残っている枝を探して慎重に折った。千春には桜が似合う。結局千春と花見をすることは叶わなかったのに透はそう思って去年も同じようにこの桜の樹の枝を墓前に飾っていた。

「こらっ。桜泥棒！」

驚いて振り返るとそこには一人の女子生徒が透を睨みつけるように立っていた。

「なんだ、春香か。びっくりさせるなよ」

「なんだ、じゃないわよ。その枝どうすんの？」

「どうするって、その・・・部屋に飾るんだよ」

「ふーん。綺麗だもんね」

そう言って春香はニヤニヤと笑う。透は可憐な桜の枝を手に頬が赤らむのを感じた。春香の視線が透の顔に纏わり付いてくる。その目は透が部屋に桜を活けるなんて似合わないと言いたげだった。

「なんだよ」

「別に。・・・それよりさ、また神谷先生が担任だね。これで私、三年間ずっと先生のクラスだよ」

「そう言えばそうだな」

「そう言えばって何よ。こんな偶然なかなかないのよ」

「そうでもないだろ。他にもあと二人ぐらいいたぞ」

「それはそうだけど・・・。とにかく、また今年もよろしくね。じ

ゃね」
春香は小さく手を振ると元気良く制服のスカートの裾を翻らせて透に背を向け小走りに去っていった。風に揺れる春香の長い髪が透の脳裏に千春の姿を思い起こさせる。
透は風にそよぐ桜の枝を見つめながら千春の名前を呼んだ。
千春。あの春に、君は逝ってしまって、そしてもう二年が過ぎた。僕は来年の今日もきっとこの場所に立って君の事を想って桜の枝を手折るだろう。
なぁ、千春。過去には戻れないってことは分かってる。分かってるんだけど、今でもよく思うんだ。俺たちにはこんな結末しかありえなかったのかなって。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5292j/

君がいない春でも

2011年3月31日21時55分発行